多賀城市文化財調査報告書　第27集

山王遺跡

第10次発掘調査概報

（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）

平成３年３月

多賀城市埋蔵文化財調査センター
建設省東北地方建設局仙台工事事務所

山王遺跡

第10次発掘調査概報

（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）

序

多賀城市には、古代東北の政治や文化交流の拠点として栄えたという誇り得る歴史があります。この長い歴史の蓄積を現代に活かし、さらに将来に向けて創造的に継承していくことが本市にとっての大きな目標であり、現在「活力とふれあいのあるまち史都多賀城」をスローガンにかかげ、新しいまちづくりに取り組んでいます。

さて、仙台湾高規格幹線道路の一環として計画された仙塩道路の建設も、こうしたまちづくりに密接な関連をもつものであり、本市では昨年度からこれに伴う発掘調査に着手し、今年度も引き続き調査を実施いたしました。この調査は、当教育委員会と宮城県教育委員会が、工事を担当する建設省東北地方建設局仙台工事事務所とそれぞれ委託契約を締結して行うもので、今年度はインターチェンジ部分にあたる山王遺跡北東部の八幡地区を調査対象としました。

調査の結果、古墳時代から中世にかけての数多くの遺構を発見し、特に多賀城国府域における計画的地割を裏付ける道路跡等の遺構や、中世の屋敷跡を幅広い範囲で確認しました。また、これまで多賀城城外では発見例の少なかった奈良時代の建物跡や多種多様の遺物がまとまって発見され、多賀城周辺地域の具体的様子を知るうえで貴重な資料が得られました。

最後に本書を刊行するにあたり、発掘調査の条件整備等に多大なご尽力をいただいた建設省東北地方建設局仙台工事事務所や、野外調査から資料整理まで一環してご指導、ご協力を賜った宮城県教育委員会など関係機関の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成３年３月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長　斎藤一司

例　　言

1．本書は、建設省東北地方建設局仙台工事事務所が担当する仙塩道路建設計画に伴う山王遺跡（第10次調査）の調査概報である。

2．本書には、平成２年度に多賀城市埋蔵文化財調査センターが担当した地区の成果を収録している。

3．発掘基準線は、Ａ区の東側に設定した原点（0.0）を通る真北方向の直線を南北基準線とし、それと直交する東西方向の直線を東西基準線とした。この原点を０として調査区内に3mのの方眼を組み、東西方向は原点から東をＥ、西をＷとして原点から１ｍ離れる毎にアラビア数字でＥ１、Ｅ２、Ｅ３……、Ｗ１、Ｗ２、Ｗ３……と表わした。南北方向は原点から北をＮ、南をＳとして同様に表わした。原点の国家座標はＸ＝188,880.000m、Ｙ＝13,230.000mである。

4．遺構は、発見順に一連番号を付した。但し、隣接地を同時に調査している文化財保護課担当分との重複を防ぐため、5001番からとした。

5．土色については、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1973）を参照した。

6．第１図は、５千分の１の多賀城市都市計画図を複製して使用した。

7．発掘調査及び本書の作成に際しては、宮城県教育庁文化財保護課の佐藤則之、菅原弘樹、天野順陽、高橋栄一氏のご教示に負うところが大きい。また次の方々及び機関から指導、助言を得た。（敬称略）

斎藤孝正（文化庁）
平川　南、永嶋正春（国立歴史民俗博物館）
沢口　滋
宮城県教育庁文化財保護課
東北歴史資料館
宮城県多賀城跡調査研究所

8．本書は、調査を担当した千葉孝弥と石本　敬が執筆、編集した。なお、それらの作業を菊池豊、佐藤悦子、柏倉霜代、須藤美智子、熊谷純子、黒田啓子が援けた。

9．発掘調査の記録、出土遺物は、多賀城市教育委員会が保管している。

10．本書と現地説明会資料等で内容が異なる場合は、本書が優先するものである。

調　査　要　項

1．遺　跡　名　　山王遺跡（宮城県遺跡登載番号 18013）

2．所　在　地　　宮城県多賀城市南宮字八幡 120・121他

3．調査面積　　4,000㎡

4．調査期間　　平成２年４月16日～12月19日

5．調査主体　　多賀城市教育委員会　　教育長　櫻井　茂男

6．調査担当　　多賀城市埋蔵文化財調査センター

所　長　斎藤　一司

主　査　赤坂　みゑ子

研究員　滝口　卓　　石川　俊英

〃　　千葉　孝弥　　石本　敬　（本調査担当）

技　師　相沢　清利

7．調査補助員　　菊池　豊

8．調査参加者　　赤間かつ子、芦野しず子、阿部けい子、阿部トシ子、阿部敏子、遠藤一代、阿部美智子、阿部美津子、大友良子、大山貞子、小野玉乃、小野寺恵子、小笠原マキ子、加藤昭一、加藤文一、菅野恵子、熊谷あつ子、熊谷きみ江熊谷好子、後藤恵子、後藤はつみ、後藤みよ子、桜井エイ子、佐々木四郎佐々木忠志、斎藤忠次郎、佐藤容子、下道博信、菅原絹代、鈴木一郎、高野敏子、武田りき、千葉孝一、角田静子、平山節子、星忠次郎、松浦正松本喜一、水越良子、渡辺園恵、渡辺幹子、渡辺ゆき子 、菊地みち子相沢けい子、杉田美貴子（遺物整理員）

本 文 目 次

序　文
例　言
調査要項

Ⅰ. 調査に至る経緯と調査経過 …… 1
Ⅱ. 発見遺構と遺物 …… 5
1. 層　序 …… 5
2. 古　代 …… 5
A. 道　路　跡 …… 6
B. 掘立柱建物跡 …… 13
C. 竪穴住居跡 …… 13
D. 井　戸　跡 …… 16
E. 溝　　跡 …… 21
F. 土　　坑 …… 22
3. 中　世 …… 32
A. 掘立柱建物跡 …… 32
B. 溝　　跡 …… 33
C. 井戸跡・土坑 …… 40
Ⅲ. ま　と　め …… 42

写真図版 …… 45

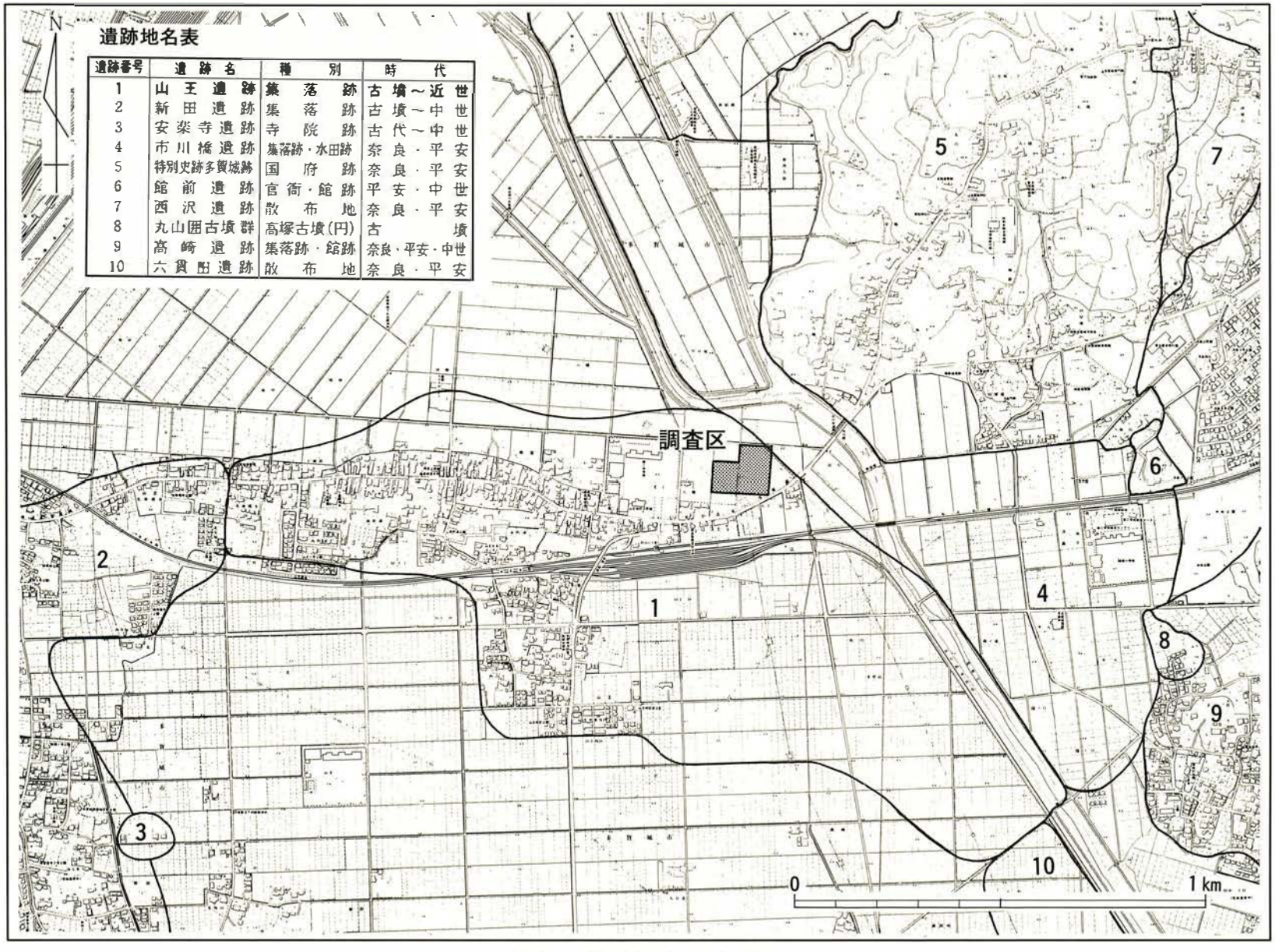
Ⅰ　調査に至る経緯と調査経過

仙台湾高規格幹線道路事業計画の一環として建設計画された仙塩道路は、仙台市中野から多賀城市を経て利府町春日に至る7.1kmの自動車専用道路である。このうち、多賀城市内を通る路線敷内には、埋蔵文化財包蔵地として山王遺跡と市川橋遺跡がかかることが当初から明らかになっていた。さらに、昭和57年に宮城県教育委員会と多賀城市教育委員会が分布調査を実施したところ、前記の二つの遺跡の南側に新たに包蔵地が発見され、六貫田遺跡として登録するに至った。この結果、多賀城市内では路線敷内の全てに遺跡がかかることになり、特に山王遺跡は、これまで特筆されてきた古代陸奥国府多賀城と密接な関連をもつ大規模な集落跡としての性格ばかりでなく、古墳時代や中世においても居住域として幅広く利用されてきたことを裏付ける数多くの遺構・遺物が発見されていることから、長期的な見通しを持った調査の必要性が考えられた。

多賀城市教育委員会における本事業とのかかわりは、仙塩道路建設を担当する建設省東北地方建設局仙台工事事務所から宮城県教育委員会を通して調査依頼の打診を受けた昭和57年にさかのぼる。その後内部での調整を経て、昭和63年７月に三者による第一回の連絡会を開催するに至った。協議の結果、平成元年度より発掘調査を受託することとし、はじめにインターチェンジ予定地を対象として調査を実施することに決定した。この年度は、7,000㎡の対象地域のうち5,000㎡は宮城県教育委員会が、残りの2,000㎡については多賀城市教育委員会が分担することとなり、それぞれ東北地方建設局と委託契約を締結した後、本市担当分は７月から12月にかけて調査を実施した。この調査においては、方形に堀を巡らせた中世の屋敷跡や、計画的な「地割り」の存在を指摘できる古代の道路跡や建物跡などが調査区のほぼ全域で発見されている。なお、調査区が隣接したことから、調査概報は宮城県教育委員会が相方の成果をまとめたうえで執筆、刊行している（宮城県文化財調査報告書第138集）。

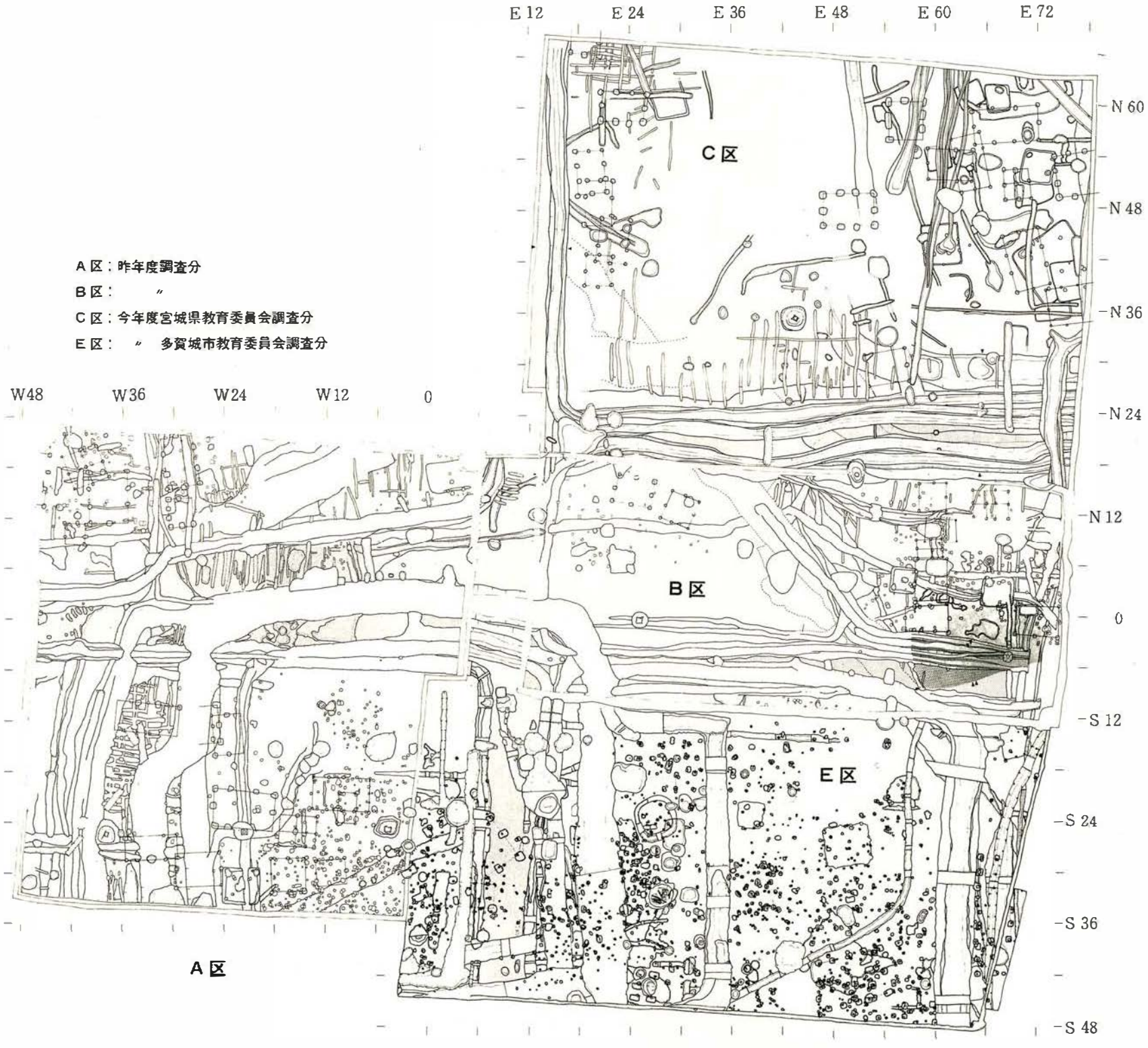
今年度の調査は、昨年度の調査区Ｂ区の南側に位置するＥ区の事前調査と、その東側に位置するＦ区の確認調査で、合わせて4,000㎡を対象とした。調査期間は４月16日から12月19日までである。また、宮城県教育委員会もほぼ同様の期間で、本市担当分の北側に位置するＣ区とＤ区を調査し、10月には共同で現地説明会を開催している。野外調査後の遺物整理については両教育委員会がそれぞれ担当した地区からの出土遺物を分担して行ない、調査概報は密接な協議や連絡をとり合いながら、今年度は別個に執筆、刊行することとした。

なお、東北地方建設局との契約方法は、昨年度と同様別々に委託契約を結び、独自に会計予算を組んで調査費用を支出した。また当教育委員会においては、12月の野外調査終了事点で契約金額に減少が生じる見込みになったことから、平成３年２月付けで契約変更を行っている。



遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1	山王遺跡	集落跡	古墳～近世
2	新田遺跡	集落跡	古墳～中世
3	安楽寺遺跡	寺院跡	古代～中世
4	市川橋遺跡	集落跡・水田跡	奈良・平安
5	特別史跡多賀城跡	国府跡	奈良・平安
6	館前遺跡	官衙・館跡	平安・中世
7	西沢遺跡	散布地	奈良・平安
8	丸山団古墳群	高塚古墳(円)	古墳
9	高崎遺跡	集落跡・館跡	奈良・平安・中世
10	六貫配遺跡	散布地	奈良・平安

第1図　遺跡分布図


E 12
E 24
E 36
E 48
E 60
E 72
N 60
N 48
N 36
N 24
N 12
0
S 12
S 24
S 36
S 48
W48
W36
W24
W12
0
A区：昨年度調査分
B区：　〃
C区：今年度宮城県教育委員会調査分
E区：　〃　多賀城市教育委員会調査分
C区
B区
E区
A区

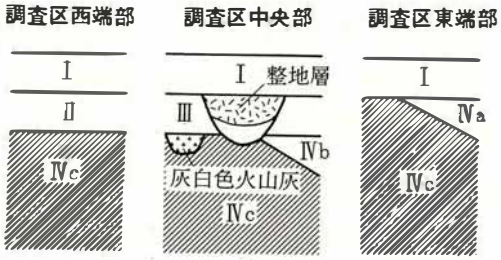
第2図　遺　構　全　体　図

Ⅱ 発見遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は道路跡１条、掘立柱建物跡26棟、柱列跡３条、竪穴住居跡６軒、井戸跡14基、土坑14基、溝跡20条などである。年代は古墳時代から江戸時代に及んでいる。また、これらの遺構や堆積層、表土からは土師器、須恵器、赤焼き土器、陶磁器、瓦、木製品、金属製品、土製品、植物遺体、貝、骨などが大量に出土している。本書では、古代・中世の遺構の内、主なものについて概要を報告し、他は後日刊行予定の正式報告書に譲りたい。

1. 層　　序

調査区はかつて大部分が水田として使用されていたため、その部分については周辺一帯の地盤となっている黄褐色の砂層まで削平を受けている。しかし、畑地として利用された部分では中世の堆積層が残っており、それを媒介として新旧二時期の遺構を段階的に調査することが可能であった。また黄褐色の砂層は多くの層に細分できるが、それらの中にはわずかであるが遺物を含んでいるものがある。以下それらの概要を説明するが、いずれも部分的なものであり相互の関係は把握していない。



第３図　土層模式図

Ⅰ　層　表土

Ⅱ　層　暗褐色（10Y R ¾）シルト。調査区西壁際にのみ分布している。この層上で土坑１基を検出している。

Ⅲ　層　にぶい黄褐色（10Y R ⅝）シルト。調査区中央部の旧畑地部分にのみ残存している。中世の遺構はこの層の上面から掘り込んだものと、この層におおわれるものとがある。

Ⅳa 層　にぶい黄色(2.5Y ⅝) 砂。調査区南東隅にのみ分布。炭化物粒が多く含まれている。滑石製の臼玉が大量に出土した。

Ⅳb 層　にぶい黄色（2.5Y ¾）シルト。調査区中央部の北側にのみ分布。古墳時代中期の土器が出土している。上面は古代以降の遺構確認面となっている。

Ⅳc 層　黄褐色（2.5Y ¾）砂～砂質土。地山の砂層である。Ⅳa～Ⅳb層の下をすべてⅣc層と一括した。遺物は含んでいない。

2. 古　　代

古代の遺構としては道路跡１条、掘立柱建物跡16棟、柱列跡１条、竪穴住居跡６軒、井戸跡３基、土坑７基、溝跡６条などを発見した。

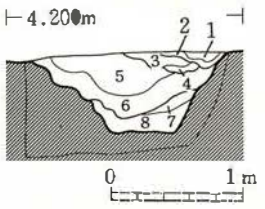
A．道　路　跡

〔ＳＸ5150道路跡〕　南北方向に走る道路跡である。東西両側に素掘りの側溝を伴っており、西側のものがＳＤ5064溝跡、東側のものがＳＤ5078溝跡である。それぞれほぼ同位置で４時期の変遷が認められた（古い順にＳＤ5064Ａ→Ｂ→Ｃ→Ｄ、ＳＤ5078も同じ）。ＳＤ5064溝跡はＡ区で検出した側溝ＳＤ88溝跡、ＳＤ5078溝跡はＢ区で検出した側溝ＳＤ161・192・162溝跡とそれぞれ合流している。路面には舗装した痕跡が認められず、堆積層も検出できなかった。

ＳＸ5150Ａ　東側溝ＳＤ5078Ａが残存状況不良のため路幅は計測し難い。凡そＣ期のものと同規模と考えられる。西側溝ＳＤ5064Ａは、ＳＥ5069の東側のトレンチでみると断面形は逆台形を呈し、上幅0.8m 以上、下幅0.5m 、深さ0.8m を計る。埋土は黄褐色や暗灰黄色の薄い砂の層が交互に堆積しており、自然堆積した様相を呈している。遺物はほとんど出土していない。

ＳＸ5150Ｂ　東側溝ＳＤ5078Ｂが残存状況不良のため路幅は計測し難い。凡そＣ期のものと同規模と考えられる。西側溝ＳＤ5064Ｂは、断面形が緩やかなＶ字状や舟底状を呈している。規模は上幅1.4m 、深さ0.5m を計り、埋土はＡ期のものと類似している。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶などが出土している。土師器杯にはロクロ調整後底部を回転ヘラケズリしたものがあり、須恵器杯にはロクロからの切り離しが静止糸切りの後回転ヘラケズリを加えたものや回転糸切りのままのもの、ヘラ切りのままのもの、手持ちヘラケズリしたものなどがある。

ＳＸ5150Ｃ　本期は４時期を通して最も残存状況が良好である。路幅は両側溝の心々で計ると6.2m である。方向は西側溝ＳＤ5064Ｃの最も直線的なＳ18～Ｓ38間における底面の中軸線で計ると北で２度11分東に偏している。ＳＤ5064Ｃは規模が上幅 1.2～0.6ｍ、深さ 0.3ｍを計り、埋土はにぶい黄褐色や灰黄褐色のシルトである。ＳＤ5078Ｄは規模が上幅 0.8m 、深さ0.3m を計り、埋土は灰黄褐色のシルトである。遺物はＳＤ5064Ｃから土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・蓋・甕・瓶、灰釉陶器椀、漆器椀、ＳＤ5078Ｃからは土師器杯・甕、赤焼き土器杯などが出土している。ＳＤ5064Ｃから出土している灰釉陶器椀は２点あり、いずれも黒笹90号窯式に比定できる東濃産の製品である。漆器椀は口縁部の小片であるが、内外両面に黒漆を塗ったものである。



土層観察表

層位	土色	土性	備考		層位	土色	土性	備考	
1	灰黄褐色(10YR⅘)	粘土質シルト		D	5	灰黄褐色(10YR⅘)	粘土	西半に砂粒を多く含む	B
2	黒褐色(10YR⅓)	粘土	下部は暗褐色粘土、砂を含む	〃	6	褐灰色(10YR⅘)	〃	黄褐色砂ブロックを多量に含む	〃
3	にぶい黄褐色(10YR⅘)	粘土質シルト	砂粒を含む	C	7	黄褐色(2.5Y⅘)	砂		A
4	〃（〃）	シルト	砂粒、黄色土粒を多く含む	〃	8	暗灰黄色(2.5Y⅘)	〃	黄灰色粘土ブロックを含む	〃

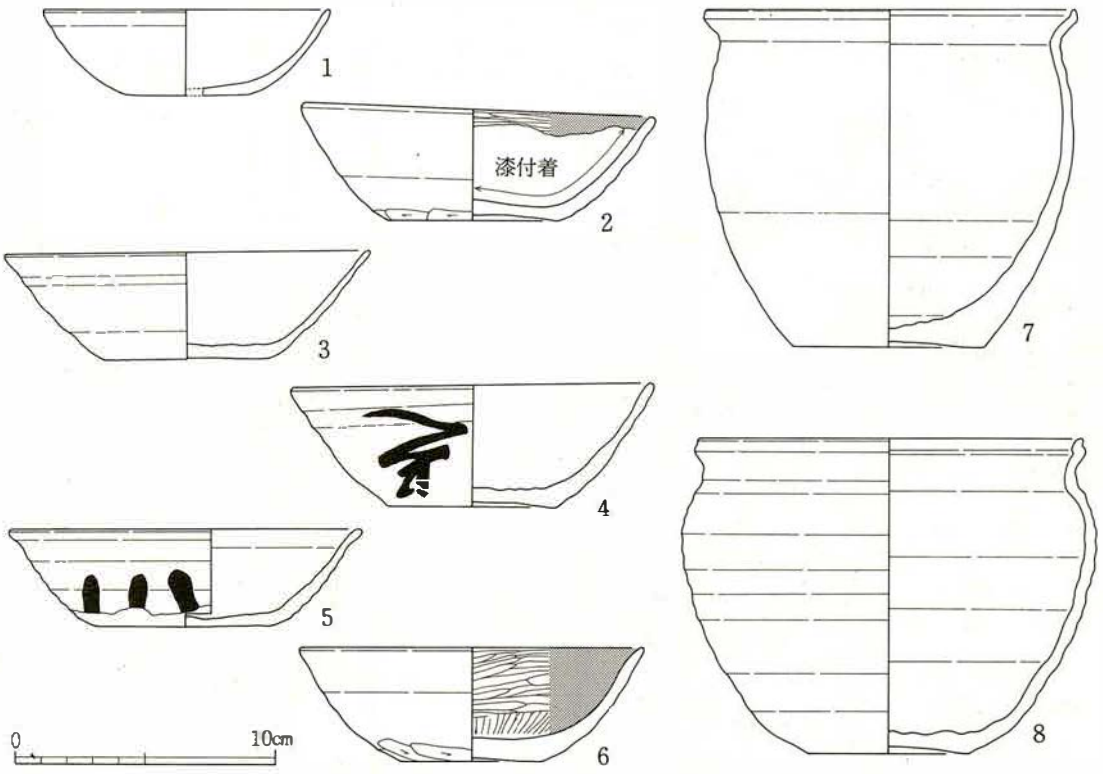
第４図　ＳＤ5064溝跡（道路西側側溝）セクション図

SX299
東西道路跡
SD88
SD27
SD150
SD161・192・162
遺物包含層
(古墳時代)
SD5064
SD5042
SD5009
SD5007
SK5118
SD180
SI5129
SK5114
SK5043
SK5037
SK5034
SE5069
SX5150
南北道路跡
SI5105
SI5065
SI5104
SK5031
SD5029
SD5003
SD5024
SD5001
SD5038
SD5050
SB5151
SD5039
SE5021
SD5078
SK5099
SK5011
SK5081
(SD5130)
SD5029
SD5052
SK5086
(SE5056)
SB5155
SI5111
SX5123
SI5120
SB5152
SK5026
SB5174
SI5112
SD5051
C
S6
S12
S18
S24
S30
S36
S42
S48
E0
E6
E12
E18
E24
E30
E36
E42
E48
E54
E60
E66
E72

第5図　E区遺構全体図

SX 5150D　本期は4時期を通して最も残存状況が不良であり、ＳＤ5064ＤはＳ27ラインまで、ＳＤ5078ＤはＳ33ラインまでしか検出できなかった。路幅は両側溝の心々で計ると5.3mである。ＳＤ5064Ｄは規模が上幅0.6～0.4mで深さは0.1mを残すのみである。埋土は黒褐色の粘土質シルトである。ＳＤ5078Ｄは規模が上幅0.5mで深さはわずかに5cmを残すのみである。遺物はＳＤ5064Ｄから土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・蓋・瓶・甕、赤焼き土器杯、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀、ＳＤ5078Ｄから土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・高杯・瓶・甕、赤焼き土器杯・高台付杯などが出土している。灰釉陶器椀は黒笹90号窯式に比定される東濃産の製品である。

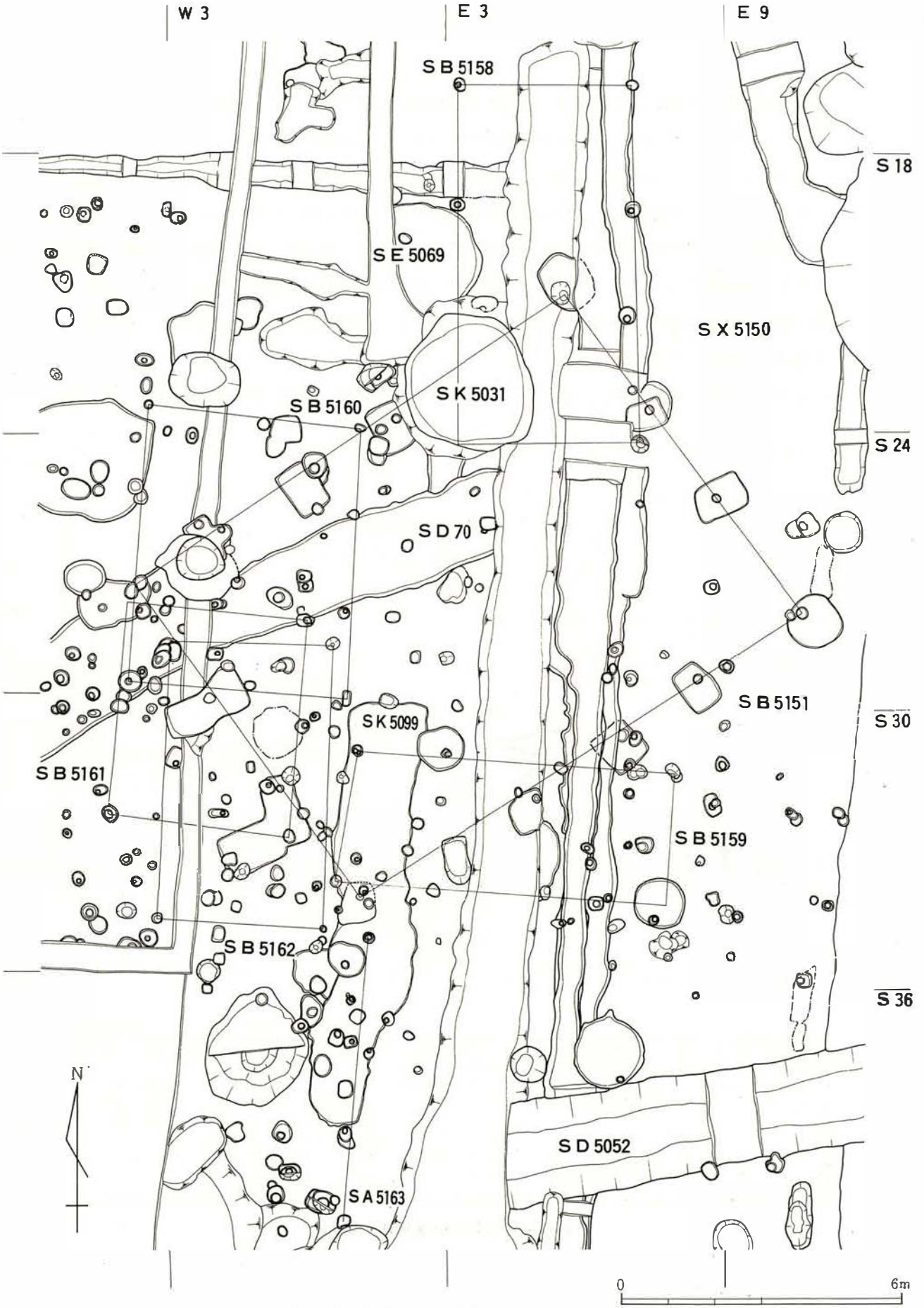
なお、本道路の南端部では、東側溝ＳＤ5078の東壁に東西にのびるＳＤ5141が連結している。



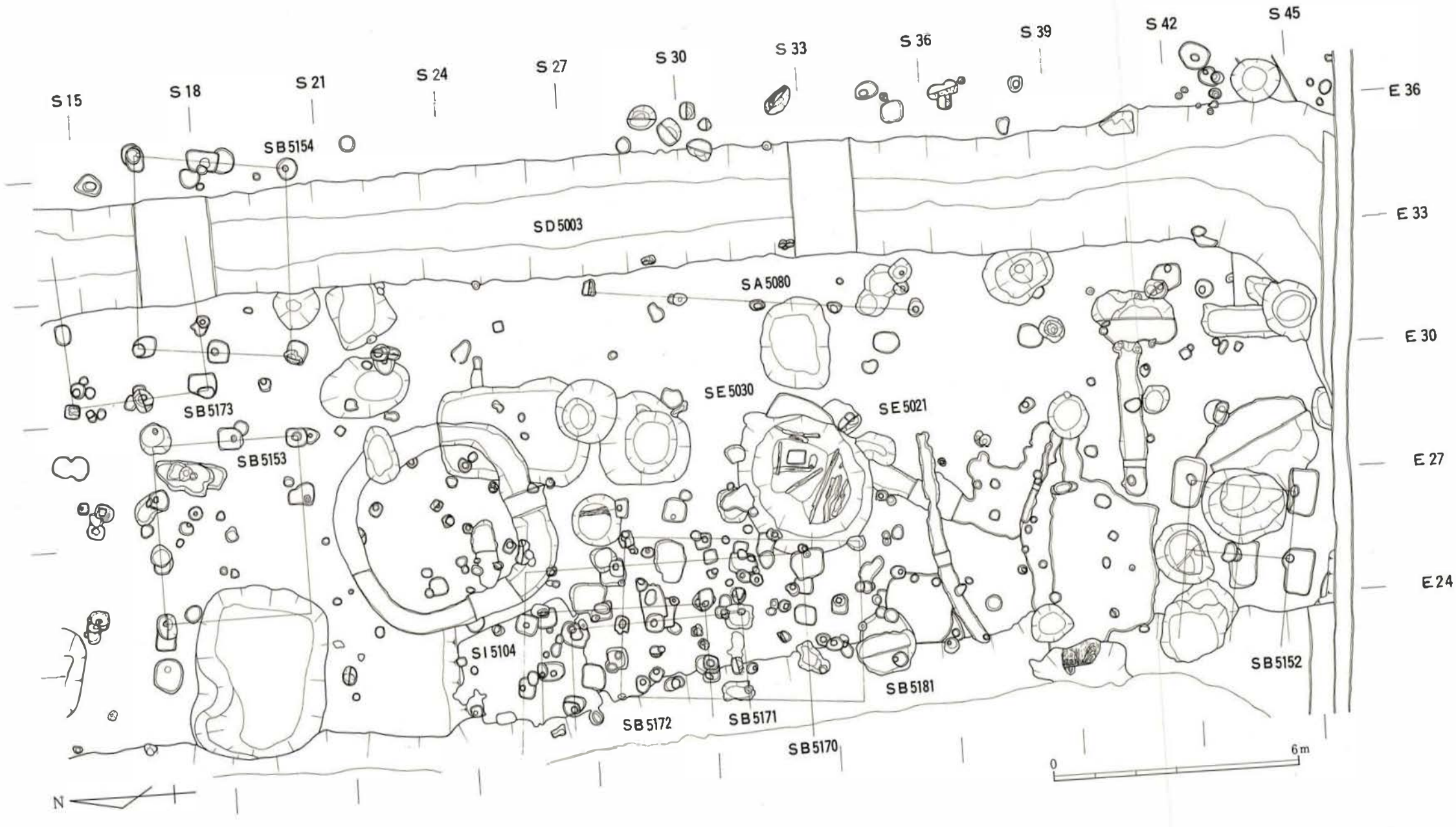
単位：cm　（　）は推定値

No	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	登録No	図版No	備考
1	赤焼土器	杯	C期1層	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	11.0	(4.8)	3.3	R-298	6－1	
2	土師器	〃	B期2層	ロクロナデ 底部回転糸切り→手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	13.6	6.6	4.3	R-307	6－2	内面漆付着
3	須恵器	〃	B期1層	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	(14.0)	6.3	4.1	R-301	6－3	底部ヘラ描「－」
4	〃	〃	〃	〃　〃	〃	14.0	6.5	4.7	R-302	6－4	体部に墨書
5	〃	〃	B期2層	〃　〃	〃	(13.5)	6.5	3.8	R-308	6－5	〃
6	土師器	〃	A期1層	ロクロナデ 底部回転糸切り→手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(13.2)	5.4	4.3	R-309	6－6	
7	〃	甕	C期1層	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	(14.3)	7.4	12.8	R-297	6－7	
8	〃	〃	〃	〃　〃	〃	(14.7)	6.2	12.0	R-299	6－8	

第6図　ＳＤ5064溝跡出土遺物



第7図　調査区西端部遺構配置図



第8図 調査区中央部遺構配置図

B．掘立柱建物跡

調査区中央部及び南東隅で多く発見している。地山上で検出しているものが多く、中世以降のものとの区別が困難なものがある。また、部分的な検出にとどまったものも多い。以下、主なものについて説明する。

〔SB5151建物跡〕　調査区西端部で検出した桁行5間、梁行3間の東西棟である。SD70とSK5099より新しいが他の遺構より古い。北側柱列の東より1間目の柱穴は中世のSK5031によって破壊されているが、他の柱穴はすべて検出した。12個の柱穴で柱痕跡を確認しており、その内9個の柱穴では下部に柱材が遺存していた。方向は南側柱列でみると東で33度33分北に偏している。桁行については、北側柱列で総長約11m、柱間は西より2.19m・2.38m・2.10m・約4.4m（2間分）、南側柱列では総長11.33m、柱間は西より約2.4m・約2.0m・約2.3m・2.00m・2.66mである。梁行については、東妻で総長約8.5m、柱間は北より約3.1m・2.37m・3.09m、西妻では総長8.53m、柱間は北より2.94m・2.47m・3.03mである。柱穴は長辺約1m、短辺0.8～0.7mの長方形を基調とするが不整形を呈するものもある。南東隅の柱穴には径30cmの柱材が遺存していた。遺物は、掘り方埋土から土師器と須恵器の細片が数点出土している。

〔SB5155建物跡〕　調査区南東隅の地山上で検出した桁行4間、梁行2間の東西棟である。SX5123より新しく、SB5174より古い。柱穴はすべて検出し、柱痕跡も確認している。方向は南側柱列でみると東で14度11分北に偏している。桁行については、北側柱列で総長7.16m、柱間は西より1.69m・1.93m・1.84m・1.73mである。南側柱列では総長7.10m、柱間は西より1.71m・1.88m・1.85m・1.67mである。梁行については、東妻で総長5.20m、柱間は北より2.68m・2.52mであり、西妻では総長5.19m、柱間は北より2.53m・2.66mである。柱穴は長辺0.8m、短辺0.7mの長方形を基調とし、柱痕跡は径16cmである。

〔SB5152建物跡〕　調査区南端部の地山上で検出した建物跡である。柱穴4個を検出したにとどまったが北にはのびないことを確認しており、南にのびる可能性も少ないため西へのびるものと見て一応東西棟と把えておきたい。本建物は内部にも側柱と同規模の柱穴があるため総柱建物の可能性がある。方向は南側柱列でみると東で10度9分南に偏している。桁行柱間は南側柱列の東から1間分が1.62mであり、梁行柱間は東妻が総長2.55m（2間分）である。柱穴は長辺1.1m、短辺0.7～0.6mの長方形を呈し、柱痕跡は径30cmである。

C．竪穴住居跡

竪穴住居跡は、調査区中央付近で3軒、北東部で1軒、南東部で3軒検出した。いずれも他の遺構に壊されたり、上部が削平されていたりするなど残存状態は必ずしも良好とはいえない。以下では、このうちの1軒で全体の規模や建て替えの変遷がある程度つかめたものを取り

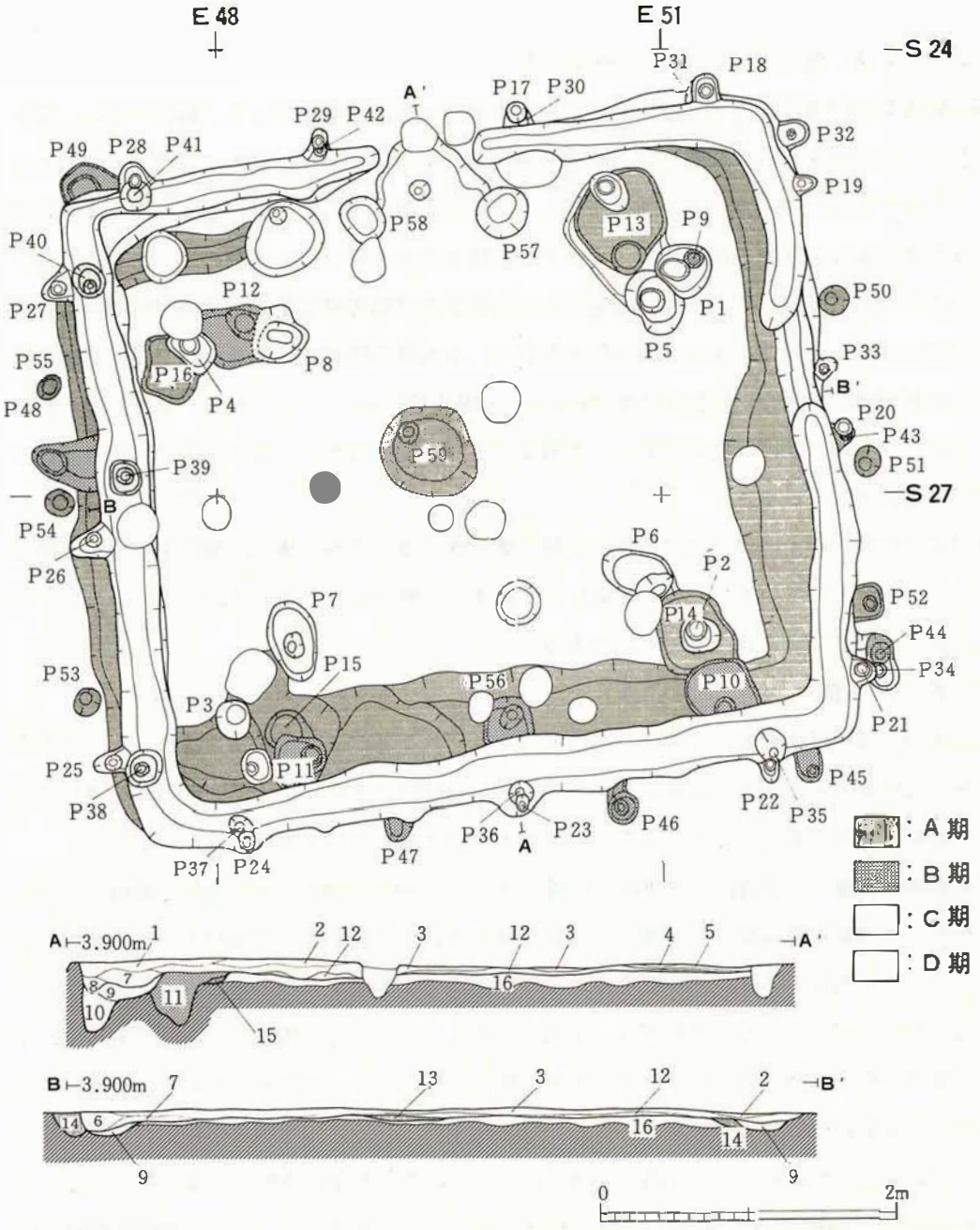
上げて説明する。

〔SI5065住居跡〕　調査区中央付近の東寄りに位置する。平面形は東西がやや長い長方形を呈し、方向は西辺でN－7°－Wである。また、同位置で3度の改築があったことが確認できた。これらの規模は、一番新しいD期で東西約4.9m、南北約4.4mを計り、4時期ともほぼ同規模と考えられる。

SI5065Aは一番古い時期のものであるため、周溝は北辺と西辺でその一部が確認できたにすぎない。しかし、これにより南北の規模が約4.2mと他の三時期に比べやや小さかったことと、逆に東西がわずかに大きかったか、もしくは西側に若干ずれていたことが確認できた。住居構築の際は掘り方を掘り、地山土を用いて4～8cmの厚さで貼床したものと思われる。周溝は西辺でみると断面形が「U」字形を呈し、深さ約15cmを計る。また、東辺と南辺際には床面より一段低くなった部分が周溝状に巡っているが、これが周溝そのものか、あるいは床を貼った際の工程の段階でできたものかは判断できなかった。カマドは、北辺中央に位置するB期以降のカマド内の貼床下面に、焼土や炭化物が薄く堆積していたことから、全ての時期を通じてこの位置に付設されていたものと思われる。また、床面上の四隅付近ではそれぞれ数個のピットが重複しているが、位置関係からこれらが各時期の主柱穴になるものと考えられる。このうち、位置や切り合い関係からP13～16がA期のものと推定された。いずれも掘り方は不整形で、明確な柱痕跡は確認できなかった。さらに、壁まわりで検出した6個の小ピット（P50～55）は、他の三時期がいずれも壁柱穴をもっていることから、これらも同様のものである可能性が強い。

SI5065Bは、主柱穴と壁柱穴の存在から確認できた。周溝は、これに続くC・D期と四辺とも重複すると考えられ、この時期のものは確認できなかった。また、先行するA期の上に2～3cmの厚さで貼床されているが、これがB～D期に共通するものか、あるいは細分できるのかどうかまでは観察できなかった。主柱穴（P9～12）は不整形の掘り方をもち、深さは検出面から30～40cmを計る。柱痕跡が明瞭でなかったため、おもに柱穴の底面が円形にくぼんだ箇所を柱を据えた跡と判断して位置を推定した。また、南辺の中央付近に位置するピット(P56)も埋土の新旧関係から、この時期に属するものと考えられる。P43～49は位置関係や埋土の類似点等から、この時期の壁柱穴と考えたが、特に南辺のものなどは先行するA期に属するという可能性も否定できない。

SI5065Cは、北辺中央のカマド部分を除いて全周する周溝をもつ。幅25～35cm、深さは床面から10～15cmを計り、断面形は逆台形を呈する。主柱穴（P5～8）は不整形の掘り方をもち、深さは約40cmを計る。底面では柱を据えた箇所が一段低くなっているが、形がくずれていることから、あるいは柱の抜き取りがあった可能性もある。壁柱穴（P30～42）は、カマドの



土層観察表

層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山土を斑状に含む	9	黄灰色(2.5Y5/1)	シルト	C期周溝埋土
2	黒褐色(10YR3/2)	〃	〃 をブロック状に含む	10	黒褐色(10YR3/1)	〃	ピット36埋土
3	〃 (2.5Y3/1)	〃	〃 〃 を多く含む	11	にぶい黄橙色(10YR6/3)	〃	ピット56埋土
4	にぶい黄色(2.5Y6/3)	〃	カマド内埋土 炭化物を含む	12	にぶい黄色(2.5Y6/3)	砂質シルト	貼床土
5	黒色(2.5Y2/1)	〃	〃 焼土、灰を多く含む	13	にぶい黄橙色(10YR6/3)	〃	ピット59埋土
6	灰黄褐色(10YR5/2)	〃	D期周溝埋土	14	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	A期周溝埋土
7	黄灰色(2.5Y4/1)	〃	〃	15	褐灰色(10YR4/1)	シルト	A期埋土
8	灰黄褐色(10YR5/2)	〃	ピット23埋土	16	にぶい黄橙色(10YR6/4)	砂質シルト	A期貼床土

第9図　SI5065住居跡実測図

ある北辺で4個、他の三辺で3個づつ配列されている。

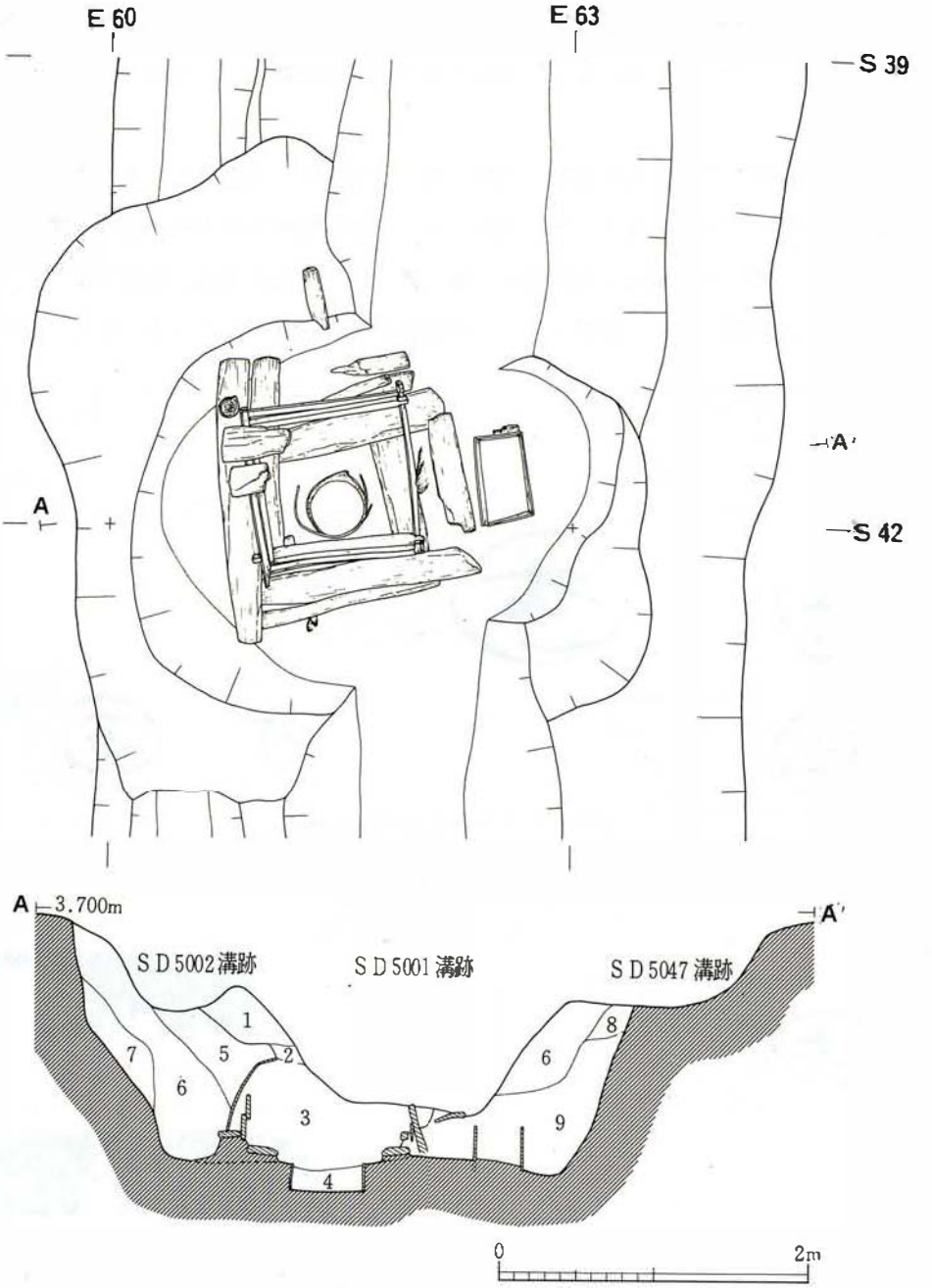
SI5065Dの周溝は、カマド部分と東辺の中央付近で一部途切れている。幅25～45cm、深さは床面から約10cmを計る。断面形はC期と同様逆台形を呈するが、外壁では底面から比較的急な立ち上がりをみせる。カマドは削平が著しく、地山を削り出した側壁の基底部がわずかに残存する程度である。側壁の端部では、カマドに付随すると考えられる2個のピット(P57・58)が検出された。主柱穴（P1～4）の掘り方は円形または略方形を呈し、他の三時期のものよりはやや形が整っている。深さは25～40cmを計り、南西隅の柱穴を除く三箇所で径約15cmの円形の柱痕跡が確認できた。柱間隔は東西約3.2m、南北約2.4mである。また、壁柱穴（P17～29）はB期のものとほぼ同位置にあり、間隔は北辺で1.25～1.35m、他の三辺で1.5～1.7mで規則的に配列されている。

遺物は、住居内埋土中から土師器杯・高杯・甕・甑、須恵器杯・甕、A期貼床中から土師器甕がそれぞれ出土している。いずれも破片で、全体の形態がわかるものは出土していない。なお、土師器は全て非ロクロ調整のものである。

D. 井戸跡

井戸跡は、調査区南東部、中央部、北西部でそれぞれ1基づつの計3基を検出した。このうち中央付近検出のSE5030井戸跡は、これより新しい時期の遺構によって大部分が壊されているため詳細は不明である。したがって、ここでは他の2基について説明する。

〔SE5056井戸跡〕　調査区の南東隅に位置する。SD5001・5002・5047溝跡と重複し、これらより古い。構築の際は掘り方を掘り、底面には土台として長方形の厚板材を井桁状に据えている。この上に木組みの井戸側を載せているが、西辺では外側に同様の厚板材をさらに重ねて、井戸側のずれを防いでいる。井戸側は、上部が消失しているため一段のみの確認であるが、長方形の板材の両端に枘と枘穴を設けて正方形に組んだもので、一辺約90cmを計る。また、この下部には水溜用の円形曲物（図版20－5）が埋め込まれている。井戸側の部材は、北辺と南辺のものが両端に舌状の枘をつくり出し、西辺のものにはこれを受ける枘穴が穿たれている。一方、東辺のものは棒状部材の両端の上部に鉤状のつくり出しを設けて、北辺と南辺の部材の枘がこの内側にかみ合わさるだけの簡単なつくりになっている。隅柱はみられず、上部の部材は廃絶時か、あるいは他の遺構の構築の際に抜き取られたと考えられる。しかし、西辺で2枚の長方形の板材が残存しており、これが井戸側の外周に沿って縦に並べられていることから、各辺にも同様に板材を巡らす構造であった可能性もある。さらに、東辺の外側のやや離れた位置で、掘り方底面に長方形の木枠が単独で据えてあるのが確認できた。長辺56cm、短辺30cm、厚さ1.2cmで、高さは28cmを計る。蓋板や底板はみられなかった。各辺の板材とも両端に切欠きをいれ枘をつくり出す、いわゆる「目違い枘」で組み合わせている。また、木枠内の埋土より



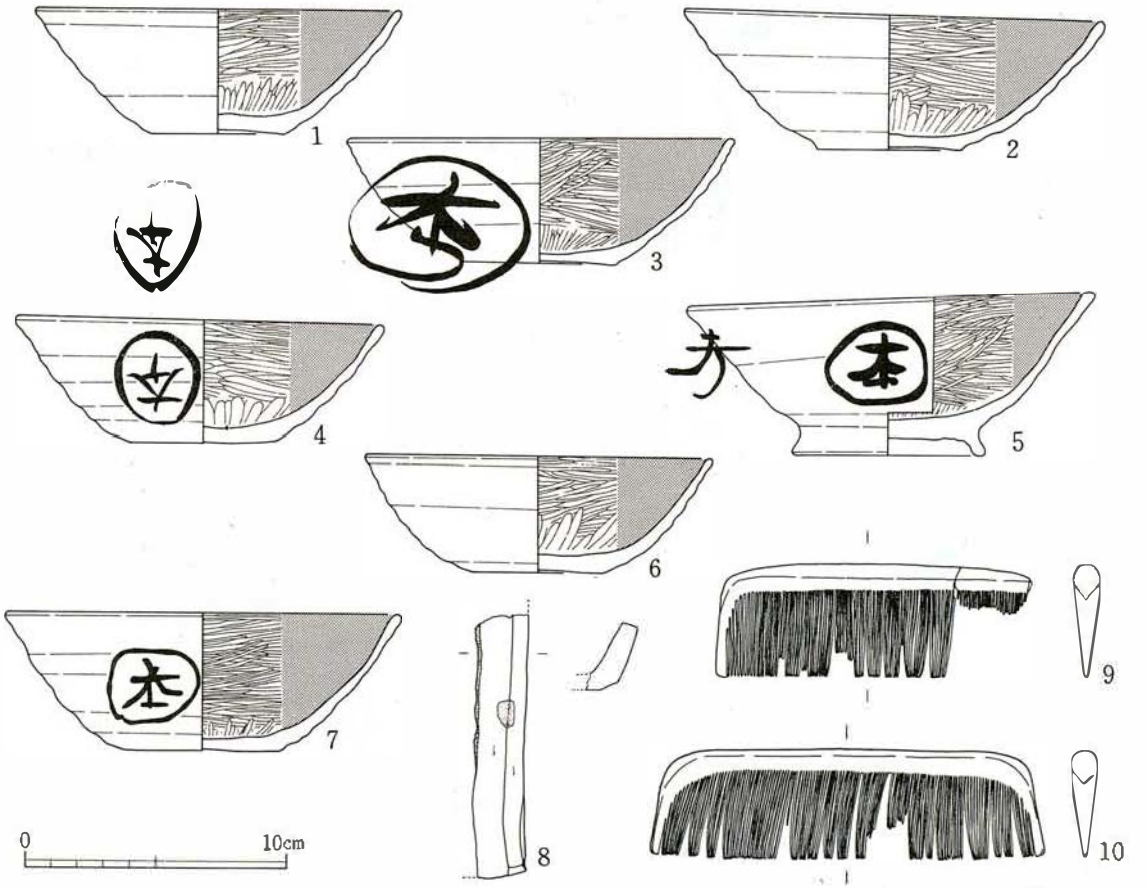
土層観察表

層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1	黒褐色(2.5Y 3/1)	シルト	井戸側内埋土、遺物取上1層	6	オリーブ黒色(5Y 3/1)	シルト	火山灰を若干含む、遺物取上掘方2層
2	オリーブ黒色(5Y 3/1)	〃	〃 〃 〃	7	緑灰色(7.5GY 5/1)	砂質シルト	掘方埋土 〃
3	黒色(5Y 3/1)	粘土質シルト	〃 〃 2層	8	〃 (〃)	〃	〃 〃
4	〃 (〃)	シルト	〃 〃 3層	9	〃 (〃)	〃	〃 〃
5	オリーブ黒色(5Y 3/1)	シルト	掘方埋土、遺物取上掘方1層				

第10図　SE5056井戸跡実測図

中央に孔をあけた車輪形の木製円盤（図版７－９）が１点出土している。掘り方の埋土は、地山土などをブロック状に多量に含んだ黒色土及び緑灰色砂質土で、灰白色火山灰が斑状に若干含まれている。

遺物は、井戸埋土中では土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・高台付杯・蓋・甕・瓶、平瓦・丸瓦、風字硯（第11図８）、横櫛（第11図９・10）、曲物側板等があり、掘り方埋土中からは土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・高台付杯・蓋・甕・瓶、平瓦・丸瓦、砥石が出土している。これらのうち、土師器はロクロ調整と非ロクロ調整のものが混在している。また、井戸側内の底



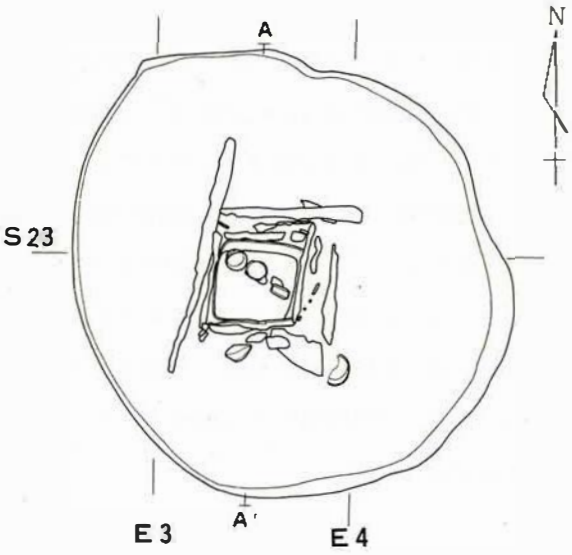
単位：cm

No	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	登録No	図版No	備考
1	土師器	杯	2層	ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	14.0	5.0	4.7	R-318	7－1	
2	〃	〃	〃	〃 〃	〃	16.0	5.4	5.1	R-319	7－2	
3	〃	〃	〃	〃 〃	〃	14.8	5.8	4.8	R-317	7－3	体部に墨書
4	〃	〃	3層	〃 〃	〃	14.1	5.6	4.7	R-320	6－10	体部2箇所に墨書
5	〃	高台付杯	〃	〃 〃	〃	15.5	7.3	5.9	R-321	6－11	〃
6	〃	杯	〃	〃 〃	〃	13.2	5.0	4.4	R-322	7－4	
7	〃	〃	攪乱2層	〃 〃	〃	15.1	6.0	5.2	R-323	7－5	体部に墨書
8	風字硯		1層	ヘラケズリ	ヘラケズリ				R-416	7－6	
9	横櫛		2層	高さ4.2cm 棟幅1.0cm 残存歯数101本						7－8	
10	〃		〃	高さ4.1cm 長さ14.9cm 棟幅1.0cm 歯数129本						7－7	

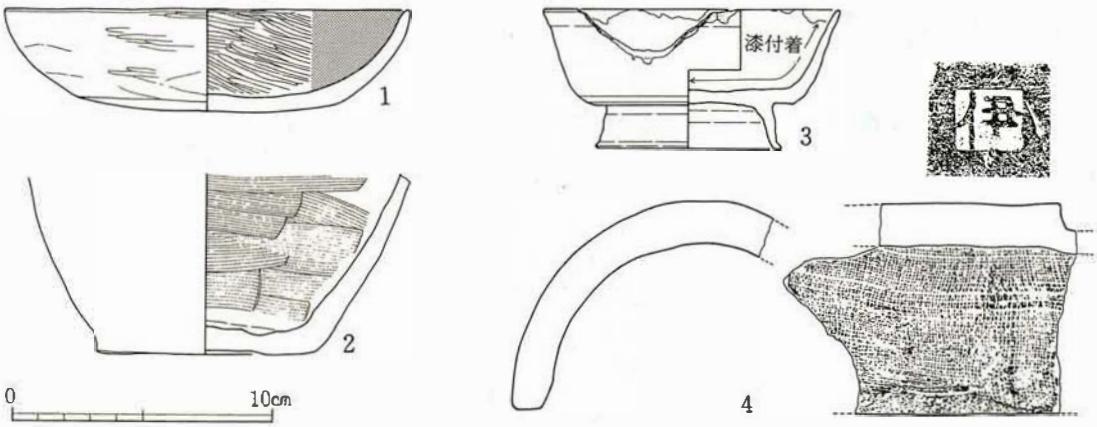
第11図　ＳＥ5056井戸跡出土遺物

面付近からほぼ完形の土師器杯・高台付杯6点（第11図1～6）が比較的まとまった状態で出土している。いずれも底部を回転糸切りで切り離した後、再調整を施さないものである。このうち3点に「㊍」と「方」の墨書がみられる。さらに、掘り方中からも同様の墨書土器（第11図7）が出土している。

〔SE5069井戸跡〕　調査区西端部の地山上で検出した井戸跡である。構造的には、方形に組み合わせた板材と曲物による側を備えたものである。即ち、最下段に隅丸方形の曲物、その上に横板を方形に組んだ側、その上に隅丸方形の曲物を積み上げてその四周にそれぞれ縦板1枚を立て並べて最上段の側としている。最下段の曲物の周囲には瓦や須恵器の破片が密接して立ち並んでおり、最下段の曲物の固定と、その上の横板による側の沈



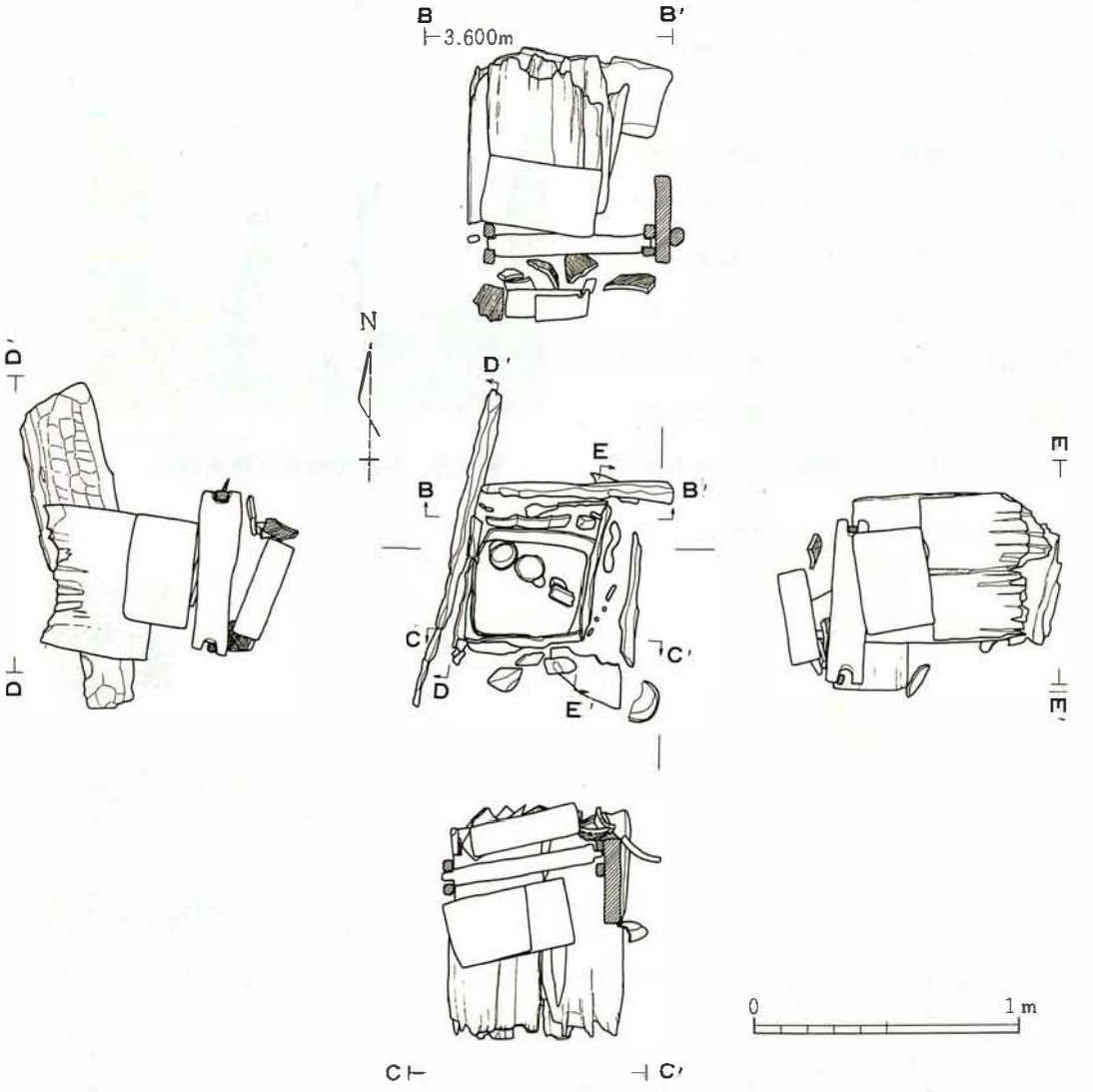
第12図　SE5069井戸跡実測図



No	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	登録No	図版No	備考
1	土師器	杯	掘方	口縁～底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	15.6	5.9	3.9	R-352	7-11	
2	〃	〃	〃		ヘラナデ		8.4		R-353	7-12	底部に木葉痕
3	須恵器	高台付杯	1層	口縁～体部下端、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	11.4	7.1	5.3	R-351	7-13	内面に漆付着 片口状に打ち欠き
4	丸瓦		掘方		凹面布目				R-436	7-14	凸面に刻印

第13図　SE5069井戸跡出土遺物

下防止を図ったものと考えられる。側の内法は各段によって異なり、最上段が長辺47cm・短辺45cm、2段目が長辺44cm、短辺40cm、3段目が長辺55cm、短辺54cm、最下段が長辺42cm、短辺35cmである。掘り方は平面形が円形を呈し、規模は径2.3m、深さ1.4mを計る。遺物は側内埋土から土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・高杯・甕、刳り抜き箱状の木製品（図版7－15）などが出土している。須恵器高台付杯には内面全体に黒漆の付着したもの（第13図3）が1点出土している。口縁部の一部を打ち欠き注ぎ口としている。掘り方埋土からは土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕、丸瓦・平瓦などが出土している。須恵器や瓦の多くは側の構築に伴うものである。土師器はロクロ調整を行なっていないものであり、瓦はすべて多賀城政庁第Ⅱ期のものである。



第14図　ＳＥ5069井戸側立面図

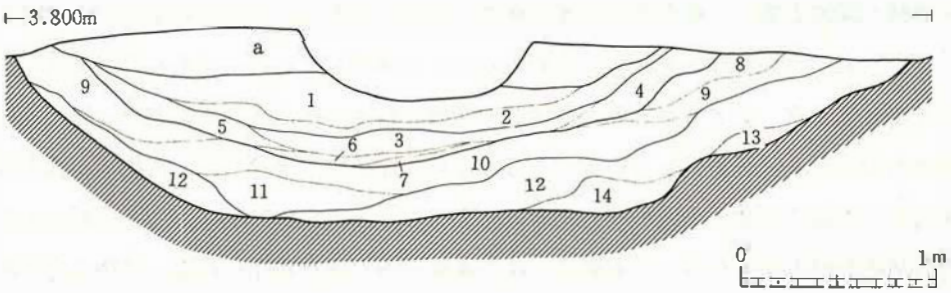
E. 溝　　跡

溝跡は、調査区内の全域でかなりの数を検出したが、このうちの６条が明確に古代に属するものであった。しかし、この数は今後の整理作業によって若干の増減が生じる可能性がある。また、調査区東側で検出したＳＤ5050・5110溝跡（出土遺物　第23図２～９）は、以下に説明するＳＤ180溝跡と同一位置で重複し、これより新しい時期のものである。

〔ＳＤ180溝跡〕　調査区東端付近で検出した南北方向に延びる溝跡である。ＳＤ5050溝跡や掘立柱建物跡と重複し、これらより古い。この北側での延長は、昨年度調査分のＢ区や今年度宮城県教育委員会調査分のＣ区においても検出されている。方向は、本調査区の中央付近から北側では西側への傾きがやや大きくなりＮ－32°－Ｗ、南側ではＮ－７°－Ｗである。また、埋土の中程で土層の堆積のしかたや土質の明瞭な違いがみられたことから、大きく２時期の変遷があったと判断した。

ＳＤ180Ａは、上幅4.2～4.6m、下端2.1～2.3m、深さ約１m を計り、断面形は逆台形を呈する。埋土は自然堆積土と考えられ、中程が砂質土の薄い土層を含んだ黒褐色粘土質土、その下層が地山ブロックを含んだ暗灰黄色土、最下層が比較的粗い砂を含んだ緑灰色砂質土である。

ＳＤ180Ｂは、先行するＡ期より規模が一まわり小さく、上幅2.9～3.4m、下幅0.8～1.2m、深さ約0.7m を計る。断面形は壁が緩やかに立ち上がる舟底形を呈する。埋土は、上層が炭化物や灰を含む黄灰色土、下層がややスクモ化した黒褐色粘土質土の自然堆積土である。



土層観察表

層位	土色	土性	備考		土色	土性	備考
a	黒褐色(10Y3/1)	シルト	ＳＤ5050埋土		ＳＤ180（Ａ）埋土		
ＳＤ180（Ｂ）埋土				8	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	遺物取上３層
1	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	遺物取上１層	9	暗灰黄色(2.5Y4/2)	〃	〃
2	灰色(5Y4/1)	〃	〃	10	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質シルト	〃
3	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	遺物取上２層　スクモ層	11	〃（〃）	〃	〃
4	〃（2.5Y3/1）	シルト	〃　木炭を多く含む	12	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	遺物取上４層
5	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂質シルト	〃	13	にぶい黄色(2.5Y6/3)	砂質シルト	〃
6	灰色(5Y4/1)	粘土質シルト	〃	14	緑灰色(7.5GY5/1)	〃	〃　グライ化
7	黒褐色(10YR3/1)	〃	〃　スクモ層				

第15図　ＳＤ180溝跡セクション図

遺物は、A期埋土中から土師器杯・高杯・鉢・甕（第20図1～9、第21図1～5）、須恵器杯・高杯・甕（第21図6）・瓶・甑（第20図10）が出土している。出土量は土師器の占める割合が圧倒的に多い。このほか、曲物蓋板・底板、横斧の柄、木製錘、両側面に鋸歯を刻んだ串状木製品、馬骨等（図版19）が出土している。

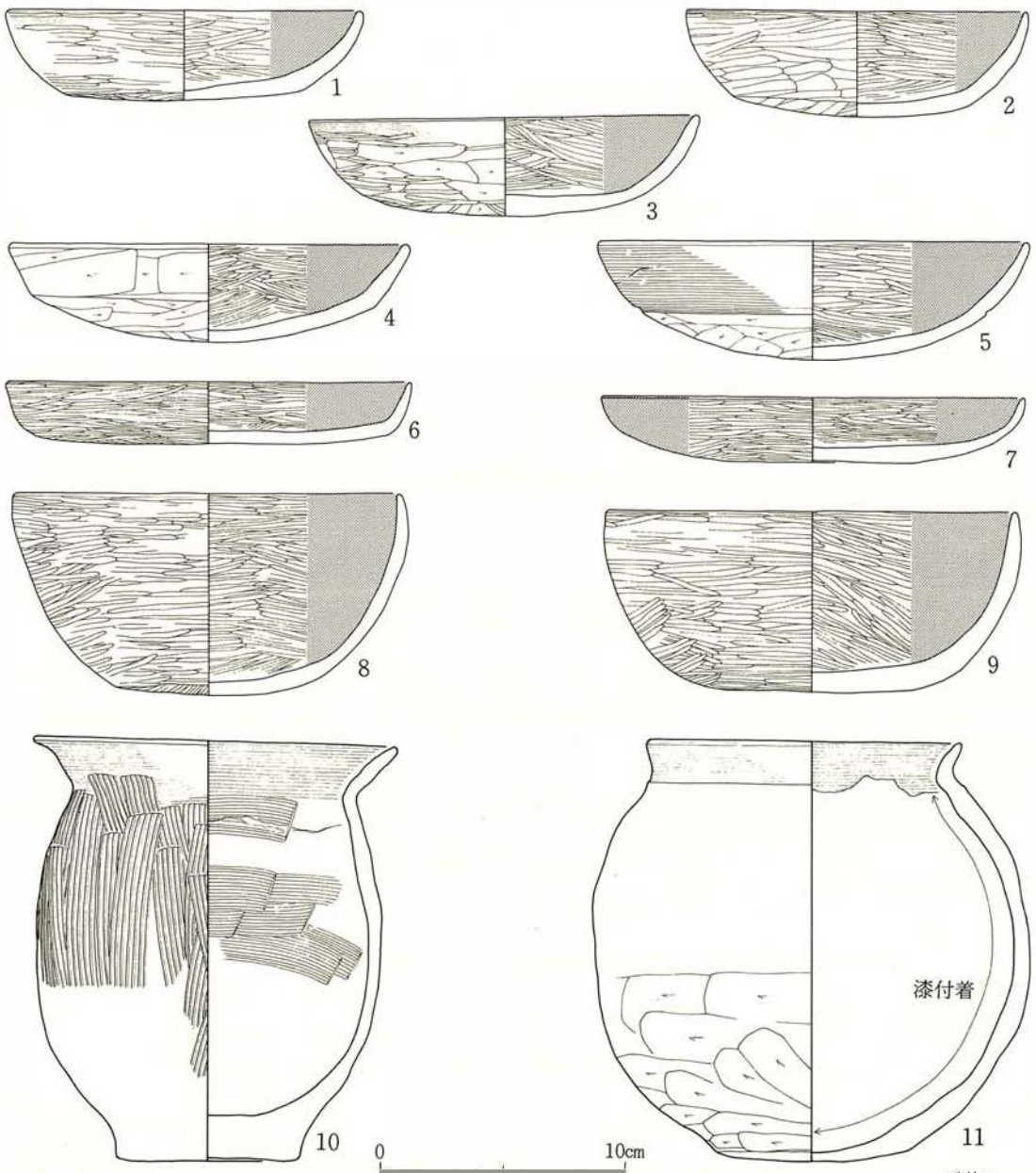
B期埋土中からは、土師器杯・高杯・蓋・盤・甕（第16・18図、第19図1～3）、須恵器杯・高台付杯・高杯・蓋・甕・瓶（第17図、第19図4～9）が出土しており、この中には内面に漆が付着しているものもある。さらに平瓦・丸瓦のほか、木簡、漆紙文書（註）や黒漆塗りの木製皿、鋤の柄、曲物蓋、笊、箕、田下駄、丸木弓、木製錘、樺皮等（図版19・20）が出土している。なお、土師器についてはA・B両期とも全て非ロクロ調整のものである。

（註）木簡、漆紙文書については現在解読作業中である。内容が判明し次第別途報告する予定である。

F．土　　坑

〔SK5099土坑〕　調査区西端部の地山上で検出した土坑である。SB5151など多くの遺構と重複しており、それらのものより古い。南北9.2m、東西1.8～1.6m、深さ0.9～0.35mを計る。底面や壁面に凹凸があり、複数の土坑が連続して掘り込まれたような状況を呈している。底面では地山中に埋没していた樹木を切り取った跡が認められ、その周辺から樹木の細片が大量に出土している。遺物は木製の下駄が1点出土している。左側面が若干破損している他は遺存状態が良く、鼻緒も残存していた（第25図）。

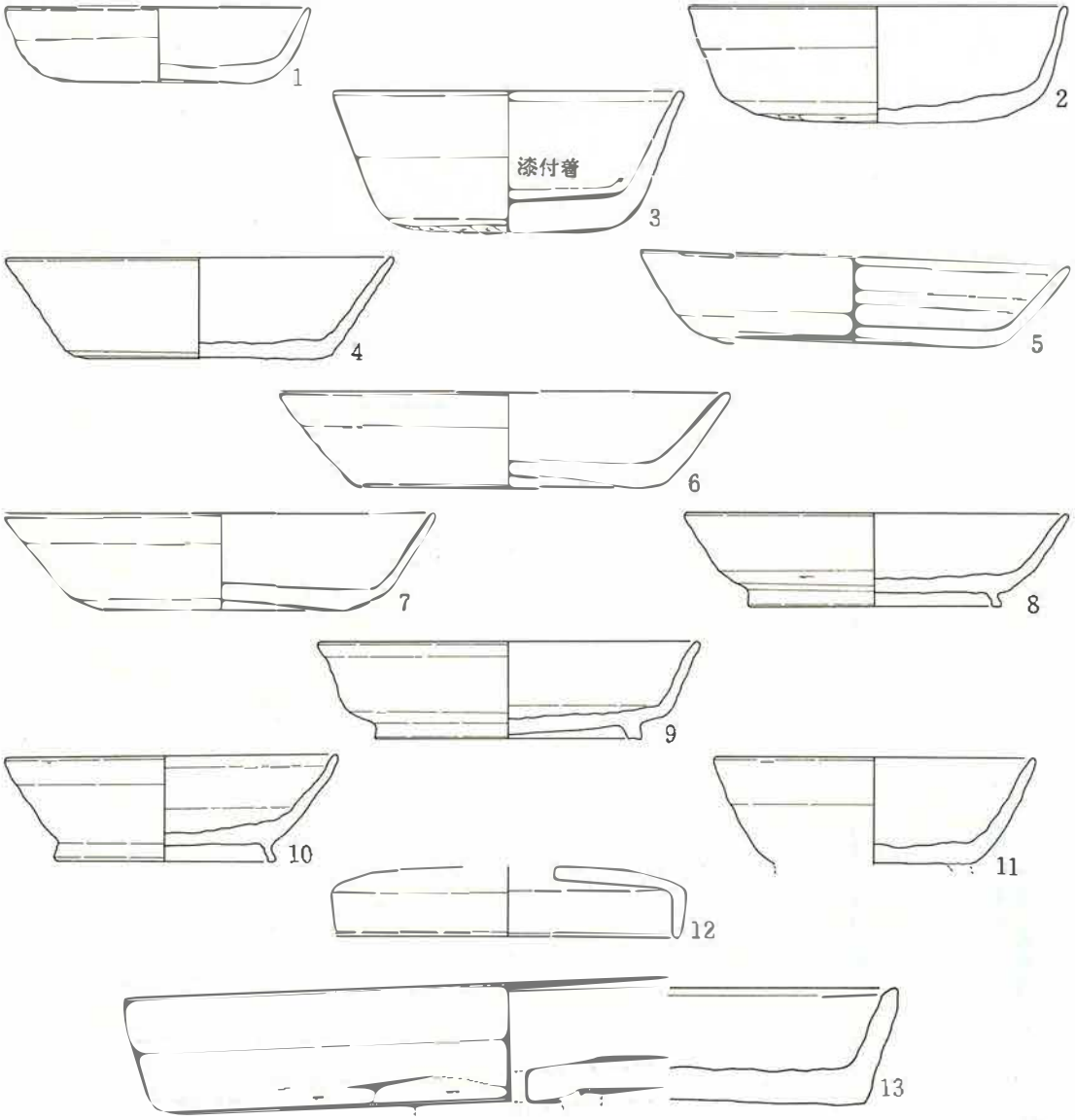
〔SK5086・5092土坑〕　調査区西半部で検出した土坑である。いずれも地山上で検出しているが、SK5092については第Ⅲ層におおわれることを確認している。これらの土坑は平面形が不整形を呈しており、いずれも底面に横倒しの状態で樹木が検出されたことや、埋土が一度に埋め戻されたような状況を呈していることなどから、地山中に埋没していた樹木を抜き取るために掘削し、中途で断念して埋め戻したものと考えられる。SD5029によって分断されているが、位置関係や樹木のあり方から本来は一連の遺構であったと考えられる。遺物は両土坑から土師器杯・甕、須恵器杯・双耳杯・長頸瓶・甕など（第22図）が多数出土している。土師器杯はロクロ調整を行なっているもので、その後体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリを施したものや再調整を施していないものなどがある。また、SK5092からは円面硯（第22図10）と風字硯（第22図11）が出土しており、前者は破片がほとんど接合してほぼ完全な形に復元することができた。



単位：cm

No	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	登録No	図版No	備考
1	土師器	杯	1層	口縁 ヨコナデ→ヘラミガキ 体～底部 ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	14.6	9.7	3.7	R - 65	8－1	
2	〃	〃	〃	口縁 ヨコナデ→ヘラミガキ 体～底部 ヘラミガキ	〃	13.8	9.5	4.3	R - 66	8－2	
3	〃	〃	〃	口縁 ヨコナデ→ヘラミガキ 体～底部 ヘラケズリ→ヘラミガキ	〃	15.9		4.0	R - 64	8－3	
4	〃	〃	〃	口縁～底部 ヘラケズリ	〃	16.3		4.0	R - 63	8－4	
5	〃	〃	〃	口縁～体部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ	〃	17.5		4.8	R -105	8－5	
6	〃	盤	〃	口縁～底部 ヘラミガキ	〃	16.5	14.2	2.5	R - 61	8－6	
7	〃	〃	〃	口縁～底部 ヘラミガキ・黒色処理	〃	17.1	7.6	2.6	R - 62	8－7	
8	〃	杯	〃	口縁 ヨコナデ→ヘラミガキ 体～底部 ヘラミガキ	〃	16.1	8.0	8.1	R - 69	8－8	
9	〃	〃	〃	〃	〃	16.5		7.3	R - 68	8－9	
10	〃	甕	〃	口縁 ヨコナデ 体部 ハケメ	口縁 ヨコナデ 体部 ヘラナデ	14.9	7.4	16.9	R -129	8－11	底部に木葉痕
11	〃	〃	〃	口縁 ヨコナデ 体部下半 ヘラケズリ	口縁 ヨコナデ	12.2	7.9	17.0	R -130	8－12	内面に漆付着

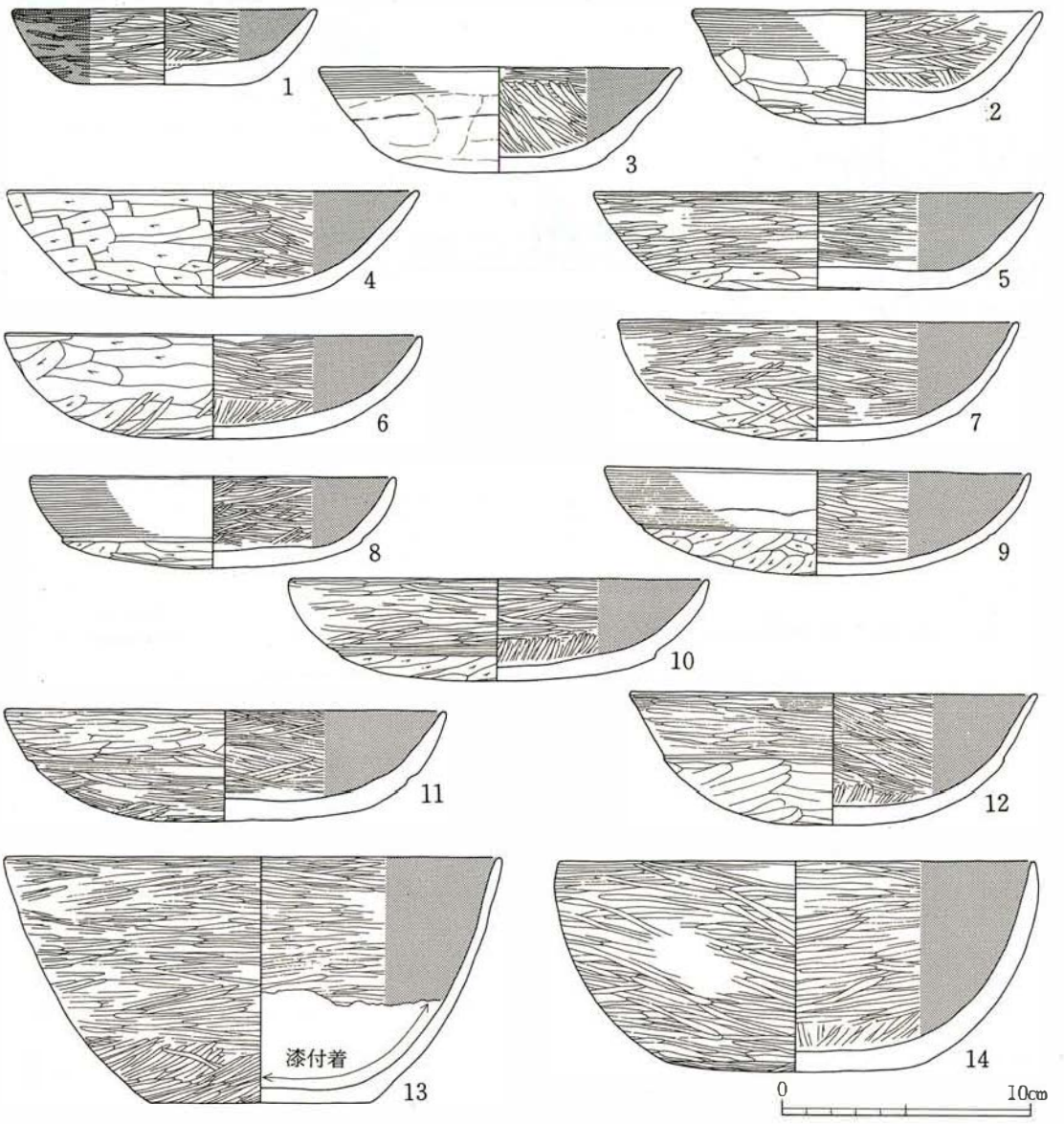
第16図　ＳＤ180Ｂ溝跡出土遺物（１）



単位：cm　（　）は推定値

No	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	登録No	図版No	備考
1	須恵器	杯	1層	ロクロナデ 底部 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	12.0	6.9	3.0	R-116	9－1	
2	〃	〃	〃	ロクロナデ 底部 手持ヘラケズリ	〃	14.8	9.8	4.6	R-113	9－2	
3	〃	〃	〃	〃	〃	(13.8)	8.7	5.6	R-111	9－3	内面に漆付着
4	〃	〃	〃	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り→回転ヘラケズリ	〃	15.3	9.3	4.0	R-115	9－4	
5	〃	〃	〃	〃	〃	16.8	9.7	3.5	R-106	9－5	
6	〃	〃	〃	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り→手持ヘラケズリ	〃	17.7	12.2	3.8	R-108	9－6	
7	〃	〃	〃	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り→回転ヘラケズリ	〃	17.0	9.5	3.8	R-109	9－7	
8	〃	高台付杯	〃	ロクロナデ 体部下端 回転ヘラケズリ	〃	15.0	9.9	3.7	R-110	9－8	
9	〃	〃	〃	ロクロナデ 底部 回転ヘラケズリ	〃	15.0	10.4	3.8	R-114	9－9	
10	〃	〃	〃	ロクロナデ 底部 回転ヘラ切り→ナデ	〃	13.1	8.7	4.1	R-117	9－10	
11	〃	〃	〃	〃	〃	(12.6)			R-112	9－11	
12	〃	蓋	〃	ロクロナデ 天井部 回転ヘラケズリ	〃	(13.4)			R-118	9－12	
13	〃	高杯	〃	ロクロナデ 体～底部 手持ヘラケズリ	〃	(30.3)				9－13	杯部内面摩耗

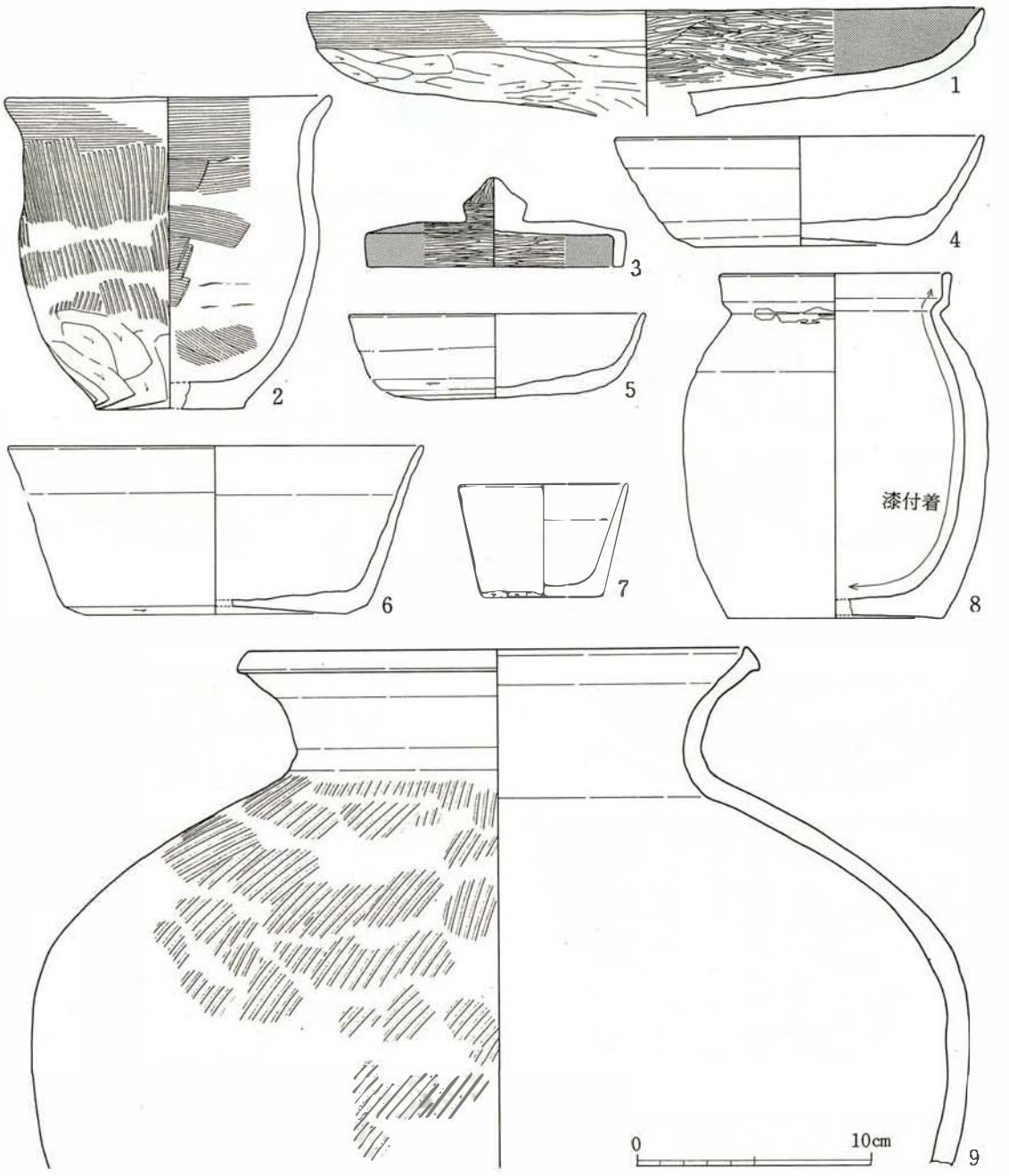
第17図　ＳＤ180Ｂ溝跡出土遺物（２）



単位：cm　（　）は推定値

No	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	登録No	図版No	備考
1	土師器	杯	2層	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	12.3	5.8	3.1	R-156	10−1	
2	〃	〃	〃	口縁　ヨコナデ 体〜底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	〃	14.1		4.6	R-143	10−2	
3	〃	〃	〃	口縁　ヨコナデ 体〜底部　ナデ	〃	14.6	8.4	4.3	R-155	10−3	
4	〃	〃	〃	口縁〜底部　ヘラケズリ	〃	16.6	10.1	4.3	R-150	10−4	
5	〃	〃	〃	口縁〜体部　ヨコナデ→ヘラミガキ 底部　ヘラケズリ	〃	18.0		3.9	R-154	10−5	
6	〃	〃	〃	口縁〜底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	〃	16.0		4.2	R-149	10−6	
7	〃	〃	〃	口縁〜体部　ヨコナデ→ヘラミガキ 体〜底部　ヘラケズリ→ヘラミガキ	〃	16.1		4.8	R-152	10−7	
8	〃	〃	〃	口縁〜体部　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ	〃	14.8		3.7	R-151	10−8	
9	〃	〃	〃	〃	〃	17.1		4.2	R-148	10−9	
10	〃	〃	〃	口縁〜体部　ヨコナデ→ヘラミガキ 底部　ヘラケズリ	〃	16.9		4.1	R-157	10−10	
11	〃	〃	〃	口縁〜体部　ヨコナデ→ヘラミガキ 底部　ヘラケズリ→ヘラミガキ	〃	17.8		4.4	R-144	10−11	
12	〃	〃	〃	〃	〃	16.4		5.2	R-153	10−12	
13	〃	〃	〃	口縁〜底部　ヘラミガキ	〃	(20.0)	8.8	9.9	R-146	10−14	内面に漆付着
14	〃	〃	〃	口縁　ヨコナデ・ヘラミガキ 体〜底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	〃	(19.2)	(10.6)	8.4	R-145	10−15	

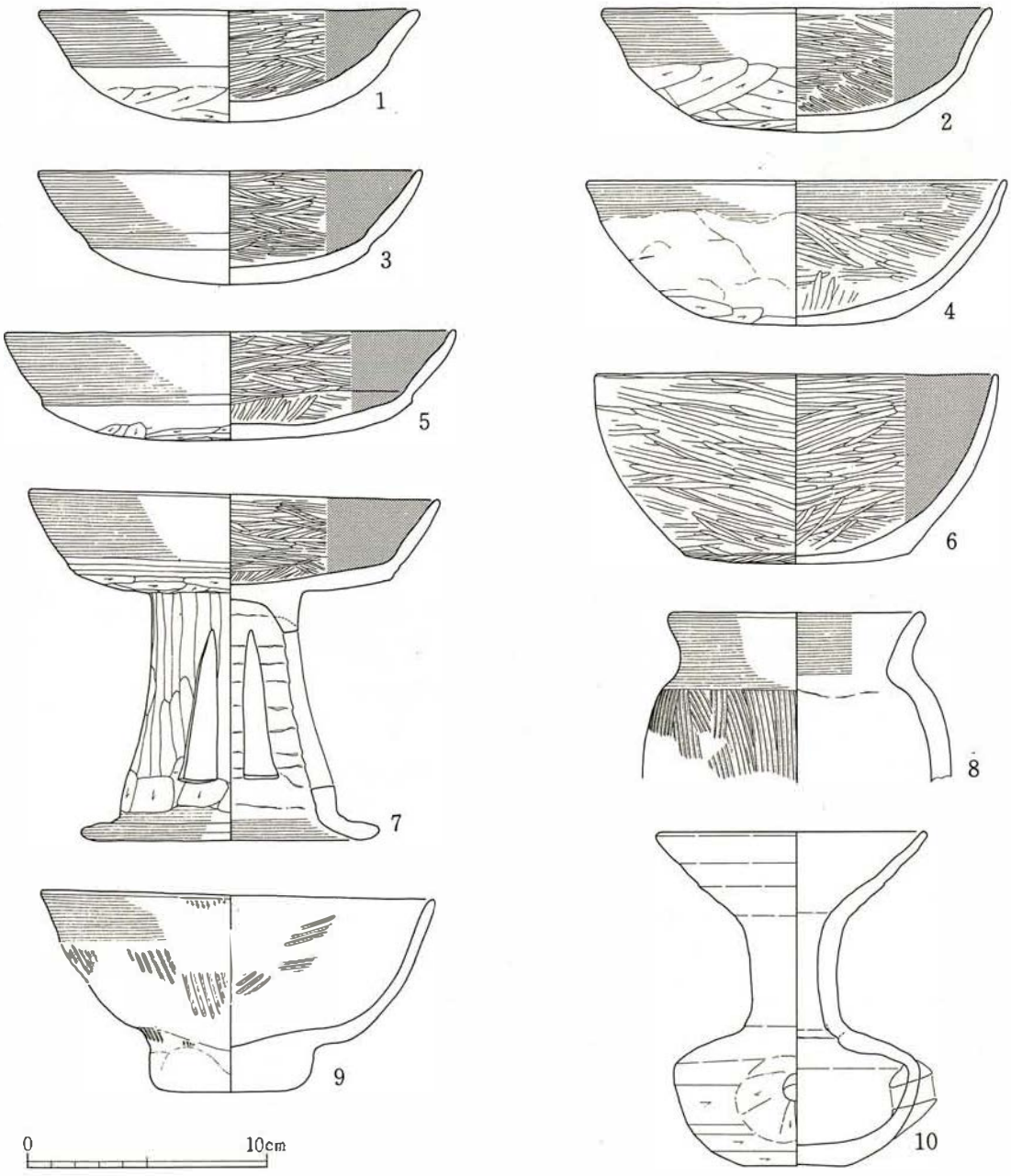
第18図　ＳＤ180Ｂ溝跡出土遺物（3）



単位：cm　（　）は推定値

No	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	登録No	図版No	備考
1	土師器	高杯	2層	口縁　ヨコナデ 体部　ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(28.8)			R-147	11－1	
2	〃	甕	〃	口縁　ヨコナデ 体部　ハケメ→ヘラケズリ	口縁　ヨコナデ 体部　ヘラナデ	(14.0)	(6.3)	13.3	R-180	11－2	
3	〃	蓋	〃	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	(10.8)		3.8	R-150	11－3	
4	須恵器	杯	〃	ロクロナデ 底部　回転ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	15.7	9.1	4.7	R-176	11－8	
5	〃	〃	〃	ロクロナデ 底部　回転ヘラ切り→回転ヘラケズリ	〃	12.6	8.5	3.6	R-175	11－7	
6	〃	〃	〃	ロクロナデ 底部　回転ヘラケズリ	〃	(17.8)	(11.3)	7.2	R-177	11－9	
7	〃	〃	〃	ロクロナデ 底部　回転ヘラ切り→手持ヘラケズリ	〃	(7.3)	5.2	4.8	R-174	11－10	
8	〃	甕	〃	ロクロナデ	〃	(9.9)	9.2	14.7	R-188		内面と外面頸部に漆付着
9	〃	〃	〃	ロクロナデ 体部　平行叩き	ロクロナデ・ナデ	22.2			R-221	11－11	

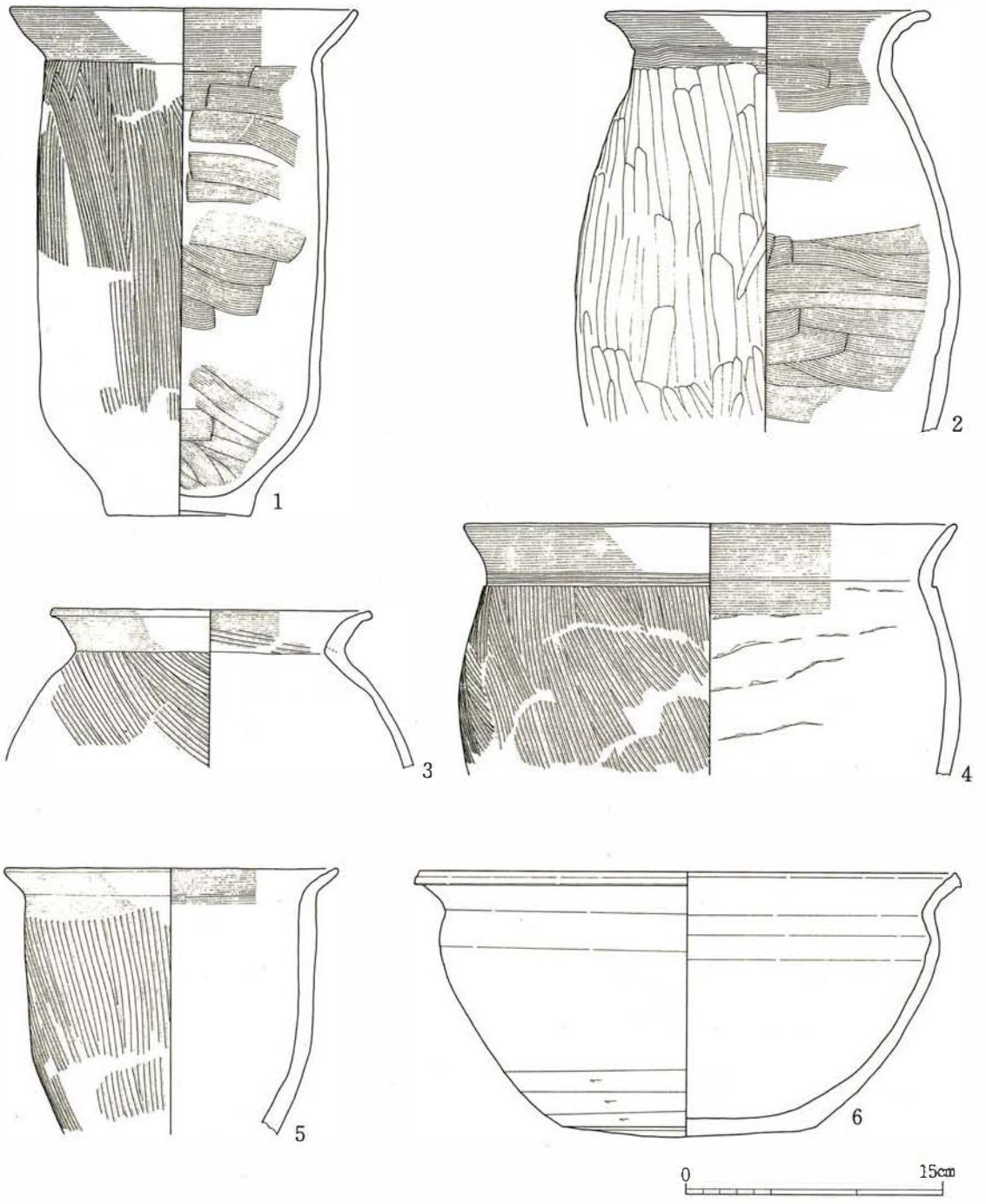
第19図　ＳＤ180Ｂ溝跡出土遺物（４）



単位：cm　（　）は推定値

No	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	登録No	図版No	備考
1	土師器	杯	3層	口縁 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(15.8)		4.6	R-195	12-1	
2	〃	〃	〃	口縁～体部 ヨコナデ 体～底部 ヘラケズリ	〃	16.1	8.0	5.1	R-192	12-2	
3	〃	〃	〃	口縁～体部 ヨコナデ	〃	16.0		4.7	R-193	12-3	
4	〃	〃	〃	口縁 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ	ヨコナデ→ヘラミガキ	17.5		6.0	R-197	12-4	
5	〃	〃	〃	口縁～体部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	18.7		4.5	R-196	12-5	
6	〃	〃	〃	口～底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	〃	(16.7)	9.3	7.8	R-194	12-6	
7	〃	高杯	〃	口縁・脚部 ヨコナデ 体部・脚部 ヘラケズリ	〃	17.1		14.2	R-208	12-7	脚部に4箇所の透し
8	〃	壺	〃	口縁 ヨコナデ 体部 ハケメ	口縁 ヨコナデ	10.7			R-210	12-9	
9	〃	鉢	4層	口縁 ハケメ→ヨコナデ 体部 ハケメ	ハケメ	16.4	6.6	8.2	R-222	12-8	底部に木葉痕
10	須恵器	甕	3層	ロクロナデ 体部下半 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	11.2	4.3	13.7	R-219	12-11	

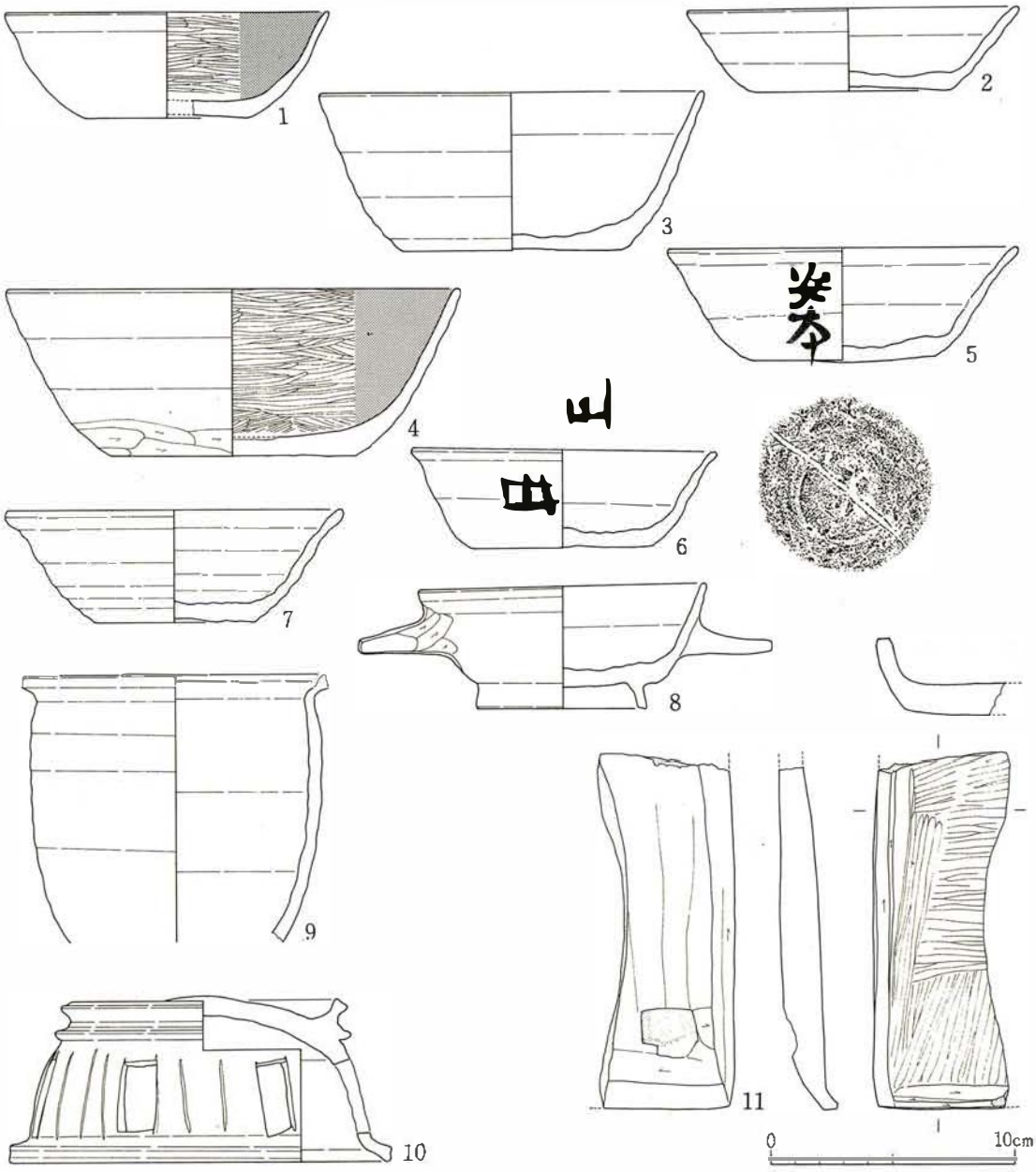
第20図　SD 180A 溝跡出土遺物（1）



単位：cm　（　）は推定値

No	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	登録No	図版No	備考
1	土師器	甕	3層	口縁 ヨコナデ 体部 ハケメ	口縁 ヨコナデ 体部 ヘラナデ	(20.4)	8.4	(29.5)	R-212	13－4	底部に木葉痕
2	〃	〃	〃	口縁 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ	〃	19.0			R-211	13－1	
3	〃	〃	〃	口縁 ヨコナデ 体部 ハケメ	口縁 ヨコナデ→ハケメ	18.8			R-209	13－2	
4	〃	〃	〃	〃	口縁 ヨコナデ	(28.8)			R-213	13－3	
5	〃	〃	4層	〃	〃	(19.6)			R-226	12－10	
6	須恵器	〃	3層	ロクロナデ 体部下半回転ヘラケズリ	ロクロナデ	32.0	14.7	15.5	R-220	13－5	

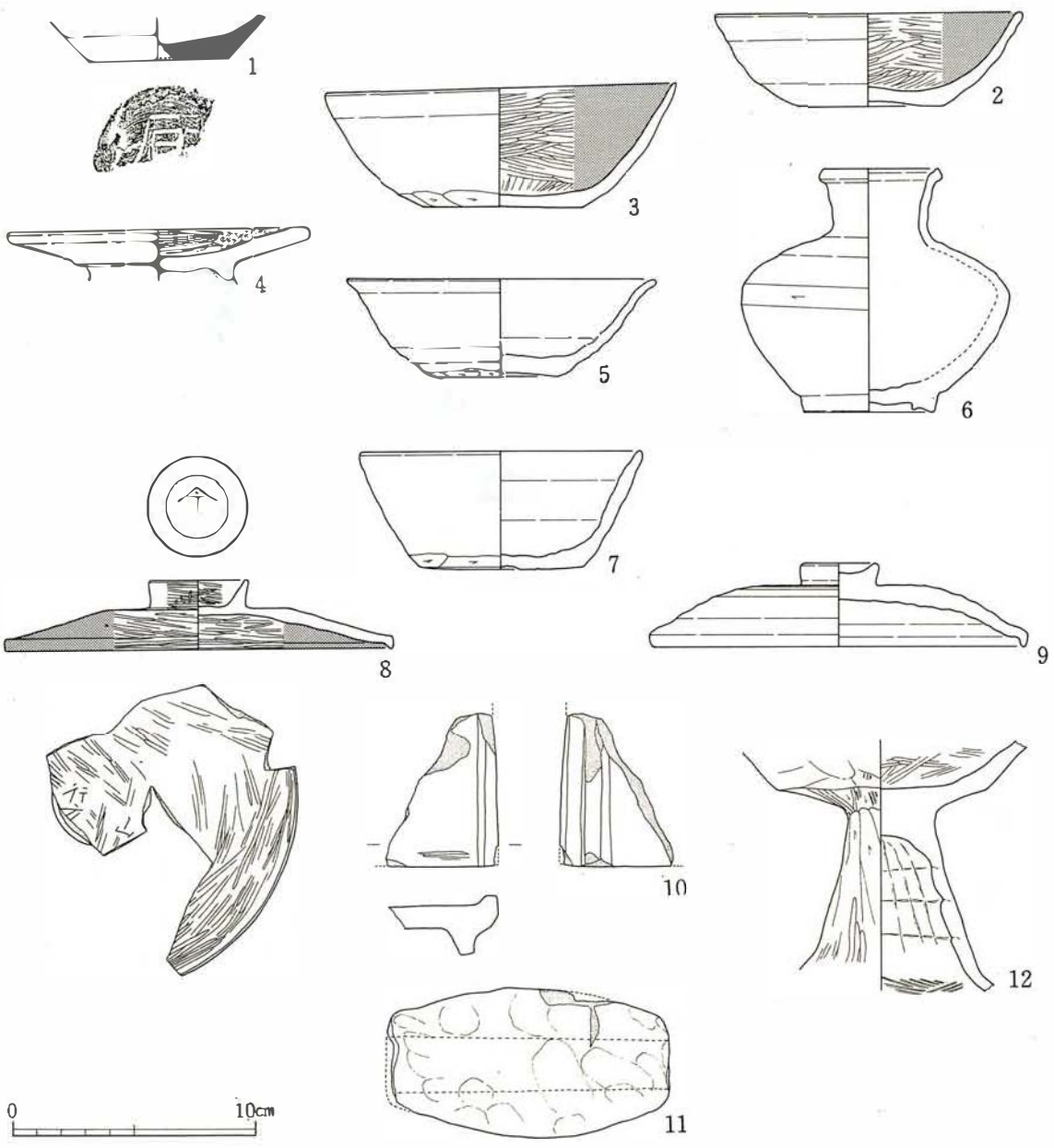
第21図　ＳＤ180Ａ溝跡出土遺物（２）



単位：cm　（　）は推定値

No	種別	器種	遺構層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	登録No	図版No	備考
1	土師器	杯	SK5086 1層	ロクロナデ 底部 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(13.4)	(6.8)	4.3	R-355	14-1	
2	須恵器	〃	〃	ロクロナデ 底部 回転ヘラ切り	ロクロナデ	(13.6)	8.4	3.4	R-356	14-3	
3	〃	〃	〃	〃	〃	(15.8)	9.0	7.4	R-357	14-2	
4	土師器	〃	SK5092 1層	ロクロナデ 底部 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(18.6)	10.0	6.8	R-369	14-4	
5	須恵器	〃	〃	ロクロナデ 底部 回転ヘラ切り	ロクロナデ	14.3	7.6	4.7	R-372	14-9	体部に墨書 底部にヘラ描
6	〃	〃	〃	〃	〃	12.6	7.5	4.0	R-371	14-8	体部2箇所に墨書
7	〃	〃	〃	〃	〃	(13.9)	(6.5)	4.6	R-373	14-6	底部に墨書
8	〃	双耳杯	〃	ロクロナデ	〃	11.8	7.0	5.0	R-381	14-7	
9	土師器	甕	〃	〃	〃	12.6			R-370	14-5	
10	円面硯		〃	〃	〃	11.7	15.6	6.8	R-382	14-10	脚部6箇所に透し 平行線文2～4本
11	風字硯		〃	ヘラケズリ	ヘラミガキ				R-383	14-11	

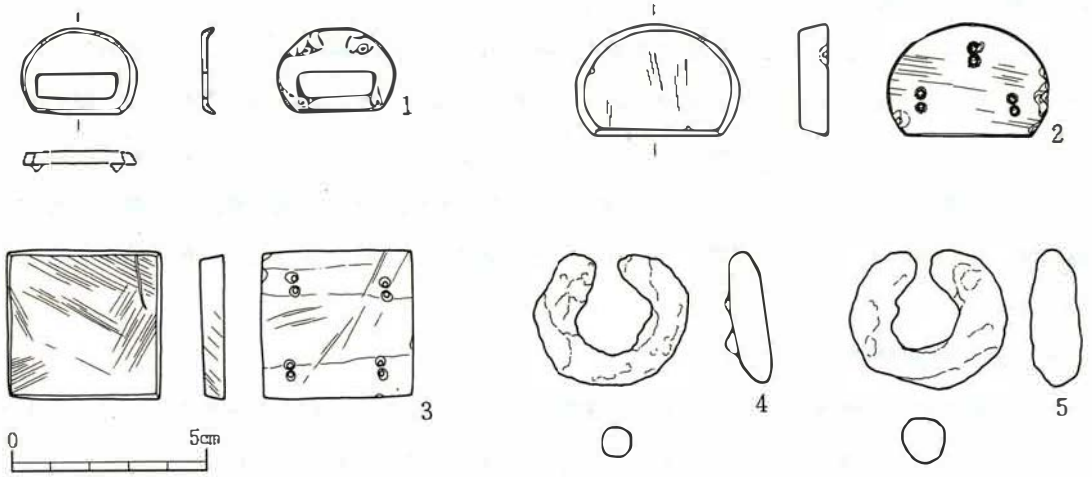
第22図　SK5086・5092土坑出土遺物



単位：cm　（　）は推定値

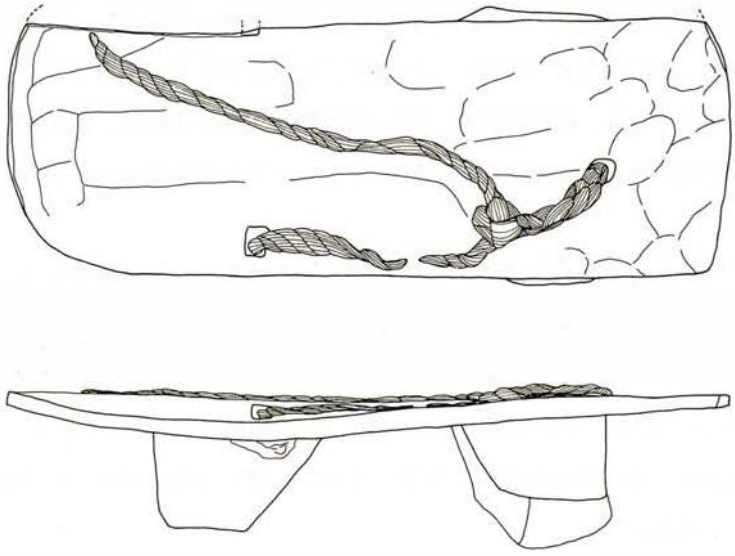
No	種別	器種	遺構層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	登録No	図版No	備考
1	須恵器	杯	SD5038 1層	ロクロナデ 底部 回転糸切り	ロクロナデ		(5.6)		R-402	15－1	底部にヘラ描
2	土師器	〃	SD5110 1層	〃	ヘラミガキ・黒色処理	12.6	5.9	3.8	R-391	15－3	
3	〃	〃		ロクロナデ 底部 手持ヘラケズリ	〃	14.3	6.4	4.8	R-392	15－2	
4	〃	高台付皿	〃	ロクロナデ 底部 回転糸切り	〃	12.4			R-390	15－4	
5	須恵器	杯	〃	ロクロナデ 底部 回転糸切り→手持ヘラケズリ	ロクロナデ	12.6	4.9	4.0	R-393	15－5	
6	〃	瓶	〃	ロクロナデ 体部下半 回転ヘラケズリ	〃	5.0	5.3	9.9	R-394	15－6	肩部に自然釉
7	〃	杯	SD5050 1層	ロクロナデ 底部 回転ヘラ切り→手持ヘラケズリ	〃	(11.5)	6.7	4.8	R-280	15－9	
8	土師器	蓋	〃	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	(16.0)		2.8	R-278	15－7	内外面3箇所にヘラ描
9	須恵器	〃	〃	ロクロナデ 天井部 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(15.2)		3.4	R-281	15－8	
10	風字硯		I層		ヘラミガキ・黒色処理か				R-425	15－13	土師質
11	土錘		〃						R-426	15－14	
12	土師器	高杯	Vb層	ハケメ→ヘラケズリ、ヘラミガキ	ハケメ、ヘラミガキ					17－1	

第23図　その他の遺構・堆積土出土遺物（1）



No	種別	遺構層位	登録No	図版No	備考
1	丸鏃	S1 K 5081 層		17−13	銅製か
2	〃	S2 D 5029 層	R−433	17−14	石製
3	遮方	I 層	R−434	17−15	〃
4	耳環	S1 K 5086 層		17−11	
5	〃	I 層		17−12	

第24図　その他の遺構・堆積土出土遺物（2）



出土層：3層
登録No：R−113
木取り：板目材
長　さ：27.6cm
幅　：9.8cm（残存部のみ）
高　さ：5.0〜5.8cm
台の厚さ：0.5〜0.8cm

第25図　ＳＫ5099土坑出土下駄

3. 中　　世

中世の遺構としては昨年度の調査で発見した屋敷跡の東半部を検出し、更にその東側でそれより古い別の屋敷跡を発見した。前者を新しい屋敷跡、後者を古い屋敷跡と仮称する。層位的に見ると、新しい屋敷跡は第Ⅲ層上面で検出することができ、古い屋敷跡は第Ⅲ層におおわれることを確認している。いずれも周囲に溝をめぐらしており、その内側で検出した掘立柱建物跡10棟、柱列跡２条、井戸跡11基、溝跡14条、土坑墓２基、土坑７基などは屋敷を構成する遺構と考えられる。

A．掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は10棟確認した。しかし、建物としてまとまらない柱穴が多数あることから実際はもっと多くの建物が存在したと考えられる。10棟の内、整地層上面で検出したものが３棟、第Ⅲ層上面で検出したものが１棟ある。他の６棟は地山上で検出しており、整地層や第Ⅲ層など堆積層との関係は把握できなかったものである。以下、新しい屋敷跡に伴うと見られる前二者について説明する。

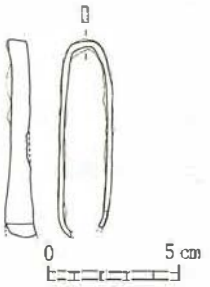
〔ＳＢ5164建物跡〕　整地層上で検出した桁行３間、梁行１間の東西棟掘立柱建物跡である。方向は北側柱列でみると東で２度10分北に偏しており、南側柱列でみると東で２度23分南に偏している。桁行については、北側柱列で総長6.31ｍ、柱間は西より約2.0m、約2.0m、2.28mであり、南側柱列で総長5.99m、柱間は西より1.96m、1.88m、2.14mである。梁行については、東妻で3.90m、西妻で3.56mである。柱穴は径40～30cmの円形、或は長径40cm、短径30cmの楕円形を呈しており、埋土は墨褐色土或は灰黄褐色土で地山ブロックを含んでいる。柱痕跡は径15～10cmである。

〔ＳＢ5165建物跡〕　整地層上で検出した桁行３間、梁行１間の東西棟掘立柱建物跡である。方向は南側柱列でみると東で２度５分南に偏している。桁行については、北側柱列で総長約6.6ｍ、柱間は西より約2.0m、3.25m、約2.2mであり、南側柱列で総長約6.8m、柱間は西より1.96m、2.70m、約2.1mである。梁行については、東妻で約4.1m、西妻で約4.2mである。柱穴は径35cmの円形、或は長径45cm、短径35cmの楕円形を呈しており、埋土は地山ブロックを含んだ黒褐色土である。柱痕跡は径15cmである。

〔ＳＢ5167建物跡〕　整地層上で検出した桁行２間、梁行１間の東西棟掘立柱建物跡である。南東隅の柱穴は他の柱穴で破壊されており検出できなかった。北側柱列でみると、東で１度35分南に偏している。桁行については、北側柱列で総長5.42m、柱間は西より2.30m、3.13m、南側柱列で西より１間分が2.23mである。柱穴は径40cmの円形を呈しており、埋土は地山小粒を含んだ黒褐色土である。柱痕跡は径15cmである。なお、南側柱列において、西より１間目の柱穴の東側約1.6mの地点で上面が平担な石を検出した。南側柱列の柱筋上にあり、西より１

間目の柱穴と南東隅の柱穴とのほぼ中間に位置することから本建物に係るものと考えておきたい。この石は長さ23cm、幅12cmを計り、不整形を呈している。据え方等は確認できなかった。遺物は、北西隅の柱穴の柱痕跡より鉄製の毛抜きが1点出土している（第26図）。

〔ＳＢ5166建物跡〕　第Ⅲ層上で検出した桁行3間、梁行1間の東西棟掘立柱建物跡である。北側柱列の東から1間目の柱穴は検出できなかった。方向は北側柱列でみると東で9度33分北に偏している。桁行については、北側柱列で総長7.83m、柱間は西より2.63m、5.20m（2間分）であり、南側柱列で総長約7.7m、柱間は西より約2.6m、約2.6m、約2.5mである。梁行については、東妻で約3.8m、西妻で約3.7mである。柱穴は径45～25cmの円形、或は長径60cm、短径45cmの楕円形を呈している。柱痕跡は径10cmである。



種　別：毛抜き
遺　構：ＳＢ5167（ピット96）
出土層：柱痕跡内
図版№：17－8

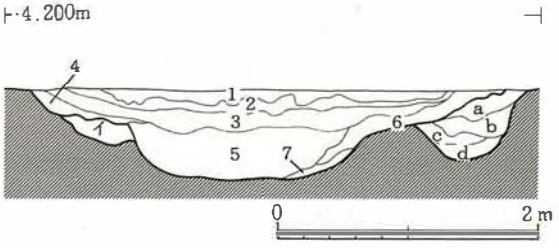
第26図　出土遺物

Ｂ．溝　　跡

中世に属する溝跡は14条発見した。大部分が屋敷地の区画を成しているものである。

〔ＳＤ5001・5002・5047溝跡〕　古い屋敷跡の東辺を成す溝跡である。調査区東端部の地山上で検出した。これらはほぼ同位置で重複し、ＳＤ5001溝跡が最も新しい。ＳＤ5002溝跡とＳＤ5047溝跡の新旧関係は不明である。これらは南北に走り、北端部は屋敷跡の北辺を成すＳＤ150東西溝跡と合流している。ＳＢ5175・5177建物跡、ＳＤ180・5024溝跡などと重複しており、すべてのものより新しい。最も新しいＳＤ5001溝跡でみると上幅3.3m、深さ0.7mを計り、断面形は段掘り状を呈している。埋土は自然に堆積した様相を呈している。遺物は古代の土師器、

ＳＤ5001・5002・5047溝跡（調査区南側）



土層観察表

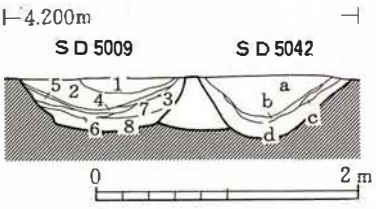
層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
ＳＤ5001				ＳＤ5002			
1	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を含む	a	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	黒褐色土との互層
2	黒褐色(2.5Y3/1)	〃		b	にぶい黄色(2.5Y6/3)	砂質シルト	褐灰色砂質土を混入
3	褐灰色(10YR4/1)	〃	灰黄褐色ブロックを含む	c	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	黒褐色粘土質土を若干含む
4	黒褐色(2.5Y3/1)	〃	〃	d	にぶい黄色(2.5Y6/3)	〃	〃
5	〃 (10YR3/1)	〃	〃				
6	〃 (〃)	〃	にぶい黄橙色土を多量に含	ＳＤ5047			
7	オリーブ灰色(2.5GY4/1)	粘土	緑灰色砂を混入	イ	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質シルト	褐灰色・黒色粘土質土を含む

第27図　ＳＤ5001・5002・5047溝跡セクション図

須恵器が多く出土しており、中世のものとしては無釉陶器甕の体部破片が１点出土しているにすぎない。またＳＤ5002溝跡は上幅0.9m 以上、深さ0.4m を計りＳＤ5001溝跡と比較すると小規模である。遺物は古代の土師器や須恵器が出土している。

〔ＳＤ5009溝跡〕　古い屋敷跡の西辺を成す溝跡である。調査区西半部の地山上で検出した。南北に走り、北端部はＳＤ150溝跡の西端部と合流している。南端部はＳＫ5037土坑によって破壊されているため約９m にわたって検出したにすぎない。上幅1.3m 、深さ0.4m を計る。埋土は自然に堆積した様相を呈している。遺物は舟形木製品などが出土している（図版19－４）。

ＳＤ5009：古い屋敷跡西辺溝
ＳＤ5042：新しい屋敷跡東辺溝



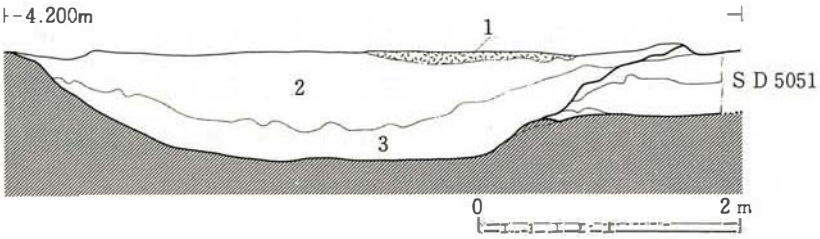
層位	土色	土性	備考
SD5009			
1	黄灰色(2.5Y5/1)	シルト	黒褐色土を混入
2	黒褐色(2.5Y3/1)	〃	暗黄褐色土ブロックを含む
3	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂質シルト	
4	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土質シルト	
5	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂質シルト	黒色土を斑状に含む
6	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土質シルト	植物遺体を若干含む
7	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	黄灰色砂質土を含む
8	黄灰色(2.5Y5/1)	砂質シルト	暗灰黄色砂層を含む
SD5042			
a	暗灰黄色(2.5Y5/1)	シルト	浅黄色土を斑状に含む
b	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	植物遺体を含む
c	褐灰色(10YR5/1)	シルト	
d	黄灰色(2.5Y5/1)	〃	同色の粘土を混入

第28図　ＳＤ5009・5042溝跡セクション図

〔ＳＤ5130溝跡〕　古い屋敷跡の西辺を成す溝跡である。第Ⅲ層におおわれ、地山上から掘りこんでいる。ＳＤ5039溝跡によって大きく破壊されているため南北5.2m にわたって検出したにとどまった。南端はＳ38ライン付近で立ち上がっている。規模は上幅1.0m 以上、深さ0.7m を計る。ＳＤ5009溝跡とは埋土の状況が類似し、本来一連の溝跡であった可能性が大きい。

〔ＳＤ5029溝跡〕　新しい屋敷跡の東辺を成す溝跡である。調査区西半部の第Ⅲ層上から掘り込んでいる。南北に走り、北端部は屋敷跡の北辺を成すＳＤ27東西溝跡の東端部に合流している。ほぼ同位置で２時期の重複を確認しているが、古段階（Ａ期）のものについては大部分が新段階（Ｂ期）のものによって破壊されているため詳細については不明である。Ｂ期のものについてみると規模は上幅5.2～4.0m 、深さ0.8～0.6m を計る。底面は、北端部付近がやや低くなっているがほぼ平坦である。埋土の堆積状況は、Ｓ27ラインでみると上層（１～４）と下層（５～６）とで明瞭に異なっている。下層はグライ化した粘質土と砂質土が自然堆積した様相を見せているのに対し、上層は地山ブロックを大量に含んだ土で一度に埋め戻されている。この上層に堆積している土は、本溝跡の縁辺部にも分布しており、その上面で建物跡や柱穴群を検出していることから整地層と考えられる。遺物は古代の土師器、須恵器、灰釉陶器、白磁などとともに青磁椀、無釉陶器甕、擂鉢が出土している。無釉陶器甕は口縁部破片が１点、体部破片が21点出土している。口縁部破片は頸部が直立し、口縁端部が短かく外反する形態を有し

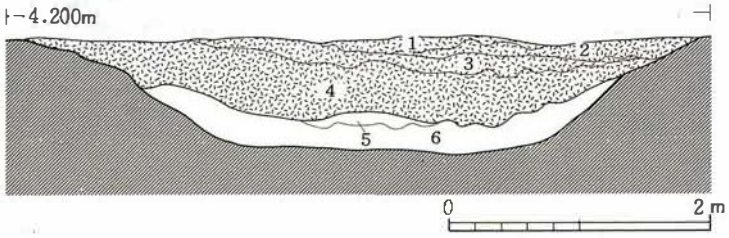
① 調査区南側



土層観察表

層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR½)	シルト		3	黒褐色(10YR¾)	粘土	オリーブ黒色砂を多量に含む
2	〃 (10YR¾)	〃	炭化物,焼土粒を含む				

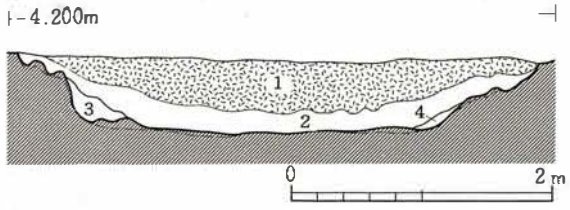
② 調査区中央付近
（S27ライン）



土層観察表

層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1	灰黄褐色(10YR½)	シルト	にぶい黄褐色土を多量に含む	4	暗灰黄色(2.5Y½)	砂質シルト	黒褐色粘土を含む
2	黒褐色(10YR½)	〃	〃 をわずかに含む	5	黒褐色(2.5Y½)	〃	粘土粒,砂ブロックを含む
3	灰黄褐色(10YR½)	粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む	6	オリーブ黒色(5Y½)	粘土	

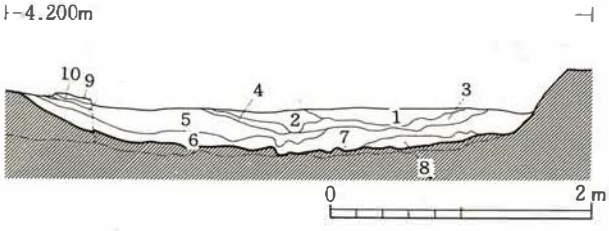
③ 調査区中央付近



土層観察表

層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1	灰黄褐色(10YR½)	シルト	地山土,炭化物を含む	3	灰黄褐色(10YR½)	粘土	黄褐色砂との混入層
2	黒褐色(2.5Y½)	粘土	〃 砂を含む	4	〃 (〃)	〃	〃

④ 調査区北側

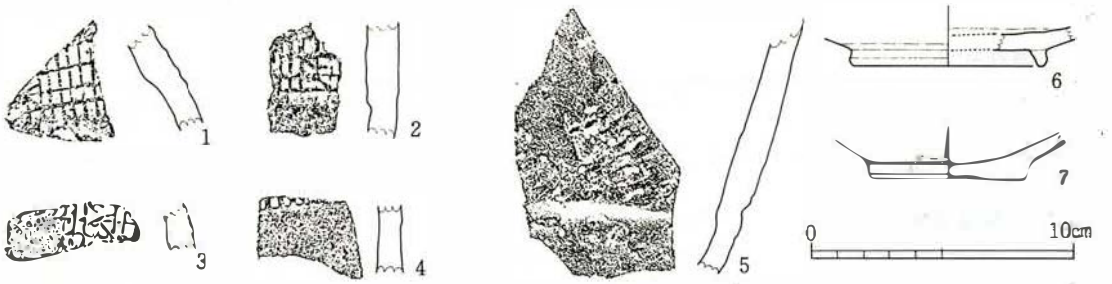


土層観察表

層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR½)	粘土	炭化物,焼土粒を含む	6	黒褐色(10YR½)	粘土	炭化物,焼土粒を含む
2	灰黄褐色(10YR½)	粘土質シルト	炭化物を含む	7	〃 (2.5Y½)	〃	木片,植物遺体を含む
3	黒褐色(10YR¾)	〃	炭化物,砂を含む	8	〃 (〃)	〃	暗灰黄色砂を多量に含む
4	〃 (〃)	粘土	木片を含む	9	灰黄褐色(10YR½)	〃	
5	灰黄褐色(10YR½)	シルト	炭化物,木片を含む	10	にぶい黄褐色(10YR½)	砂質シルト	

第29図　ＳＤ5029溝跡セクション図

ている。ＳＤ5003溝跡出土の破片と接合した（第35図１）。体部破片には外面に格子状の押印が施されているものがある（第30図１～４）。これらはいずれも胎土が灰白色を呈し、表面が赤褐色に焼き上がっている。また口縁部の形態は常滑窯の製品に類似するものがあり、赤羽一郎氏の編年によれば12世紀後半のものに相当する（註１）。



No	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	備考	図版No	登録No
1	無釉陶器	甕	1層	ヘラナデ	ヨコナデ	格子目叩き	16－15	R－45
2	〃	〃	3層	〃	〃	〃	16－16	R－51
3	〃	〃	2層	〃	〃	〃	16－17	R－47
4	〃	〃	1層	〃	〃	〃	16－18	R－44
5	〃	〃	3層	〃	〃	条線状（?）叩き	16－19	R－49
6	灰釉陶器	椀	1層	底部回転ヘラケズリ 高台貼付後ロクロナデ	ロクロナデ		16－5	R－19
7	白磁	〃	〃	体部～底部 回転ヘラナデ		削り出しによる蛇ノ目高台	16－30	R－1

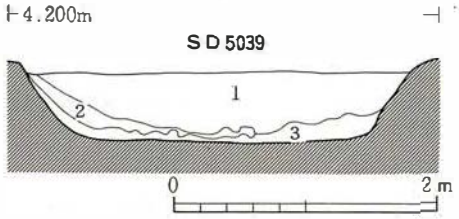
第30図　ＳＤ5029溝跡出土遺物

〔ＳＤ5051溝跡〕　新しい屋敷跡の南辺を成すと考えられる東西溝跡である。東端部はＳＤ5029溝（新段階）によって切られている。しかし、ＳＤ5029溝跡の東側にはのびていかないため、ＳＤ5029溝跡の古段階では合流していたと考えられる。埋土の上層には地山ブロックが大量に含まれており、人為的に埋め戻された様相を呈している。規模は上幅3.7m、深さ0.6mを計る。遺物は古代の土師器、須恵器とともに、施釉陶器甕の体部破片が１点出土している。（第33図４）外面には条線や花文を配した押印が施され、灰釉が薄くハケ塗りされている。胎土は灰色を呈している。中世において甕類に施釉した製品は渥美窯に類例が見られることから同窯の製品と考えられる。

〔ＳＤ5052溝跡〕　新しい屋敷跡の内側をめぐる溝の内、南辺を成す東西溝である。東側に位置するＳＤ5039南北溝によって切られている。本溝跡はそれと接するところで北に曲がり、ほぼ同位置でのびている。規模は、上幅2.2～2.0m、深さ0.6～0.5mを計る。埋土は全体に粘性を帯びた層が多い。遺物は古代の土師器、須恵器とともに古銭〔天聖元宝〕(1023年初鋳）が１点出土している。また、西端部の第２層からカキとアサリの貝殻が大量に出土している。

〔ＳＤ5003溝跡〕　調査区中央部で検出した新しい屋敷跡に係る南北溝跡である。ＳＤ5029溝跡を埋めて整地し、屋敷を東に拡大した時期の東辺を成している。北端部はＳＤ5007東西溝跡に合流し、それは更にＳＤ5029溝跡に連結している。南端部は西に緩やかに弯曲している。南半部では同位置で２時期の重複を確認しているが、新段階（Ｂ期）のものは北へ行くほど浅く

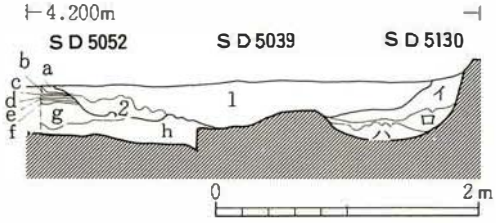
① 調査区南側



① 土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	灰黄褐色 (10YR 4/2)	シルト	焼土粒、炭化物を含む
2	黒褐色 (10YR 3/1)	〃	灰黄褐色土との互層
3	灰黄褐色 (10YR 4/2)	粘土質シルト	地山ブロックを含む

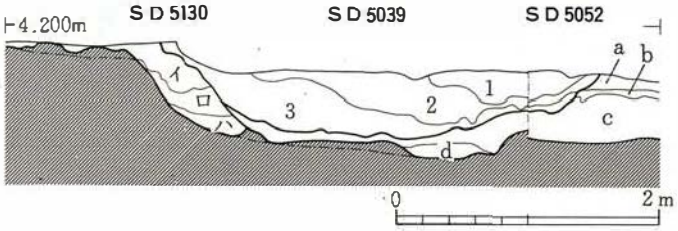
② 調査区南半（南側より）



② 土層観察表

層位	土色	土性	備考
SD5039			
1	黒褐色 (10YR 3/1)	シルト	炭化物を含む
2	灰黄褐色 (10YR 4/2)	〃	にぶい黄褐色土ブロックを含む
SD5052			
a	にぶい黄褐色 (10YR 4/3)	シルト	
b	灰黄褐色 (10YR 4/2)	〃	
c	〃 (〃)	〃	木片を含む
d	黒色 (10YR 3/1)	〃	
e	黒褐色 (10YR 3/2)	〃	炭化物を含む
f	灰黄褐色 (10YR 4/2)	〃	
g	〃 (〃)	〃	酸化鉄を含む
h	〃 (〃)	〃	黄色土粒、砂を含む
SD5130			
イ	灰黄褐色 (10YR 4/2)	粘土質シルト	上部に砂を含む
ロ	〃 (〃)	〃	にぶい黄色土ブロックを含む
ハ	黒褐色 (2.5Y 3/1)	〃	

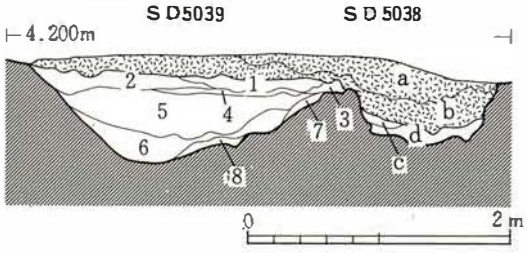
③ 調査区南半（北側より）



③ 土層観察表

層位	土色	土性	備考
SD5039			
1	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	炭化物、焼土粒を含む
2	黄褐色 (2.5Y 5/3)	〃	黒褐色土ブロックを含む
3	黒褐色 (10YR 3/1)	〃	下部に黄褐色土ブロックを含む
SD5052			
a	にぶい黄褐色 (10YR 4/3)	シルト	
b	灰黄褐色 (10YR 5/2)	粘土	
c	暗灰黄色 (10YR 4/2)	粘土	黄褐色土粒を含む
d	〃 (2.5Y 5/1)	〃	暗オリーブ灰色砂を多く含む
SD5130			
イ	灰黄褐色 (10YR 5/2)	シルト	炭化物、焼土粒を含む
ロ	黒褐色 (2.5Y 3/2)	粘土	黄褐色土ブロックを含む
ハ	暗灰黄色 (2.5Y 4/2)	〃	黄褐色土粒、砂を含む

④ 調査区中央付近

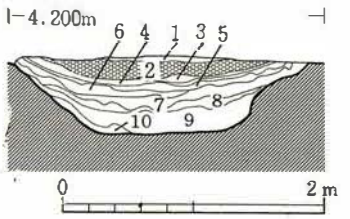


④ 土層観察表

層位	土色	土性	備考
SD5039			
1	灰黄褐色 (10YR 4/2)	シルト	
2	〃 (〃)	〃	焼土粒、炭化物を含む
3	〃 (〃)	粘土質シルト	同色の砂を含む
4	〃 (〃)	〃	炭化物をわずかに含む
5	黒褐色 (10YR 3/1)	粘土	植物遺体を含む
6	にぶい黄褐色 (10YR 4/3)	砂質シルト	地山ブロックを多量に含む
7	オリーブ黒色 (5Y 3/1)	粘土	緑灰色砂ブロックを含む
SD5038			
a	にぶい黄色 (2.5Y 6/3)	シルト	焼土粒を含む
b	灰黄褐色 (10YR 4/2)	粘土質シルト	焼土粒、炭化物を含む
c	黄灰色 (2.5Y 4/1)	粘土	
d	黒褐色 (10YR 3/2)	〃	壁際は砂との互層

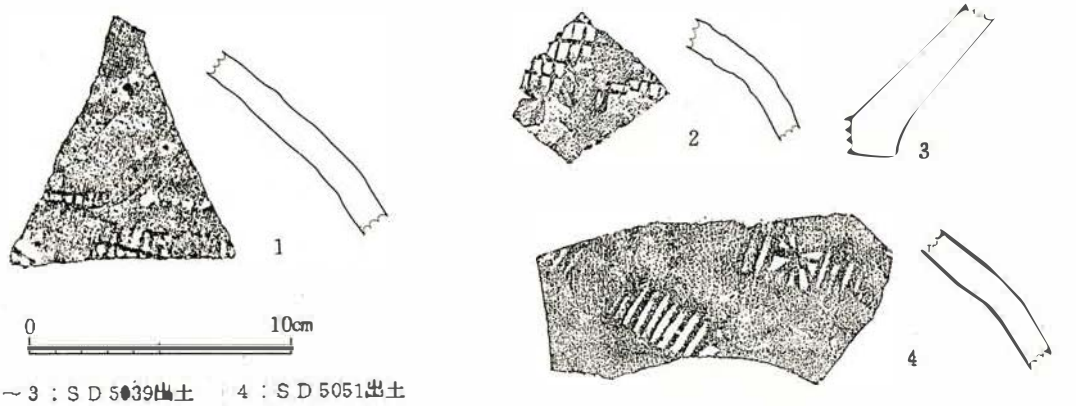
第31図　SD 5038・5039・5052・5130溝跡セクション図

ＳＤ5052溝跡（調査区南西部）



層位	土色	土性	備考
1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	黄褐色土ブロックを含む
2			アザリとカキの殻からなる層
3	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	
4	黒色 (10YR1.7/1)	粘土	黒褐色粘土との互層
5	黒褐色 (2.5Y3/2)	〃	黒色粘土、植物種子を含む
6	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	〃	炭化物、〃
7	黒褐色 (2.5Y3/2)	〃	地山ブロックを含む
8	〃 (〃)	〃	
9	〃 (〃)	〃	暗灰黄色砂との互層
10	黄褐色 (2.5Y5/3)	シルト	地山崩落土

第32図　ＳＤ5052溝跡セクション図



1～3：ＳＤ5039出土　4：ＳＤ5051出土

No	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	備考	図版No	登録No
1	無釉陶器	甕	1層	ヘラナデ	ヨコナデ	格子目叩き	16-22	R-42
2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	16-23	R-43
3	〃	〃	〃	〃	〃		16-24	R-57
4	施釉陶器	〃	2層	〃	〃	卸し目 外面に施釉をハケ塗り	16-20	R-48

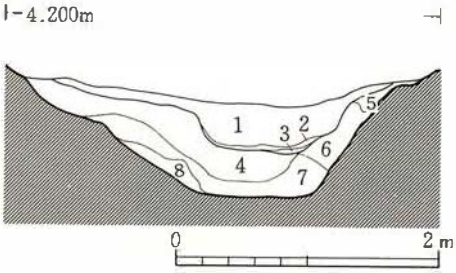
第33図　ＳＤ5039・5051溝跡出土遺物

なっており、北半部における状況は明瞭でない。古段階（A期）のものでみると、規模は上幅3.2～2.8m、深さ1.1～0.9mを計る。埋土は、下層が砂質土、上層が粘質土となっており、自然に埋没した様相を呈している。遺物は、無釉陶器甕、施釉陶器皿、木製の捏鉢・下駄・木製錘・漆器椀・古銭などが出土している。施釉陶器皿（第35図3）は、形態から瀬戸・美濃窯の製品と考えられ、伊藤嘉章氏の編年によれば16世紀後半頃のものに類似している（註2）。古銭は熙寧元宝（1068年初鋳）と永楽通宝（1408年初鋳）である。

（註1）赤羽一郎『常滑焼―中世窯の様相―』1984

（註2）伊藤嘉章「瀬戸・美濃窯における大窯生産」『岐阜市歴史博物館研究紀要2』1988

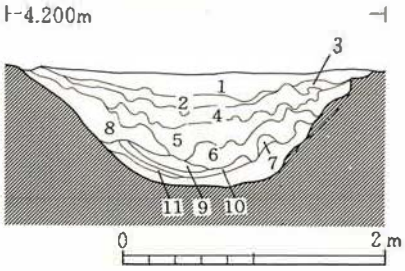
① 調査区南側



① 土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘土	地山粒、炭化物を含む
2	黒色(2.5Y3/1)	シルト	炭を混入する
3	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土	炭化物をわずかに含む
4	〃 (〃)	〃	黄褐色砂層を上部に含む
5	暗灰黄色(2.5Y4/2)	砂質シルト	
6	オリーブ黒色(7.5Y3/2)	〃	地山ブロックを含む
7	〃 (5Y3/1)	〃	暗オリーブ灰砂との互層
8	暗オリーブ色(5GY4/1)	砂	上部に黒褐色粘土を含む

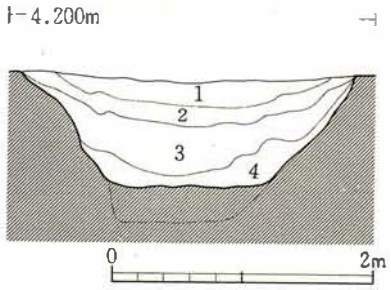
② 調査区中央付近



② 土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	焼土粒、炭化物を含む
2	黒色(10YR2/1)	〃	炭を混入、灰黄褐色土を含む
3	黒褐色(10YR3/1)	〃	焼土粒、炭化物を含む
4	〃 (〃)	粘土	植物遺体を含む
5	〃 (〃)	〃	〃
6	〃 (〃)	〃	暗灰黄色砂質土を含む
7	オリーブ黒色(5Y3/1)	〃	砂を多く含む
8	黒褐色(2.5Y3/2)	粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む
9	オリーブ黒色(5Y3/1)	粘土	砂を多く含む
10	〃 (〃)	〃	暗オリーブ砂を粒状に含む
11	暗オリーブ灰(5GY4/1)	砂	粘土をわずかに含む
12	〃 (〃)	〃	オリーブ黒色粘土層を含む

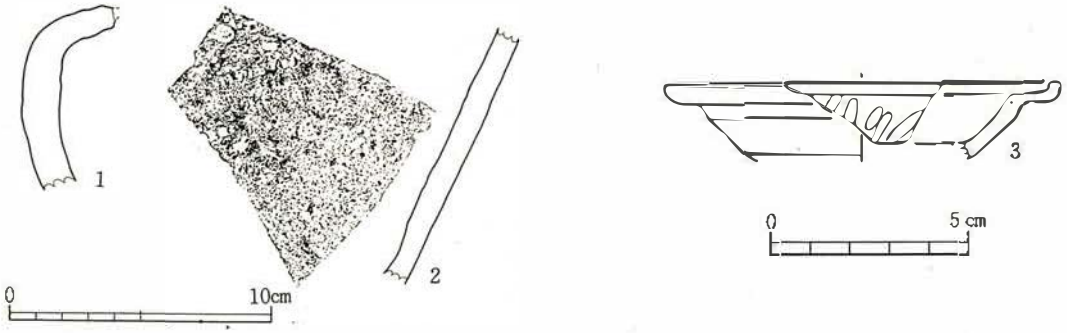
③ 調査区北側



③ 土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	焼土粒、炭化物を含む
2	黒褐色(10YR3/2)	粘土	砂、炭化物を含む
3	〃 (2.5Y3/1)	〃	砂ブロックを壁際に含む
4	オリーブ黒色(5Y3/1)	〃	砂との互層

第34図　ＳＤ5003溝跡セクション図



No	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	備考	図版No	登録No
1	無釉陶器	甕	1層	ヨコナデ	ヨコナデ	ＳＤ5029溝（1層）と接合	16-14	R-40
2	〃	〃	B期2層	ヘラナデ	〃		16-13	R-46
3	施釉陶器	皿	B期1層	ロクロナデ	ロクロナデ		16-31	R-41

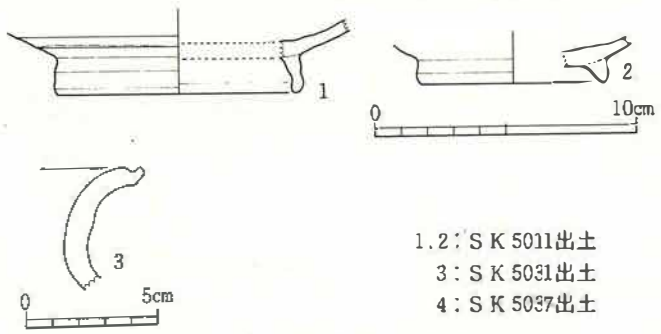
第35図　ＳＤ5003溝跡出土遺物

C．井戸跡・土坑

中世以降に属すると見られる井戸跡や土坑は調査区西半部を中心に分布している。年代を特定し難いものが多いが、中世以降の包含層である第Ⅲ層から掘り込んだＳＥ5019・5020・5021・5022井戸跡や、埋土から中世陶器が出土したＳＥ5008・5026井戸跡、ＳＫ5031・5037土坑などがこの時期のものと把えることができる。井戸跡はすべて素掘りのもので、側を備えたものは発見していない。また、土坑と区別し難いものもあるが、平面形が凡そ円形を呈し、平面規模に対して著しく浅くないものを一応井戸跡と考えた。

〔ＳＥ5008井戸跡〕　ＳＫ5037土坑の南半部埋土上で検出した井戸跡である。平面形は歪んだ円形を呈しており、規模は径3.2～2.5m、深さ1.4mを計る。埋土は、下層に地山の崩壊土が厚く堆積しており、その後人為的に埋め戻された様相を呈している。遺物は古代の土師器、須恵器、緑釉陶器などとともに無釉陶器甕が出土している。

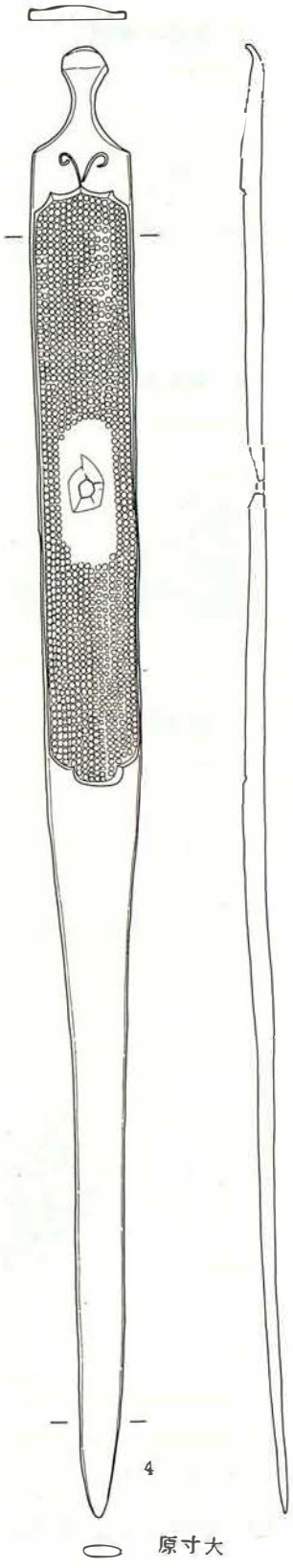
〔ＳＥ5021井戸跡〕　調査区中央部の第Ⅲ層から掘り込んだ井戸跡である。平面形は楕円形を呈し底面は擂鉢状になっている。規模は、長径3.7m、短径3.2m、深さ1.2mを計る。埋土の上層には地山ブロックを大量に含む土が堆積しており、これは本井戸跡の西側に位置するＳＤ5029溝跡の上層に堆積しているも



1.2：ＳＫ5011出土
3：ＳＫ5031出土
4：ＳＫ5037出土

No	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	図版No	登録No
1	灰釉陶器	椀	1層	体部下半回転ヘラケズリ	ロクロナデ	16－3	R－18
2	〃	〃	〃		〃	16－4	R－20
3	無釉陶器	甕	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	16－21	R－50
4	斧		〃	魚々子、据え物象嵌の跡あり		17－7	

第36図　土坑出土遺物



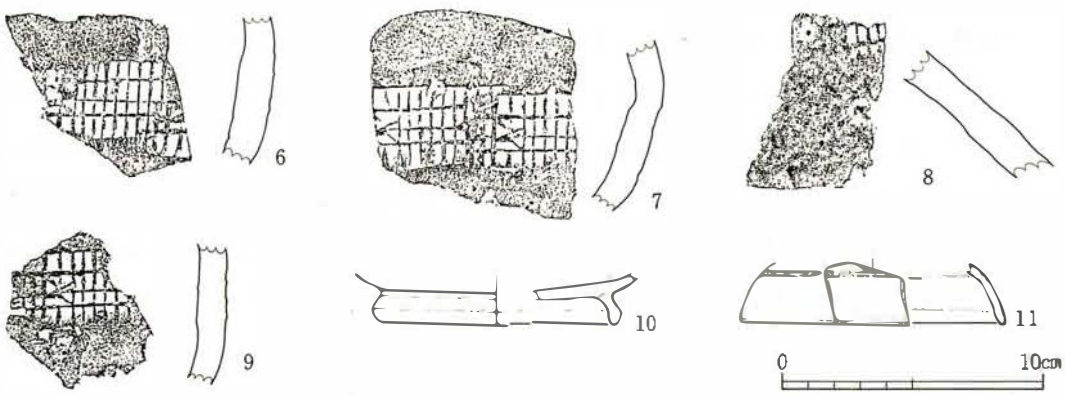
のと近似している。両者は一連の作業によって埋められて整地された可能性が高い。遺物は無釉陶器甕、青磁椀、曲物容器などが出土している。

〔ＳＫ5031土坑〕　調査区西半部の地山上で検出した土坑である。平面形は円形を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。規模は径約３ｍ、深さ0.6m を計る。遺物は無釉陶器壺などが出土している（第36図３）。これは口縁部の破片資料で、頸部がやや直立して口縁が外反する形態を有している。口縁部先端に面取りが施されている。堅く焼成されており、褐色を呈している。口縁部の形態は常滑窯の製品に類似し、赤羽一郎氏の編年によれば12世紀後半のものに類似している（註）。

〔ＳＫ5037土坑〕　調査区西半部の地山上で検出した土坑である。新しい屋敷跡の内側をめぐるＳＤ5042溝跡と連結している。平面形は歪んだ円形を呈し、規模は径約5m、深さ1.2m を計る。ＳＤ5042溝跡とともに自然に埋没した様相を呈している。遺物は銅製品の笄などが出土している（第36図４）。耳掻きは表向きにつけられている。

（註）赤羽一郎前掲書。

1. 天聖元宝　ＳＤ5052出土
2. 熙寧元宝　ＳＤ5038出土
3. 熙寧元宝　ＳＤ5003出土
4. 永楽通宝　ＳＤ5003出土
5. 永楽通宝　ＳＥ5008出土



No	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	備考	図版No	登録No
6	無釉陶器	甕	Ⅰ層	ヘラナデ	ヨコナデ	格子目叩き	16−25	R−55
7	〃	〃	〃	〃	〃	〃	16−26	R−54
8	〃	〃	〃	〃	〃	〃	16−27	R−56
9	〃	〃	〃	底部回転ヘラナデ 高台貼付後ロクロナデ	〃	〃	16−28	R−53
10	灰釉陶器	椀	〃	底部回転ヘラケズリ 高台貼付後ロクロナデ	ロクロナデ	三日月高台	16−9	R−24
11	緑釉陶器	香炉蓋	〃	ヘラミガキ	ヘラミガキ			R−8

第37図　古銭及び遺構外出土遺物

Ⅲ　ま　と　め

今回の調査では、古墳時代から江戸時代に至る遺構、遺物を発見した。この内、古墳時代については現在整理作業が進行中であり、報告するまでに至っていない。また、江戸時代については数基の土坑を発見したにすぎない。ここでは比較的遺構、遺物の検討が進んだ古代と中世の遺構について、昨年度調査地区及び隣接する宮城県教育委員会担当地区の成果を援用して簡単にまとめておきたい。

1. 古　　代

遺構の構成から、Ⅰ道路建設以前、Ⅱ道路機能時、Ⅲ道路廃絶後の３つの段階に分けることができる。

〔Ⅰ段階〕道路建設以前の遺構としてはＳＢ5151建物跡、ＳＤ180溝跡などがある。主軸方向が真北に対して西に大きく傾いているのが特徴である。また昨年度の調査区で検出したＳＢ140・141・245・246・319・320建物跡、ＳＩ 44・185・190・235住居跡などは奈良時代に位置づけられているところからこの段階に属するものである。主軸方向は凡そ真北を向いている。主軸方向が異なる前者(ａ)と後者(ｂ)は時期差を示すと考えられるが、両者の遺構間で重複がないため新旧関係は不明である。しかし、(ｂ)期の方向がⅡ段階の遺構のそれと比較的近似することから(ａ)期が(ｂ)期より古い可能性が高い。(ａ)期のＳＤ180溝跡は埋土の下層から栗囲式に属する土師器や須恵器の甕が出土しており、年代の上限が奈良時代以前に遡る可能性もある。

〔Ⅱ段階〕道路が建設され、機能した時期である。ＳＸ500東西道路が建設された段階(ａ)から、ＳＸ299・300・390東西道路やＳＸ400・5150南北道路が建設された段階(ｂ)へと整備されている。これらの道路の周辺には建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、畝状遺構などが数多く作られている。それらの主軸方向は真北を基準としており、道路跡と重複しているものは皆無である。(ａ)期のＳＸ500東西道路には側溝に３時期の重複が認められ、(ｂ)期の東西・南北道路にも３～４時期の重複が確認されている。なお、10世紀前半に降下したとされている灰白色火山灰は(ｂ)期の２番目に新しい側溝埋土中に認められている。また、これらの道路跡の変遷と周辺の遺構との関連は明確にし難いが、ＳＥ5056井戸跡は、出土遺物や掘方埋土に灰白色火山灰を含むことから(ｂ)期の最終段階に伴うものであろう。

〔Ⅲ段階〕道路廃絶後の遺構としては、大量の遺物を含むＳＤ14溝跡などがある。これは、今回の調査区では検出していないが、北側に位置する県教育委員会担当地区を東西に蛇行し、河川跡と考えられている。

第38図　遺構模式図（古代）

2. 中　　世

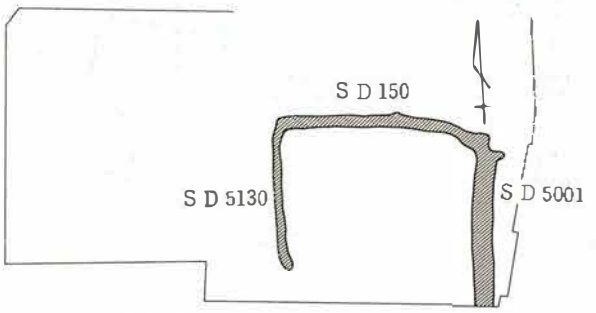
(1) 昨年度の調査で発見した屋敷跡（「新しい屋敷跡」）の東半部を調査した。その結果、東辺を成す溝跡に3回の作り替えが認められ、西辺における変遷と一致する。

(2) この作り替えによって、当初東西44m、南北44mの屋敷が最終的には東西71m、南北44m以上に変化しており、屋敷地の面積が飛躍的に増加したことが判明した。

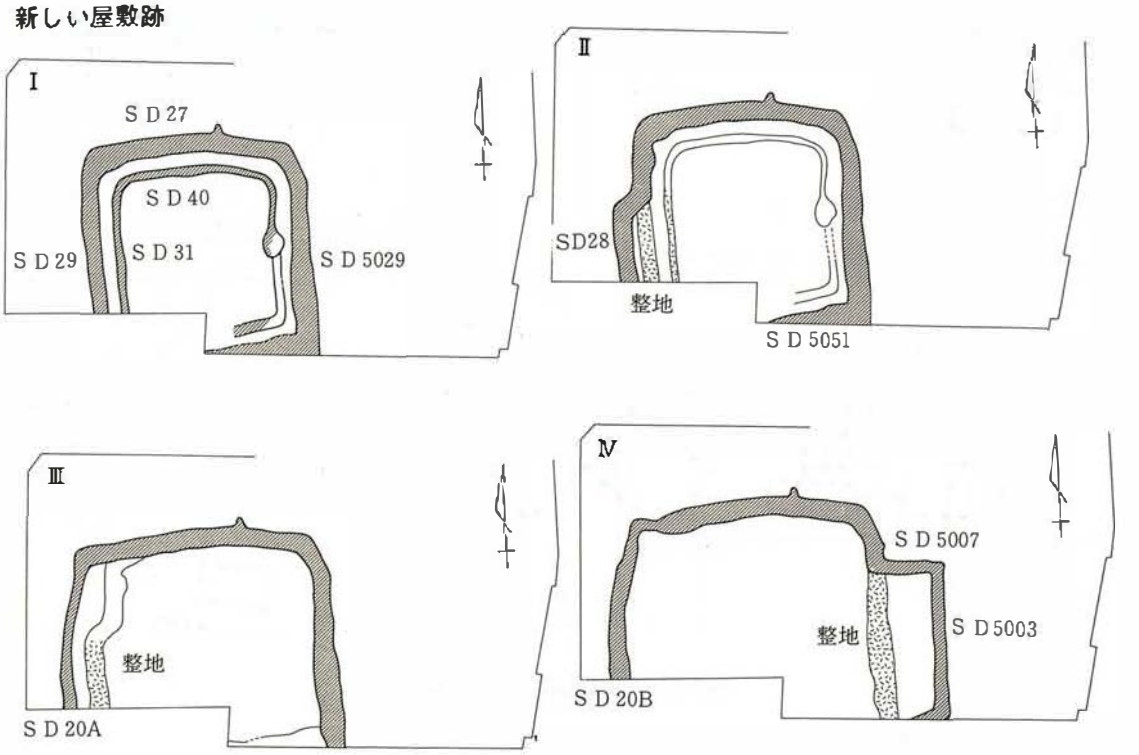
(3) 昨年度の調査では、この屋敷跡の東に別の区画域の存在を推定していたが、調査の結果、一時期古い別の屋敷跡を発見した（「古い屋敷跡」）。

(4) 年代は「新しい屋敷跡」が16世紀頃、「古い屋敷跡」は出土遺物が少ないため不明である。

古い屋敷跡



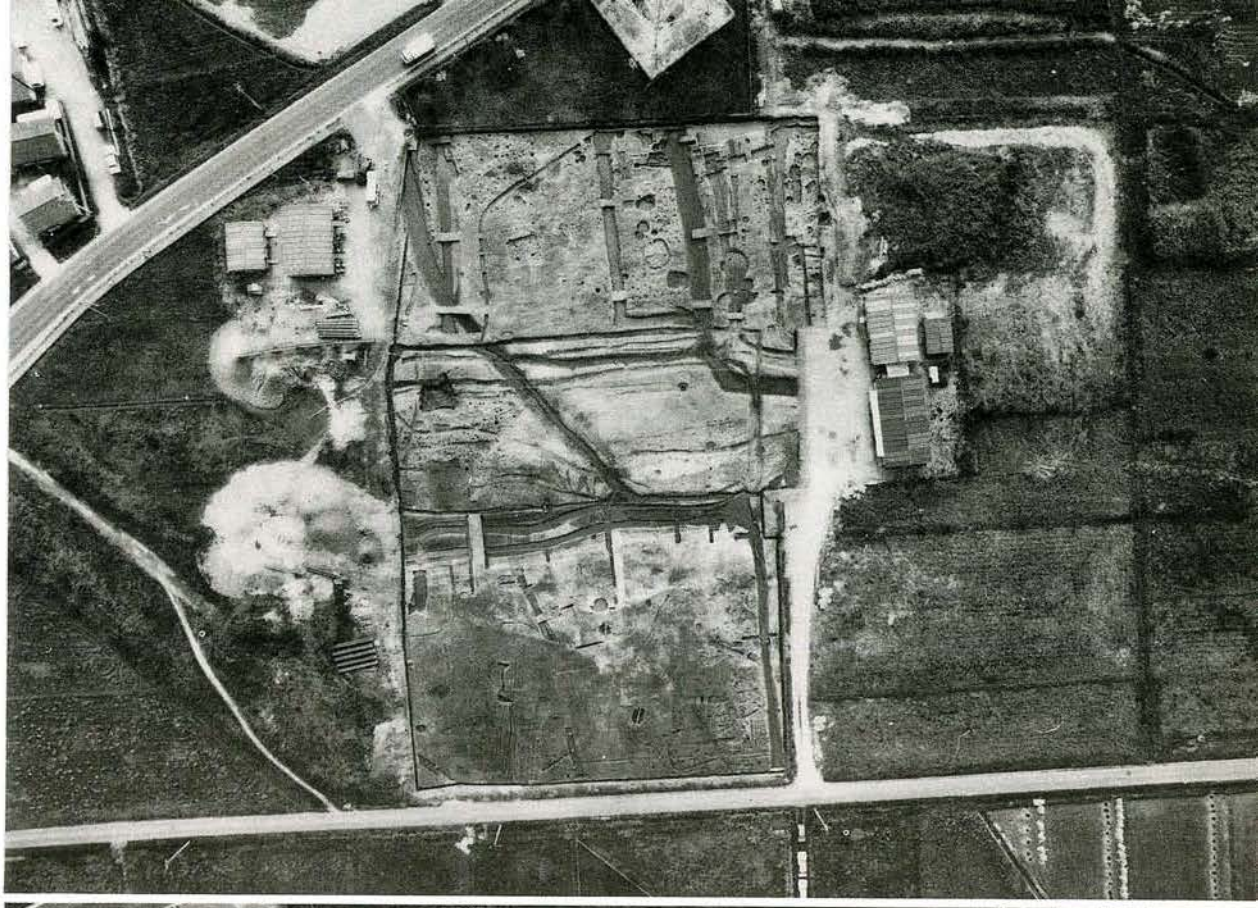
新しい屋敷跡



第39図　遺構変遷図（中世）

〈引用・参考文献〉

1. 宮城県教育委員会「山王遺跡」宮城県文化財調査報告書138集（1990）
2. 宮城県教育委員会・利府町教育委員会「利府町郷楽遺跡Ⅱ」
   宮城県文化財調査報告書第134集・利府町文化財調査報告書第５集（1990）
3. 白鳥良一『多賀城跡出土土器の変遷』宮城県多賀城跡調査研究所「研究紀要Ⅶ」（1980）
4. 宮城県教育委員会・多賀城跡調査研究所「多賀城跡政庁跡　本文編」（1982）
5. 奈良国立文化財研究所「木器集成図録－近畿古代篇」奈良国立文化財研究所史料第27冊（1984）



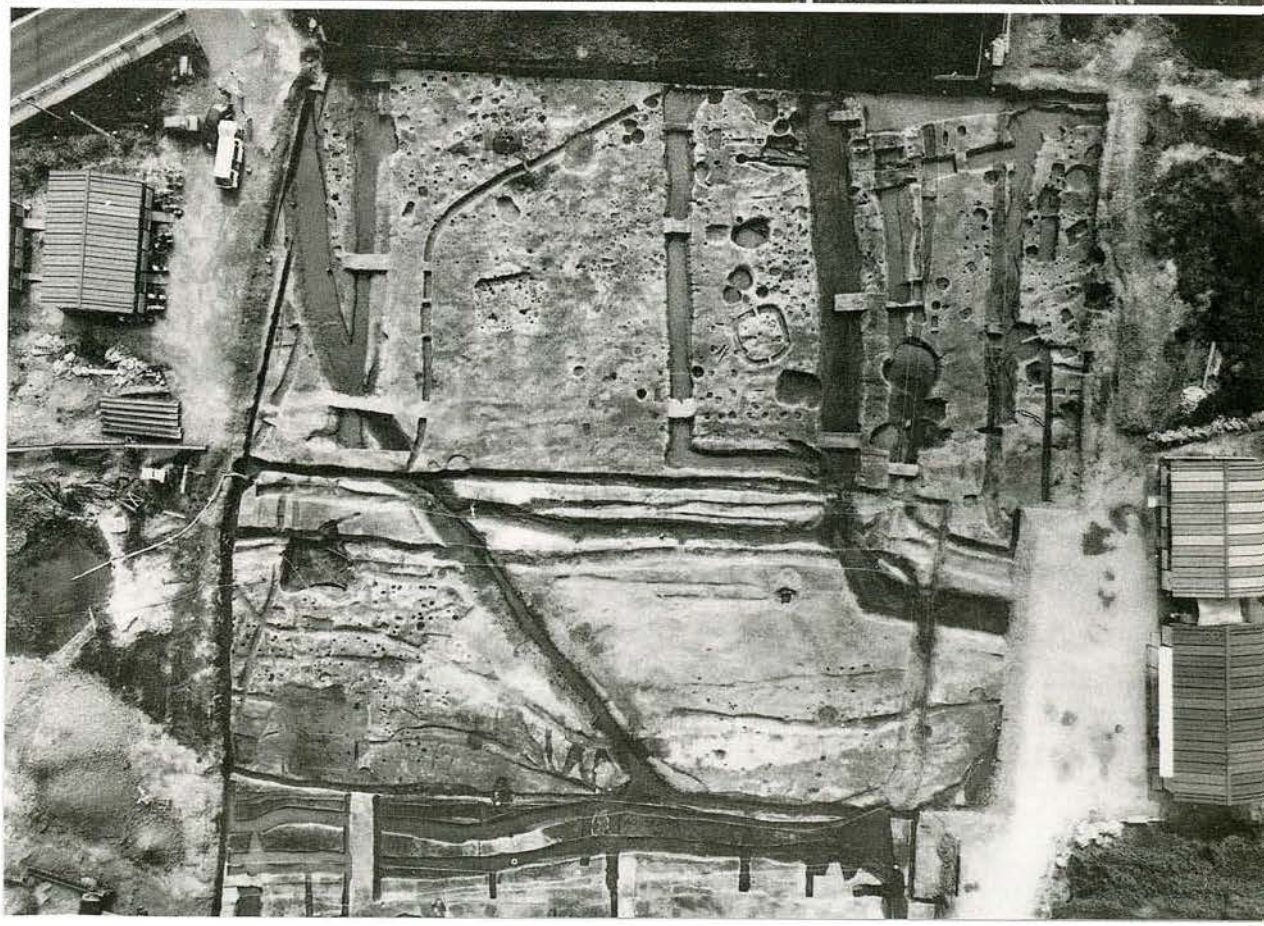
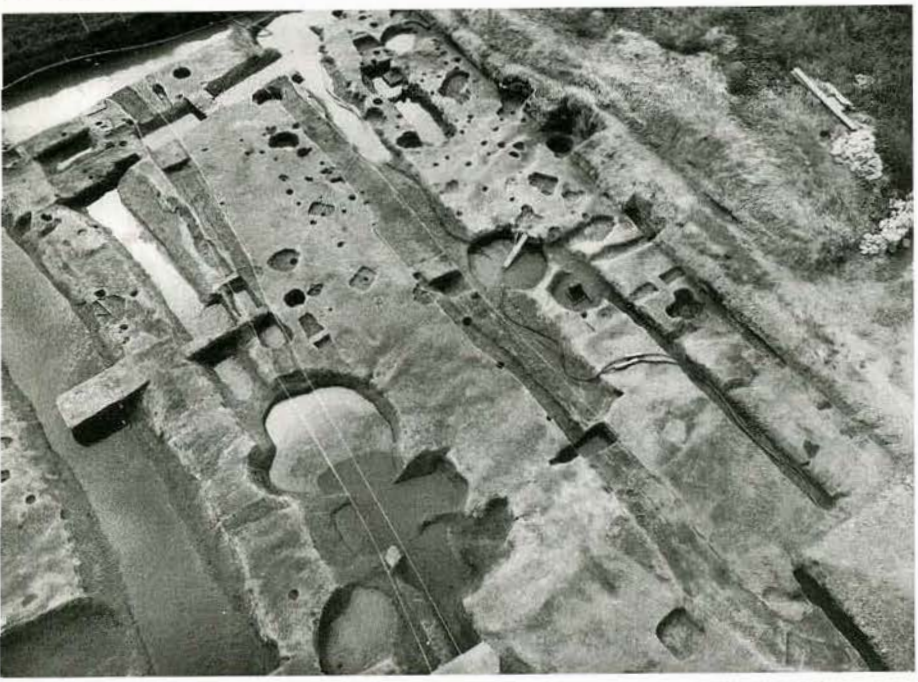


図　版　1

上　調査区全景
下　調査区全景（B・E区）

SX5150道路跡
（南側より）

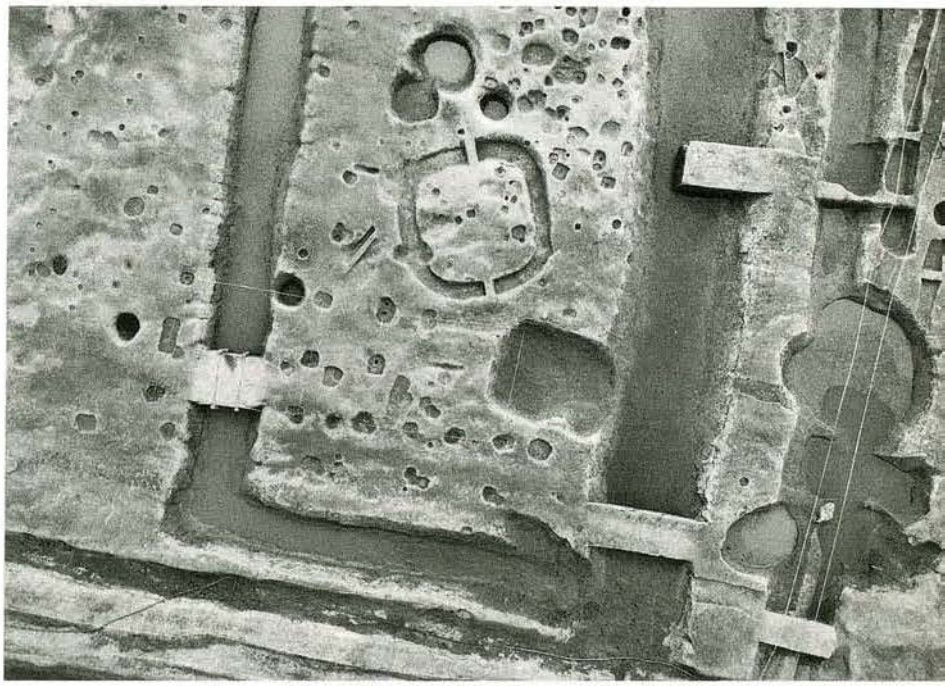


調査区西端部検出遺構
（北側より）

SB5151建物跡
（北西側より）

図　版　2

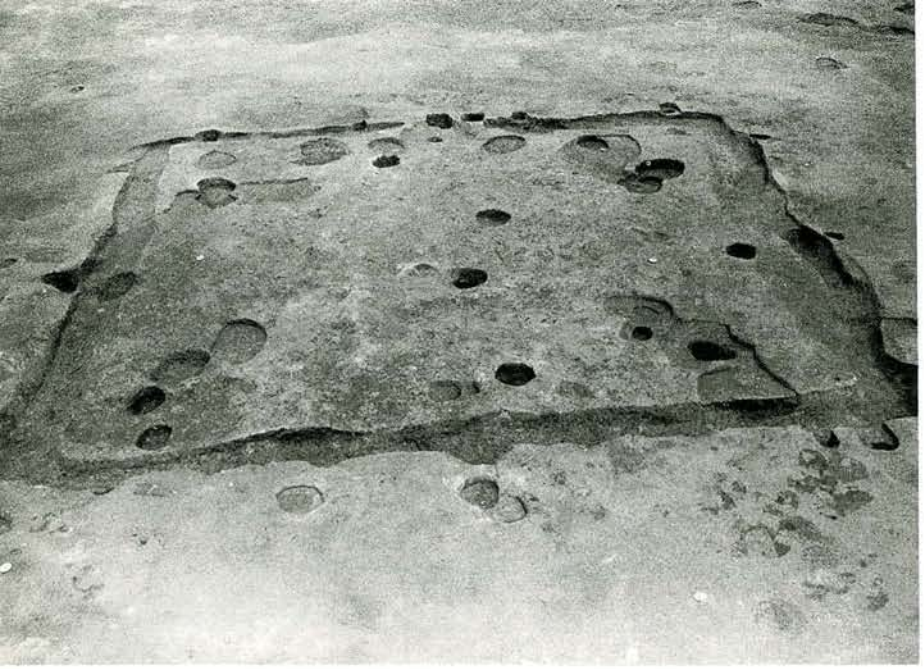
SB5151建物跡
南東隅柱穴



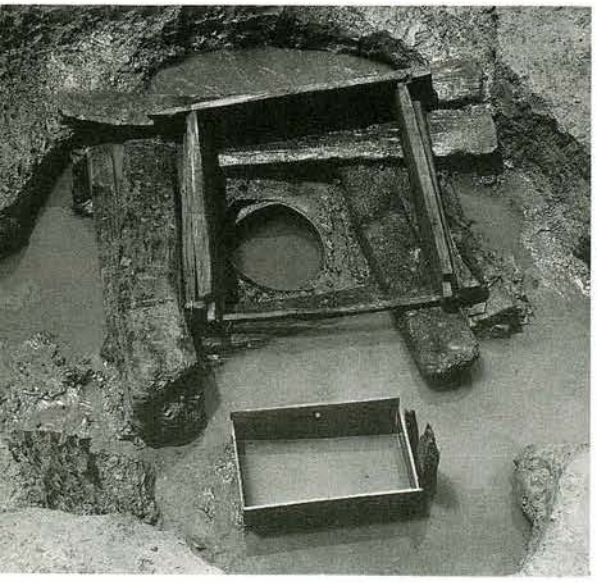
SB5153・5154
5173建物跡
(北側より)

調査区西端部検出建物群 (北側より)

図 版 3



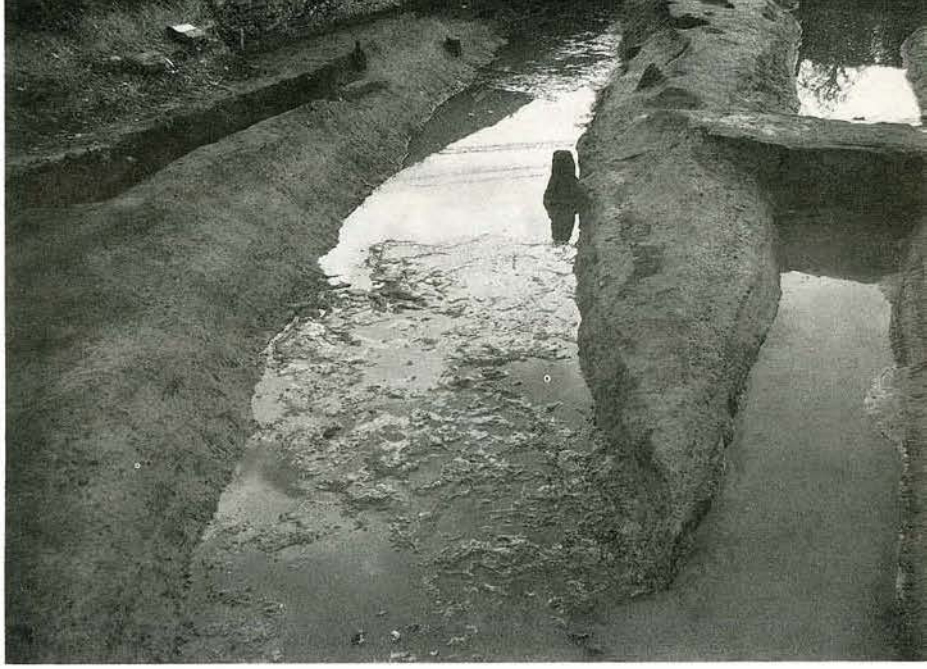
SI 5065住居跡
（南側より）



中・下　SE5056井戸跡

図　版　4

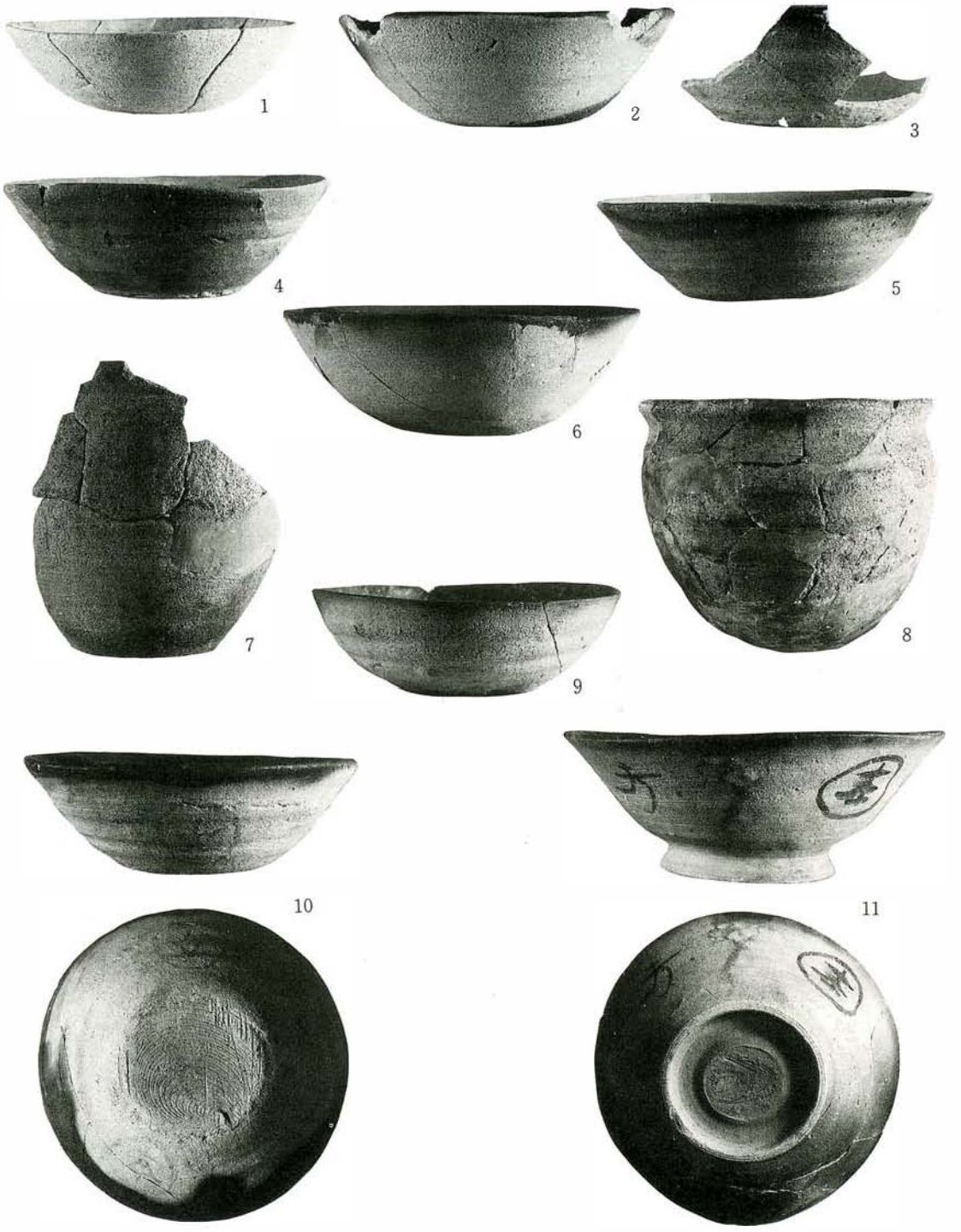
中・下　SE5069井戸跡



SD180溝跡
（北側より）

SD5052溝跡
（東側より）

SK5086・5092土坑（東側より）



1. 赤焼土器杯　SD5064　第6図1
2. 土師器杯　〃　〃　2
3. 須恵器杯　〃　〃　3
4. 〃　〃　〃　4
5. 須恵器杯　SD5064　第6図5
6. 土師器杯　〃　〃　6
7. 〃　甕　〃　〃　7
8. 〃　〃　〃　〃　8
9. 土師器杯　SE5021
10. 〃　〃　SE5056　第11図4
11. 〃　〃　〃　〃　5

図版6　出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

8

9

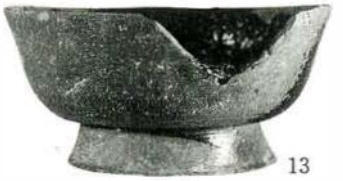
10

11

12

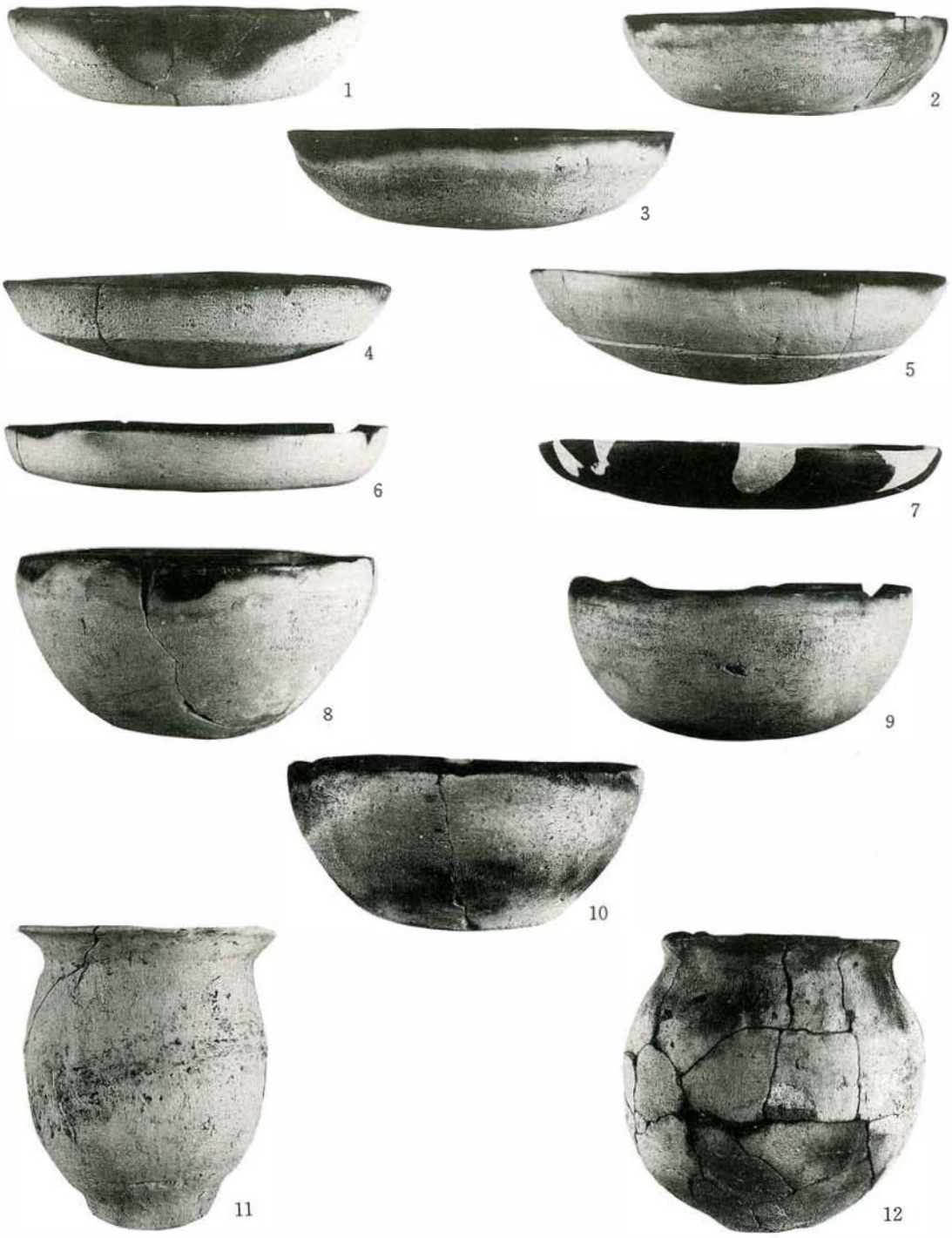
14

15


13

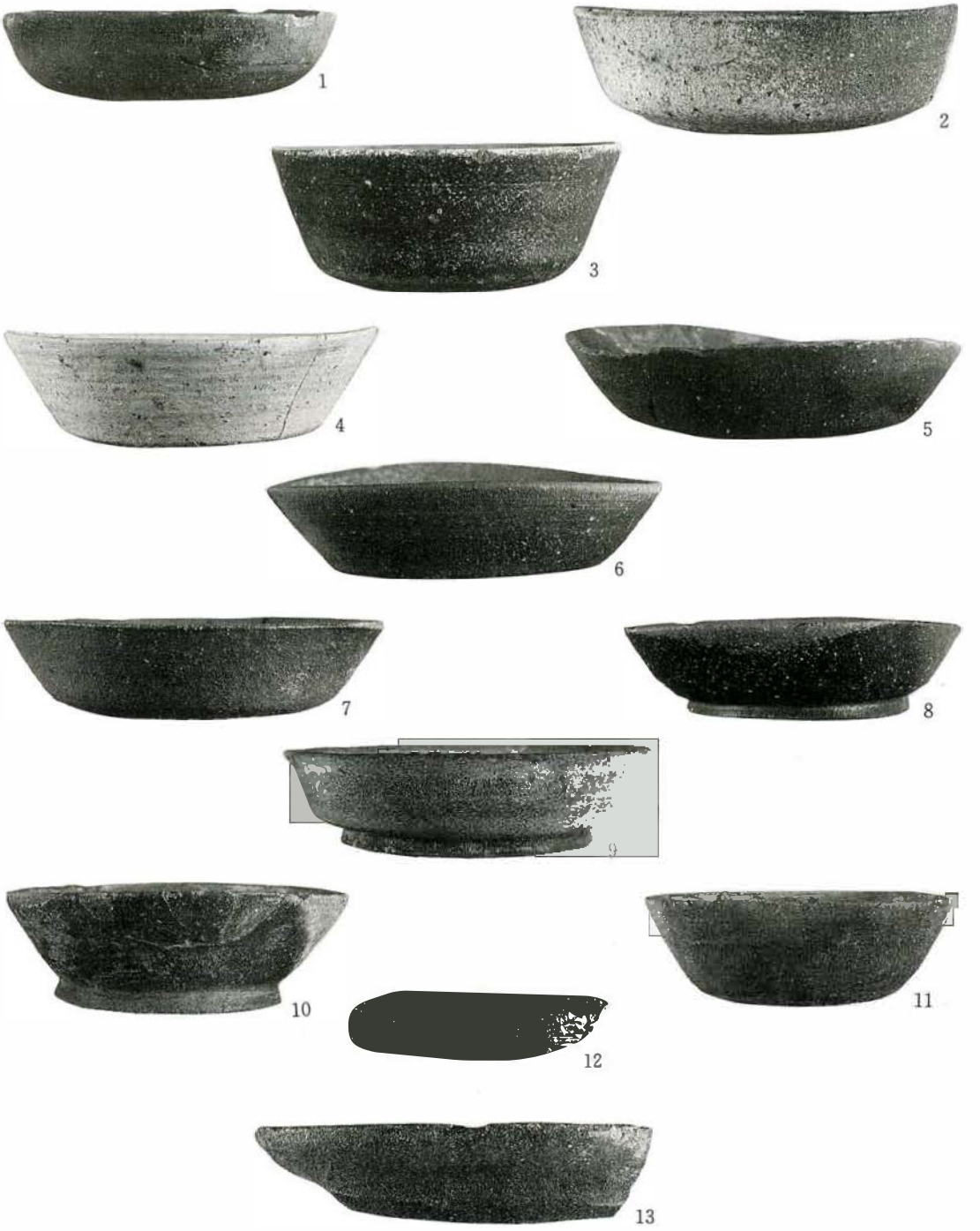
1. 土師器杯　SE5056　第11図1
2. 〃　〃　〃　〃　2
3. 〃　〃　〃　〃　3
4. 〃　〃　〃　〃　6
5. 〃　〃　〃　〃　7
6. 風字硯　〃　〃　8
7. 横　櫛　〃　〃　10
8. 〃　〃　〃　9
9. 用途不明木製品　SE5056
10. 〃　〃
11. 土師器杯　SE5069　第13図1
12. 〃　甕　〃　〃　2
13. 須恵器高台杯　〃　〃　3
14. 丸　瓦　〃　〃　4
15. 箱状木製品　〃

図版7　出　土　遺　物



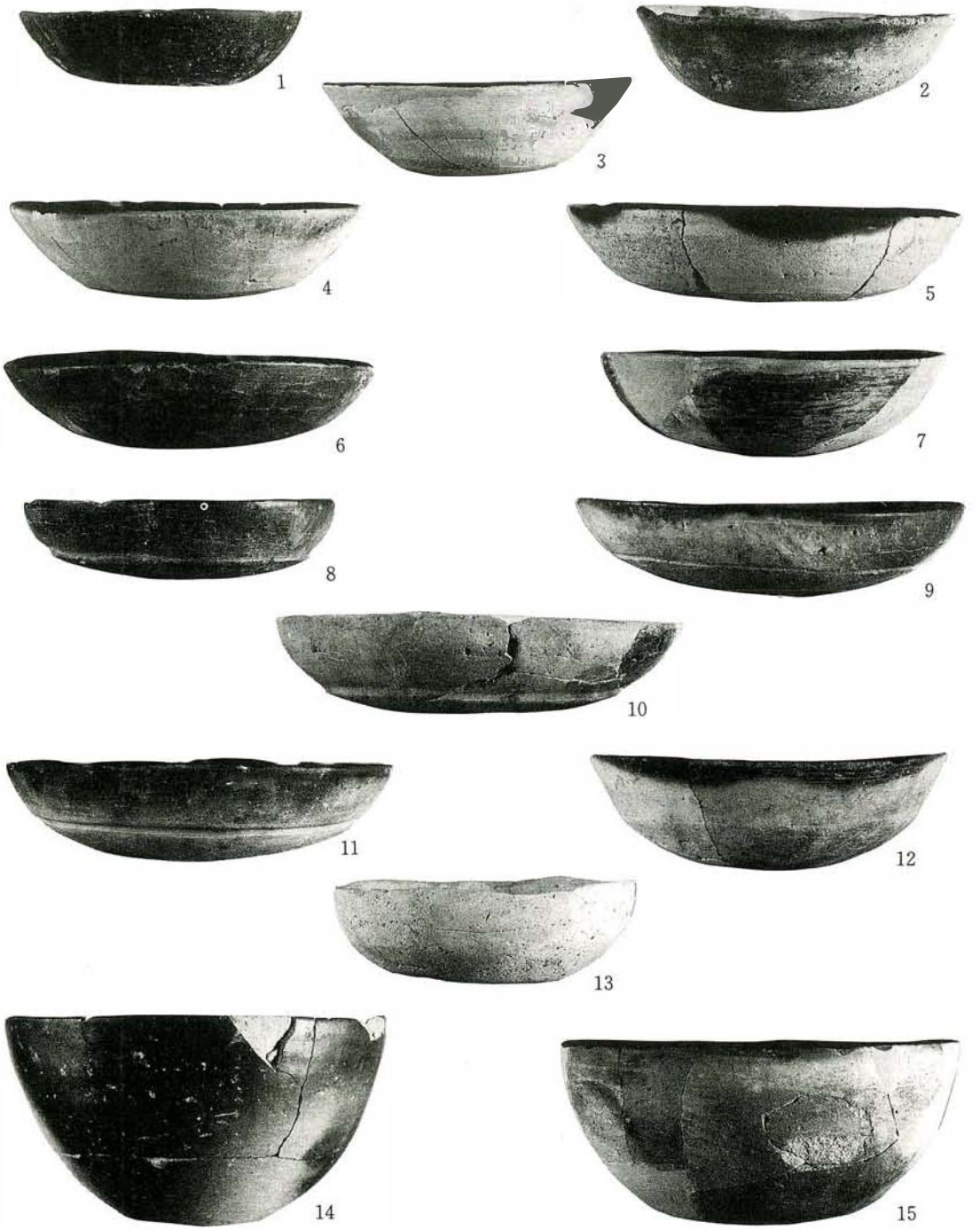
1.	土師器	杯	第16図1	5.	土師器	杯	第16図5	9.	土師器	杯	第16図9
2.	〃	〃	〃 2	6.	〃	盤	〃 6	10.	〃	〃	
3.	〃	〃	〃 3	7.	〃	〃	〃 7	11.	〃	甕	第16図10
4.	〃	〃	〃 4	8.	〃	杯	〃 8	12.	〃	〃	〃 11

図版 8　出土遺物（SD180溝跡）



1.	須恵器	杯	第17図1	6.	須恵器	杯	第17図6	11.	須恵器	高台付杯	第17図11
2.	〃	〃	〃 2	7.	〃	〃	〃 7	12.	〃	蓋	〃 12
3.	〃	〃	〃 3	8.	〃	高台付杯	〃 8	13.	〃	高 杯	〃 13
4.	〃	〃	〃 4	9.	〃	〃	〃 9				
5.	〃	〃	〃 5	10.	〃	〃	〃 10				

図版 9　出土遺物（SD180溝跡）



1.	土師器	杯	第18図1	6.	土師器	杯	第18図6	11.	土師器	杯	第18図11
2.	〃	〃	〃 2	7.	〃	〃	〃 7	12.	〃	〃	〃 12
3.	〃	〃	〃 3	8.	〃	〃	〃 8	13.	〃	〃	
4.	〃	〃	〃 4	9.	〃	〃	〃 9	14.	〃	〃	第18図13
5.	〃	〃	〃 5	10.	〃	〃	〃 10	15.	〃	〃	〃 14

図版 10　出土遺物（SD180溝跡）

1

2

3

4.

5

6

7

8

9

10

11

12

1.	土師器	高杯	第19図1	5.	土師器	杯		9.	須恵器	杯	第19図6
2.	〃	甕	〃 2	6.	〃	〃		10.	〃	〃	〃 7
3.	〃	蓋	〃 3	7.	須恵器	〃	第19図5	11.	〃	甕	〃 9
4.	〃	杯		8.	〃	〃	〃 4	12.	〃	〃	

図版11　出土遺物（SD180溝跡）

1

2

3

4

5

6

7

8

11

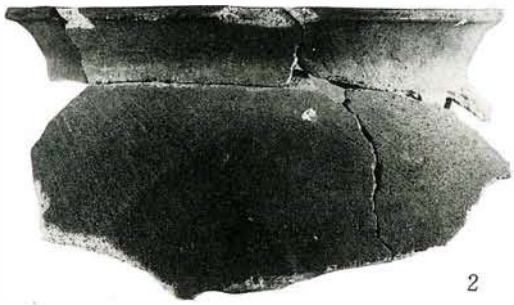
9

10

1.	土師器	杯	第20図 1	5.	土師器	杯	第20図 5	9.	土師器	甕	第20図 8
2.	〃	〃	〃 2	6.	〃	〃	〃 6	10.	〃	〃	第21図5
3.	〃	〃	〃 3	7.	〃	高杯	〃 7	11.	須恵器	甕	第20図10
4.	〃	〃	〃 4	8.	〃	鉢	〃 9				

図 版 12　出 土 遺 物（SD180溝跡）

1



2

4

3

5

1.	土師器	甕	第21図	2
2.	〃	〃	〃	3
3.	〃	〃	〃	4
4.	〃	〃	〃	1
5.	須恵器	〃	〃	6

図 版 13　出 土 遺 物（SD180溝跡）

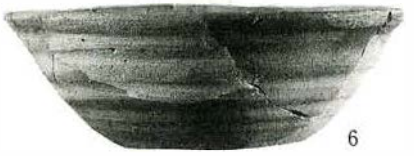
1

2

3

4

5

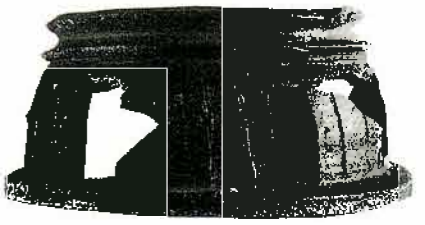

6

7

8

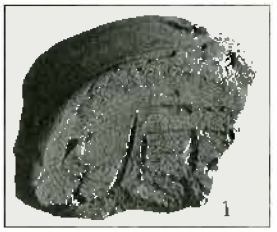
9

11


10

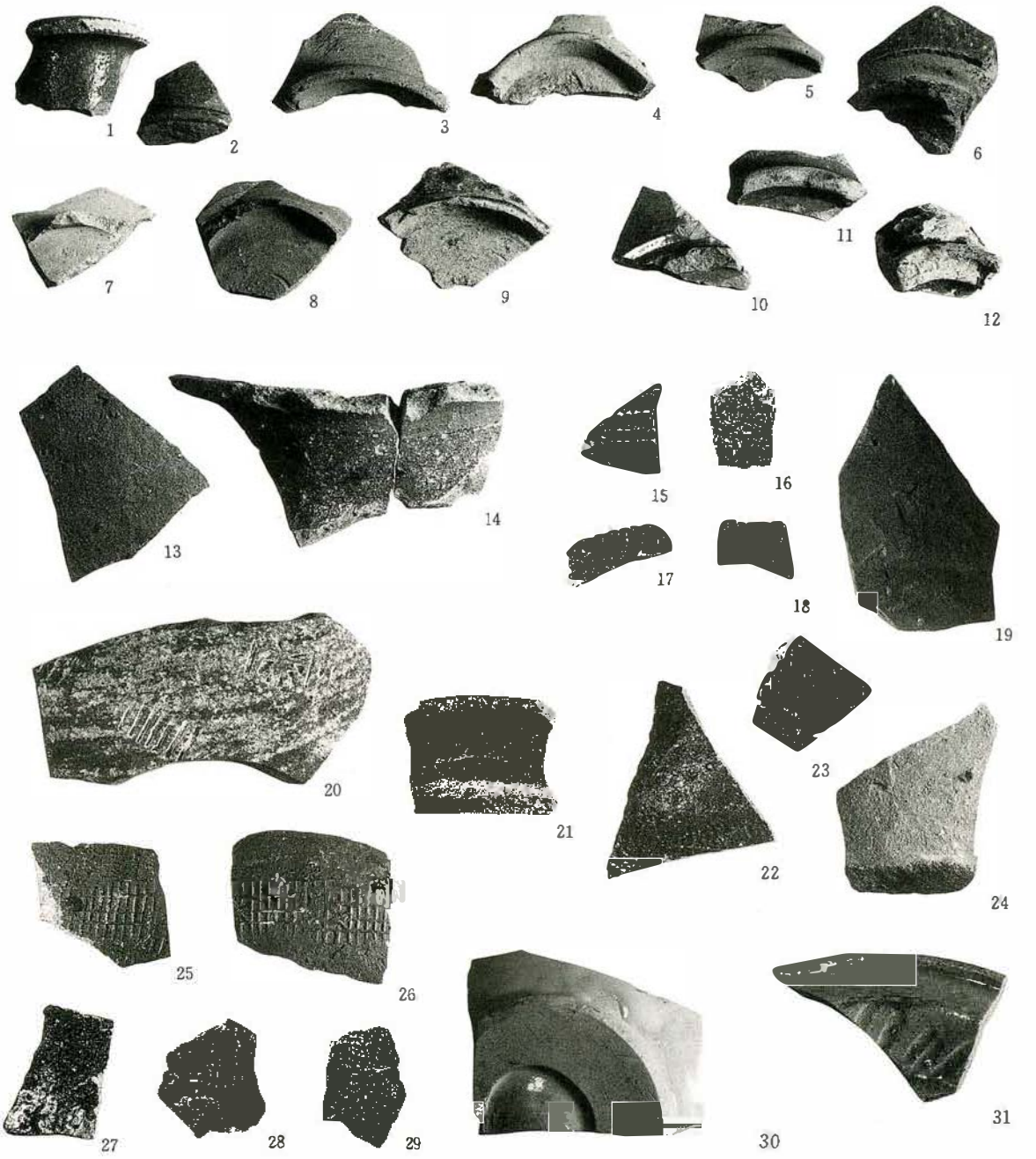
1.	土師器	杯	第22図1	7.	須恵器	双耳杯	第22図8
2.	須恵器	〃	〃 3	8.	〃	杯	〃 6
3.	〃	〃	〃 2	9.	〃	〃	〃 5
4.	土師器	甕	〃 4	10.	円面硯		〃 10
5.	〃	〃	〃 9	11.	風字硯		〃 11
6.	須恵器	杯	〃 7				

図 版 14　出土遺物（SK5086・5092土坑）



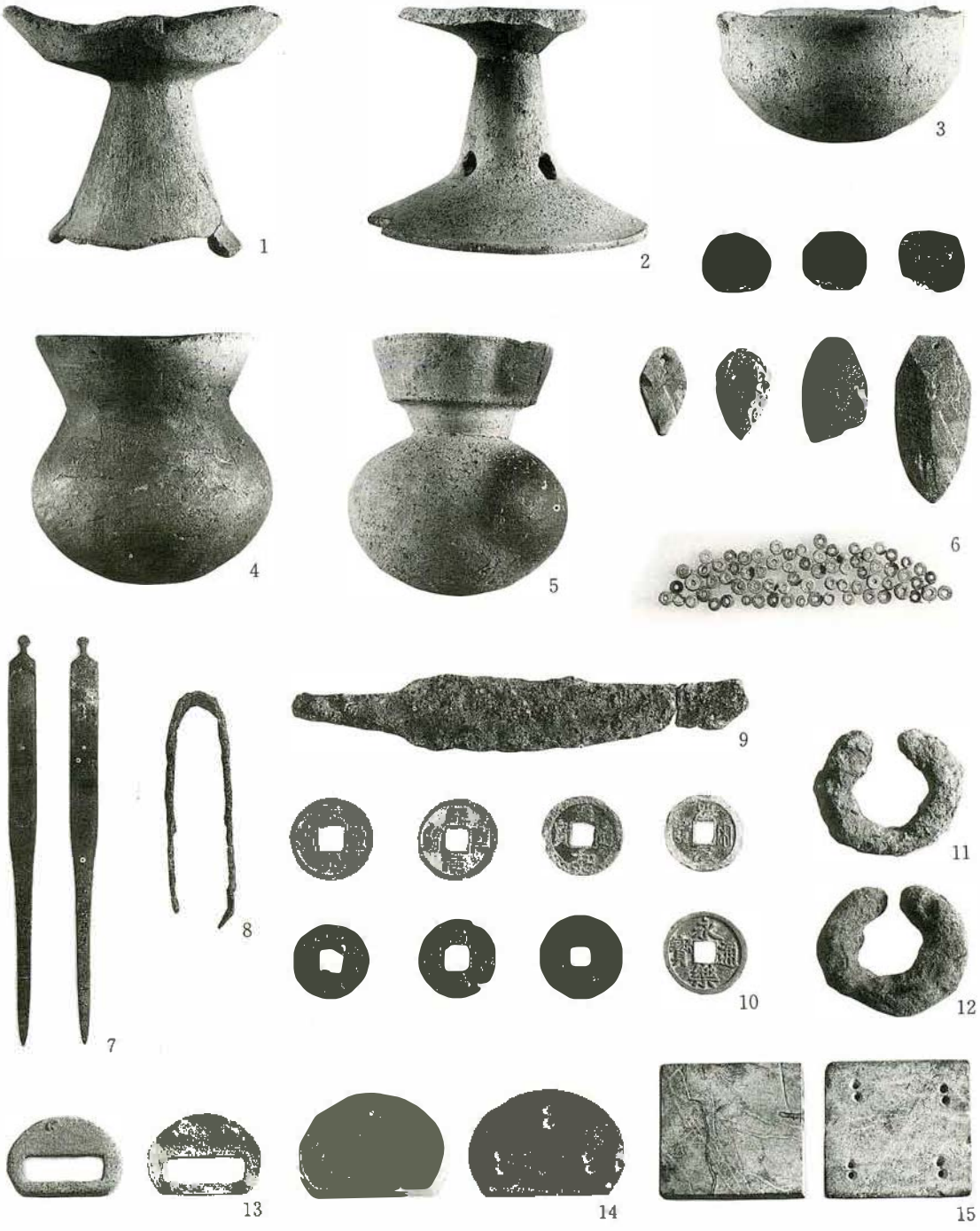
1.	須恵器	杯	SD5038	第23図1	8.	須恵器	蓋	SD5050	第23図9
2.	土師器	〃	SD5110	〃 3	9.	〃	杯	〃	〃 7
3.	〃	〃	〃	〃 2	10.	〃	甕	〃	
4.	〃	高台皿	〃	〃 4	11.	〃	蓋	SD5087	
5.	須恵器	杯	〃	〃 5	12.	円面硯		SD5029	
6.	〃	瓶	〃	〃 6	13.	風字硯		I 層	第23図10
7.	土師器	蓋	SD5050	〃 8	14.	土 錘		〃	〃 11

図版15　出　土　遺　物



1.	灰釉陶器瓶	SD5038	R－11	12.	緑釉陶器椀	Ⅰ層	R－10	23.	無釉陶器甕	SD5039	第33図2
2.	〃 〃	SD5029	R－27	13.	無釉陶器甕	SD5003	第35図2	24.	〃 〃	〃	〃 3
3.	〃 椀	SK5011	第36図1	14.	〃 〃	〃	〃 1	25.	〃 〃	Ⅰ層	第37図6
4.	〃 〃	〃	〃 2	15.	〃 〃	SD5029	第30図1	26.	〃 〃	〃	〃 7
5.	〃 〃	SD5029	第30図6	16.	〃 〃	〃	〃 2	27.	〃 〃	〃	〃 8
6.	〃 瓶	SD5024	R－36	17.	〃 〃	〃	〃 3	28.	〃 〃	〃	〃 9
7.	〃 椀	〃	R－12	18.	〃 〃	〃	〃 4	29.	〃 〃	SD5043	R－52
8.	〃 〃	SD5064	R－38	19.	〃 〃	〃	〃 5	30.	白磁椀	SD5029	第30図7
9.	〃 〃	Ⅰ層	第37図10	20.	施釉陶器甕	SD5051	第33図4	31.	施釉陶器皿	SD5003	第35図3
10.	緑釉陶器〃	SD5064	R－4	21.	無釉陶器〃	SD5031	第36図3				
11.	〃 〃	SD5034	R－2	22.	〃 〃	SD5039	第33図1				

図版16　出土遺物

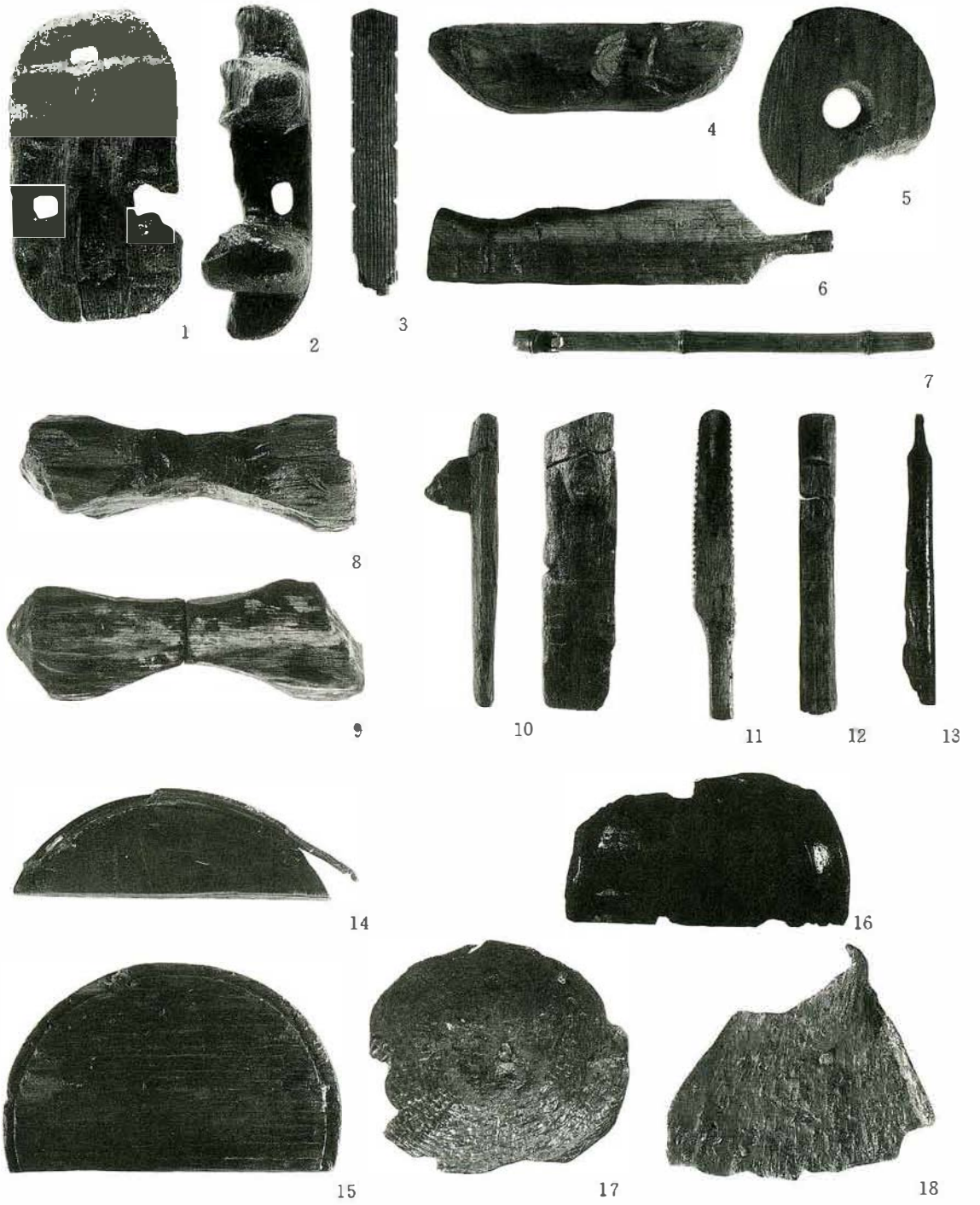


1. 土師器 高杯 Na 層 第23図12
2. 〃 〃 SX5123
3. 〃 杯 〃
4. 〃 壺 〃
5. 〃 〃 Na 層
6. 石製模造品
7. 笄 SK5037 第36図4
8. 毛抜 SB5167 第26図
9. 小刀 SK5114
10. 古銭 第37図
11. 耳環 SK5086 第24図4
12. 〃 I 層 〃 5
13. 丸鞆 SK5081 〃 1
14. 〃 SD5029 〃 2
15. 巡方 I 層 〃 3

図版17 出土遺物

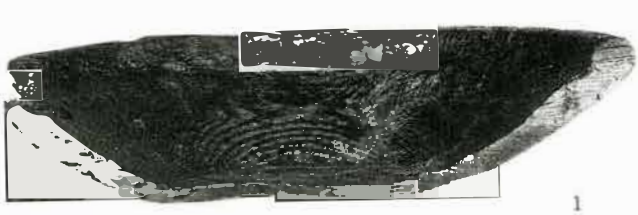
1.	漆器盃	SK5043	5.	漆器椀	SD5003	9.	茶筅	SE5021
2.	〃 椀	SD5003	6.	〃 〃	〃	10.	木製錘	〃
3.	〃 〃	SD5051	7.	〃 〃	SE5008	11.	〃	SD5003
4.	〃 〃	SK5043	8.	柄杓	SK5026	12.	〃	SK5026

図版18　出土遺物



1.	下駄	SD5003	7.	用途不明木製品	SK5026	13.	丸木弓	SD180
2.	〃	〃	8.	木製錘	SD180	14.	曲物蓋板	〃
3.	斎串	SE5021	9.	〃	〃	15.	〃	〃
4.	舟形木製品	SD5009	10.	横斧柄	〃	16.	漆器皿	〃
5.	用途不明木製品	SK5142	11.	串状木製品	〃	17.	笊	〃
6.	〃	SK5026	12.	用途不明木製品	〃	18.	箕	〃

図版19　出土遺物



1

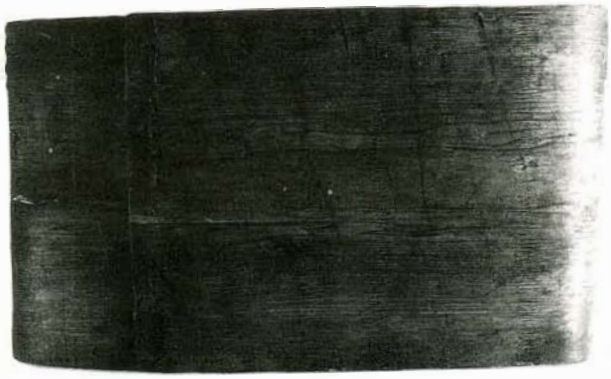
3

2

4

5

6



7

1. 捏　　鉢　　S D 5003
2. 丸 木 弓　　S E 5021
3. 田 下 駄　　S D 180
4. 鋤　　柄　　〃
5. 曲物容器　　（井戸側）S E 5056
6. 〃　　（井戸側下段）S E 5069
7. 〃　　（井戸側上段）S E 5069

図版 20　出　土　遺　物

多賀城市文化財調査報告書第27集

山　王　遺　跡

第10次発掘調査概報
（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）

平成３年３月31日　発行

編　集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
発　行　多賀城市中央二丁目27目１号
　　電　話　(022)３６８－０１３４
印　刷　㈲　伊　藤　印　刷　所
　　多賀城市下馬五丁目１番７号
　　電　話　(022)３６２－０８０５